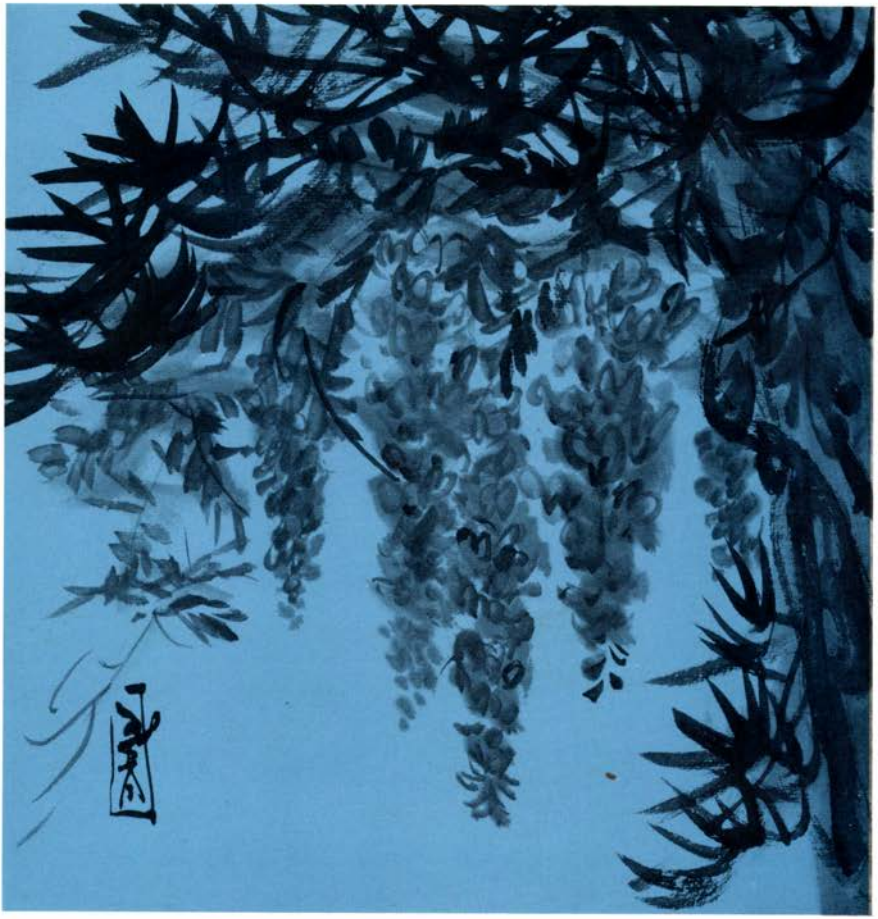
川柳塔

平成元年四月二十五日 印刷
平成元年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七四四号



日川協加盟

No.744

五月号

西尾　栞　叙勲記念川柳大会

日　時　平成元年７月９日（日）　午前11時開場

会　場　なにわ会館４階　金剛の間

大阪市天王寺区石ケ辻町19―12　TEL 06（772）1441

司会　西　田　柳宏子

□ 開会の辞　橘　高　薫　風

□ 祝　辞……日本川柳協会理事長　山　田　良　行氏

□ 題と選者（各題２句　☆締切 12時　☆欠席投句拝辞）

	「初　恋」	小　出　智　子選
	「挨　拶」	波多野　五楽庵 選
	「慌　て　る」	黒　川　紫　香選
	「　絵　」	寺　尾　俊　平選
	「町　内」	広　瀬　反　省選
	「　旅　」	小松原　爽　介選
	「　顔　」	去来川　巨　城選
	「　杯　」	礒　野　いさむ選
事前投句	「自　分」	西　尾　　栞選

□ 閉会の辞　野　村　太茂津

事前投句はハガキに２句・締切　６月20日

（宛先）〒545 大阪市阿倍野区三明町２―10―16

ウエムラ第２ビル　川柳塔社

□ 会　費　2,000円（昼食・記念品・作品掲載誌呈）

□ 祝　宴　8,000円（同会場にて午後５時～８時の予定）

主催　川　柳　塔　社

緩み

西尾　栞

手に汗を握らせた選抜野球の優勝戦も、ドラマチックな逆転劇で終了した。

テレビを見ていて思ったことだが、優勝を目前にした上宮の心の緩みと言うか、安堵感というか、「もう勝った」と思った一瞬のひらめきが、泣くにも泣けぬ結果を招いたのだと思う。二死をとって、あと一人をとればというナインも、見ている者たちも、高々と鳴る試合終了のサイレンが聞けるものと思った。その瞬間の出来事であった。補回戦に入った十回の表の一点を入れた時に――好試合を続けてきた一対一のスコアに一点を加えた時に、油断ではない安心の魔がさしたのではなかったろうか。しかも最終回に、ツーアウトをとったときの緩みが、勝敗を左右したのであろう。

碁や将棋で、よく「勝負は下駄履くまでわからん」ということを言われるが、優位に展開した方が、フト安心感から緩手をうって、逆転負けの苦汁を喫することがある。先輩はよく「港で船わる」という言葉を言ったことを思い出す。長い長い航海を続けて、やっと港へ入り、やれやれと思った瞬間の心の緩みを戒めたのである。

よみうり時事川柳に

あっああああで行方きまった優勝旗

という句が一瞬の情景を伝えていた。

心すべきことにこそ。

座右の句

足跡を残そう砂のあるかぎり　（恵二朗）

私の句

あきらめがついて湯豆腐浮いてくる　田辺炙六

川柳塔　五月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

緩　み……西尾　栞……(1)
平成アレルギー……谷垣　史好……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……(4)
自選集……(31)
■川柳太平記(132)　川柳の群像　尼　緑之助……東野大八……(34)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（四十一丁）……(36)
水煙抄……黒川紫香選……(38)
秀句鑑賞「同人吟……小林由多香……(57)
　　「水煙抄……堀端三男……(61)
愛染帖……橘高薫風選……(58)
〈女性コーナー〉　茴香の花……小出智子選……(62)

平成アレルギー

谷垣史好

元号が新しくなって数ヵ月経った。もうそろそろ慣れていい頃なのに、未だに〝平成〟に馴染めない。馴染めないというより、好きになれないのだ。昭和天皇が亡くなられた一月七日、小渕官房長官が「新元号は平成です」と発表したとき、「何じゃ、これは」と思った、その気分がずっと尾を引いているのである。

現代の感覚からすると、元号それ自体、古めかしいイメージを免れがたいのは仕方ないとしても、平成という呼称はいかにも活力がない。勢いがない。きりっとしたところがない。「ヘイセイ」と正確に発音しにくいのかプロのアナウンサーすら「ヘーセー」と言うのが殆どで、これではよけいにヘナヘナした感じになる。

最初に「へ」のつく文字にろくなものはない、とは言語学者・金田一春彦先生の言である。そんなものかと思って、試みに川柳塔同人名簿を調べてみたら、なるほど「へ」に始

「公　認」……玉置重人選……(68)
一路集「切　る」……辻　白渓子選……(68)
「　鳥　」……西岡洛酔選……(69)
初歩教室……阿萬萬的……(70)
お稲荷さんと縁結び……布施幸子……(72)
柳界展望……(74)
西尾栞氏受章祝賀会……(75)
土居耕花さんを悼む……小林妻子……(80)
竹中綾珠さんのご逝去を悼んで……本田恵二朗……(81)
本社四月句会……桑原喜風……(81)
各地柳壇（佳句地10選／里　小路）……(76)
■5月各地句会案内／99　■編集後記／101……(82)

座右の句

一日の重さ軽さよ日記帖　（薫　風）

私の句

もやもやをベランダいっぱい干しました　小田川　智重子

まる名前は一人もおられなかった。

しかし世の中広いもので、平成（へなり）村というのがどこかの県にあり、新元号にあやかって大々的に村おこしをやろうと、村長さん以下張り切っておられると、テレビが報じていた。その後、どんなアイデアを考えられたか、知る由もないが、まさか、へなり饅頭、へなり餅では洒落にもなるまい。

ところで元号はこれまで天皇が自ら定められた。元号の決定権は天皇にあったわけだ。今回は、民主主義の名の下に、国民参加という形で選考委員が各界有識者から選ばれ、そこで複数の候補があげられ、その中から竹下首相が最終決定を下したと言われる。

明治以後、元号は天皇の諡（おくりな）となる習わしである。亡くなられた天皇が昭和天皇と呼ばれる如く、平成もいつの日か、今の天皇の諡となることは間違いない。それなのに、かんじんのご本人の意見を全く聞かないというのは、まことにお気の毒な感じがする。

いろいろ気にくわん元号ではあるが、決まったものは仕方ない。なるだけ西暦を使うようにしてはいるものの、心中、平静ならざるものがある。

川柳塔

西尾栞選

戦友との話に妻があきれてる
瞬きをせぬ孫が居り侮れず
金貯めるのが趣味と言うどうかなあ
老夫婦どっちからともなく眠る
杖となる向う三軒両隣
ごきぶりの子が可愛くて逃げなさい
せめてもの情け聞かないことにする

笠岡市　松本忠三

振り向くと苦手へ暗示かけられる
補欠でもいいと神様困らせる
階段の踊り場踏絵が置いてある
政治屋の鳩首　倫理で絵にならぬ
平凡な歴史を吊す自在鉤
井の中で四季を平和に生きている

下関市　石川侃流洞

友情をときどき妻が妬いてくれ
還暦を泣かせてくれる娘が二人

兵庫県　遠山可住

ネクタイをきりり心音のぞかせぬ
なんぼ欲しいんやと話のわかる人
体操の好きなキウリの逆あがり
けんらんと化粧が似合う虫媒花

弘前市　波多野五楽庵

楚々と降る雪あり本を買いに出る
たとえばの話が上手い一つ姉
なさけなや野菜工場の冬トマト
鉛筆の芯のまるさに騙される
襟巻のキツネをのぞく無聊感
正直に言えば嘘だと言われそう

岡山県　嘉数兆代賀

春や春五月も愁うこと多し
祈り疲れた指をいっぽんずつ洗う
歓待をされて酸欠症になる
沢庵を刻み老いるとは哀し
なにもない私に蒼い空がある
人生も旅の束の間スミレ咲く

米子市　林　瑞枝

藍がめの匂う故郷の絵に浸る
接点が狂うと描けぬ私の絵
樅の樹は名利に走ったりはしない
たった一つの芸なり左手は負けぬ
エレベーターの別れあっさり垂直に
古文書の眠りを醒ます字が解けぬ

西宮市　西口いわゑ

義理チョコの軽いゲームで終るのか
春風の軽いお世辞にのっている
青畳軽いジョークも通じない
鉛筆の倒れた方にする迷い
ライバルの頑固が実は好きなのだ
ゴーギャンもゴッホもしのぐ孫の絵だ

和歌山市　西山　幸

頬杖のわたしの影と今日も逢う
桜咲くいのちへ涙脆くなる
残り火でかるい火傷をしてしまう
破約した日からの花粉アレルギー
扁平足を敵に知られてなるものか
諦めてから春眠をむさぼる日

倉敷市　野田素身郎

いずれくる定年が来てあわて
雑然としてるが僕には使いよい
落し穴もう一つあり出た赤字
来る春を足踏みさせた寒気団
沖縄のどこかに兄貴の骨がある
好きなものばかりは出ない機内食

松原市　谷垣史好

腸は煮えくり返っている微笑
表情を美事に殺し執事たり
戒厳令の夜は抱き合うほかはなし
一極集中くさやの干物大嫌い
造花色褪せ革命は飾り物
主義は是々非々パンツの紐はゆるい目に

八尾市　高杉鬼遊

したたかに生きて五月の紙かぶと
氷河期へ電気毛布を抱きながら
凡人が釈迦の真似する娑羅双樹
あの世とは背なか合わせの老いなれど
キリンキリンと動物園のことでない

悼　竹中綾珠さん

花よりもひとあし早い雛の雲

竹原市　小島蘭幸

とび乗った電車は春の街に着く
おふくろにしばらく会ってない土筆
顎髭の男　怒ったことがない
父の背に話しかけたらいけません
休み増えても妻とあやとりなど出来ぬ
やせる薬も毛生え薬ももってない

桜井市　岩本雀踊子

あくせくと働く街の鳩ポッポ

年金があるので長生きしたくなる
無言劇妻も貧乏口にせぬ
喜んでくれる妻の肩をもむ
丸腰の父に似合う藁帽子
野心を持たない社内の人気者

伊丹市　樫谷寿馬

冬知らぬままに毛皮へ春が来る
私にも明日があるという救い
平成へ賭ける昭和の尾骶骨
さようならだけは笑顔で交そうよ
三文判の怖さを知っている夫婦
片カナの会社が日本かき回す

町田市　竹内紫錆

孤影しなやかマラソンの覇者
内気な人が賀状だけ呉れ
激動の後編を見たコンタクト
眼科にも観光みやげ贈らねば
図版には雲形定規要る女体
青年棋士おぬしやるなの眼を交わす

大阪市　本間満津子

筆不精だから手紙が長くなる
古いもの古いだけでは捨てられず
長生きをしてねと言われ指を折る
大空へ昇る日までを水の旅
子供の絵だいじなものがひそんでる
十分は進んでいるのとお茶を替え
味のある話訥々故里は春
二人して登った山の高さなど
指輪外して逢いに行きたい花便り
ほんのりと儀式のように春の月
砂吐いた後の怖さを知っている
酒飲んでまんねと悪気露ほども

和歌山市　福本英子

税務署へ勝って来るぞと勇ましく
税務署で与作はお辞儀して終る
リクルート一人挙って美味いめし
結構に聞こえるけれど胃酸過多
爪切りを探す老眼鏡さがす
三月が財布を連れて去りました

岡山県　土居耕花

長い短い橋のある暮らし
梅林に半日逃げて甦る
懸命に昨日を探す犬の鼻
逃げ水に遠く近くの人を追う
走っても歩いても影　影をいとおしむ
箱の中のセピア色の音楽

米子市　林荒介

羅漢さま消費税をどない思わはる
家普請ついでついでで高うつき
感激の花束一輪差しに甦る
保護色の特技がふっと欲しくなり

京都市　松川杜的

余生未だ写経一枚よう書かず
日本の民話へ重吉の声生きている

京都市　都倉求芽

平成だなんて僕には昭和のＰＡＲＴII
饒舌の花が窓辺を奪い合う
おぼろ月影も心をゆるしてる
鬼も蛇よみんな出といで春ですよ
余命とや保険の乗り換え勧められ
夕桜ひとの情が燃えている

米子市　小西雄々

霧晴れるまで根回しを繰り返す
古希近し同居すすめる子が一人
人前で妻には拍手せぬつもり
カラオケは下手でも皮下の血は若い
車間距離つめると疼く膝頭
近くから励ます妻に絵を描こう

大阪市　西出楓楽

自分に嘘ついて渡った橋もある
持って行きようで四角を三角に
プラスマイナスゼロつまらない答だな
忙しいわけのひとつは長電話
自転車の汚れ気になり風みどり
スタンバイばかりが続く花の冷え

和歌山市　松原寿子

広い胸に負けた想いが溶けてゆく
山陰生れおんなの気質みせましょう
耳朶を熱い吐息がはなれない
胸襟をひらいて一気に春を抱く
熱い瞳を支えに闇を抜けてゆく
愛のひと言いつか化石になるだろう

豊中市　田中正坊

花暦　春には春の花が咲く
来年の事は言わない花吹雪
花束に教えておこう花言葉
花言葉一人歩きをして困る
栄光も挫折もあった花手桶
せめて花一杯に妻の七回忌

尼崎市　春城年代

老いの坂また一二段踏みはずす
両手とも使えぬ罰はなんだろう
無為の日を春のこたつで呆けている
うつらうつらと夫の海に漂うて
寝息聞く闇にむかしが舞いおりる
椿の蜜に今朝も番が揃て来る

岸和田市　植山武助

酒飲まぬ男につらい生返事
病名を知っているのは家族だけ
持て余す命でもなし自殺記事
愛してる言葉は要らぬ中之島
保険屋に大事にされている長寿
おばちゃんと呼んで見たくて仏間の灯

奈良県　田中紀美代

哀しいというのに人の腹は減り
連翹のまぶしき垣根で待ち合わせ
試行錯誤ビオラ一輪凜と咲く
睦まじく夫婦別々の事想う
なあなあで二人来た道つづく道
美人でもないのにあたし春の風邪

高知県　赤川菊野

人を愛し花を愛して独り住む
独り言今夜のオカズ何にしよ
矢表に立って男の意地を見せ
節高い姑の指にはかなわない
淋しくて船の汽笛を聞きにゆく
来世にはあなたのコピー抱くつもり

平田市　久家代仕男

糖の出るはなしブラック注ぎながら
焦躁にいよいよ烈し雨の音
気疲れが続くと耳で地虫泣く
宵疲れ妻の欠伸を愛しとも
下駄の緒が切れても祖母の南無阿弥陀

堺市　中川滋雀

言うだけは言わして貰う一円貨
未練まだ背なに残した沈丁花
お通じの話題さらりと老い二人
親類のひとりに変り者がいる
階段の中途で忘れてきたヒント

松原市　玉置重人

血圧をちょいちょい上げに来る絆
押し入れの隅の帽子が捨てられぬ
ナポレオン嫁入り先を考える
自画像にすこし残しておく微笑
血圧と便秘色気のない薬

島根県　堀江正朗

一日をあせってみても闇の僕
文明の音に転げてならぬ闇
床上げへやる気になった脈が打つ
これしきの耳にも眼にも湧く歩幅
箸先に指の感覚ついて来ず

島根県　西村早苗

いい場所にホクロ美人のプロフィール
ご法事へ逢うことない人ばかり
あの時の誤解とけそう空がある
振られてももともと度胸張ってみる
貰い手があればと言うて居るはいる

倉敷市　稲田豊作

これだけが俺の人生酒二合
老いらくの恋一向にぬくもらぬ
忠告の友へうっかり欠伸出る
碁敵は必ず雨の午後に来る
待ち人は来たらず借金取りが来る

八尾市　宮西弥生

嬉しくて呑みすぎました祝賀会
いつもお湯出るくらしの主であり

比べると負けになるから背のびする
レパートリーふえて嬉しい春野菜
三月の時刻表となり仲を裂く

島根県　堀江芳子

念を押す言葉はやわらかいがいい
待つ人がいるからはずむ下駄の音
愛想を背なにももらう美容院
聞きわけの良すぎていとし二日酔い
まな裏に桜ちらほら夫に咲け

鳥取県　両川洋々

墓場まで持って行く気の罪一つ
骨壺の亡妻よ癌とは知らぬまま
下積みへ甘い汁などあるもんか
リクルート総理のスネが疼き出す
大喪へああわだつみの骨よ泣け

鳥取県　羽津川公乃

早春譜いちごに旬は聞かないで
たっぷりのミルクいちごは恋を知る
日曜日妻からもらうスケジュール
窓あけてこっそり過去を捨てました
キャッシュカードも私も赤字恐怖症

富田林市　松本今日子

水鳥とクールな別れする夜明け
たっぷりと柚子湯に浸り愚を溶かす
たっぷりと真綿にくるまり人嫌い
灯り消す一つの迷い切るために

雨の音ひずみがだんだん深くなる

鳥取県　土橋螢

待ったなし生かされている深呼吸
戦いの美徳はみんな忘れ去る
昭和史に七ツ釦の俺がいる
さみしさに鶯も啼く過疎地帯
稜線の雲を飛ばして夏になる

西宮市　奥田みつ子

果てしなく海に降る雪　独りだな
岐路に立ち心を決めた午前二時
愚痴を書くペンはぎしぎし音を立て
頭から英語が降ってくる機内
たんぽぽの絮によろこび言付ける

和歌山市　内芝登志代

粗食でもみんな喋ってうまい飯
買物の味を覚えたお父さん
命日にきっちり咲いた金魚草
明るい声自分ごまかす高笑い
信じてた息子嫁さん連れてくる

和歌山市　後藤正子

真夜中の猫を案じている枕
偶然を信じてしまう坂の道
ひび割れたたまごを庇う春の篭
暗くなる少し手前のポストの朱
深い根を思う春の陽を浴びて

豊中市　安藤寿美子

補陀落渡海の順番ならゆずる
入浴剤今日登別明日別府
うぐいすへ向いも窓から顔を出す
笑うこと無くなり怒ることも無くなり
溜息をききもらさない母の耳

堺市　高橋千万子

前を行く人に会いたくない歩幅
平和かな喜劇のような喧嘩する
後髪引かれて主婦は旅つづけ
金婚式互いに禁句持ちつづけ
靴下のどんな足にも素直なり

鳥取県　川崎秋女

三月の猫が絵になる日向ぼこ
かと言って捨てても置けぬ猫四匹
逃げて来た僻地タンポポ咲いていた
男だろ逃げたらアカン男だろ
サヨナラはぜったい言わぬことにする

松江市　恒松叮紅

エプロンの白が眩しいオバタリアン
男嫌いのピアスが光るオバタリアン
星占いに少し凝ってるオバタリアン
隠居所が出来て子離れした炬燵
嗚呼平和かいわれ族やもやしっ子

松江市　柳楽鶴丸

日々是川柳三昧老化防止
濡れ落葉になりたくない柳画描く
底抜けに明るい男の出雲弁
合衆国ジャパン州ではありません
キュッキュッキュッ何が悲しい鳴き砂よ

松江市　舟木与根一

胃袋で消化の悪い消費税
権兵衛の知恵は烏にすぐ解ける
年金をつぎ込み五反の田を守る
貧乏は遺伝して行く孫の数
パチンコの戦果もマーチほどでなし

高槻市　辻白渓子

釣れそうな気がして見てるのが粘る
灯を消すと大胆過ぎることを言う
付合いが悪いと知らず聞合わせ
万歩計散歩の範囲知っている
相談をひとりの時に持ち込まれ

米子市　石垣花子

逢うまでにお福の面に変えておく
青白い男を山は寄せつけぬ
ポストにも言いたいことがたんと有る
埋め立てた海がいつかは謀叛する
絆一つ乾いた音を立てて切れ

米子市　野坂なみ

成績はどうあれ輪から抜けられぬ
花ごよみ古りて約束せわしない
約束へその日桜になっている
岬の丘でお地蔵さんは海を見る

離れても訛は胸で温める　米子市　菅井とも子

バックボーン老父が元気で居てくれる
似顔絵に私の欠点つかまれる
中程に座って丁度良い茶席
傘さしてはねもあげずに来た草履
小休止電話で嫁に指図する　米子市　青戸田鶴

遠回りした幸がやってくる
水仙のけなげ海辺を離れない
富士さんへ土牛の目から出る妖気
いつの間に骨をぬかれた反対派
喪があけて菜種の花が一面に　米子市　田中亜弥

夜明けまで思案もち越す沈丁花
許すこといっぱいあって呆けられぬ
岬から春を先取りしてしまう
友の数吟味してから増やさねば
運というつぼみを持って飢えている　米子市　寺沢みど里

ご大喪せめて茶粥の朝とする
早春の鏡に明日の絵を写す
満開の今をのがせば絵にならぬ
それも縁で母子が同じカルテ持つ
文の日が過ぎても来ない片便り　米子市　政岡日枝子

なつかしい顔も苦労をした顔だ
さくらさくら時々夫を置きざりに
負けられぬ石を握っておりました
椅子ひとつぐらい男なら蹴ろよ
橋の上で恐い話につかまった　奈良市　宮口笛生

春の章食欲がある木の芽あえ
四月吉日猫が五匹も子を産んだ
赤いのが似合う六十越えてから
ばち当りみんなそういうそう思う
即席ラーメンうまいと思う独りの日　富田林市　藤田泰子

古タンス七つボタンが入ってる
才たけて見目うるはしき恋仇
雑音は聞かないことにしてる耳
第三の青春たっぷりの持ち時間
一枚のはがきに点る心の灯　和歌山市　牛尾緑良

泳がねば雑魚の群れにも遅れそう
一面の菜の花絵の具買い足しに
浮雲が消えるまで見る無職かな
暮れ残る墓標故郷は過疎の風
桑畑つづく故郷が見当らず　今治市　矢野佳雲

釣り書きに三日習うたのも加え
阿呆なこと言うてるうちはまだ達者

日本晴れ昨日のことはもう言わぬ
コンパスのゆくのは丸い道ばかり
バイトでも気高く見える緋の袴

唐津市　浜本義美

搗布刈る影は女子よ波荒るる
首相まだ閉店する気おまへんか
恍惚の亡母を叱った罪いくつ
雛人形たまにゃスーツも着てみたし
ふるさとの歩くスーパーまだ達者

呉市　林野甦光

逆吊に干されズボンが懺悔する
扁額の「誠」うすれて来た歴史
背伸びしただけに生きてる影法師
花が散る女の過去を追うように
看護婦と目が合い煙草の味が落ち

大阪市　津守柳伸

空腹を包む笑顔もサービス業
ちっぽけな店舗にもあるフロンガス
寝不足は昭和と私読んでから
なにごとも無かった月が美しい
忠告の重さに触れる蹴躓き

大阪市　古川美津枝

猛毒のお米でしたといわないで
お似あいの人にまた逢うしょうぶ園
歯の治療痛がりですと言っておく
申告もすんだあくびの心地よさ

六文に三パーセントわすれない

尼崎市　春城武庫坊

ロケットが回ると地球軋む音
胃カメラで腹の黒さをさぐられる
デッサンの美女から春の風が湧く
汽車という言葉が旅情かきたてる
ＪＲちっとも旅情浮かばない

岸和田市　福浦勝晴

喋るだけ喋ってうどんすすってる
生きのびてああ喜びも哀しみも
幸せな家のまわりに春の風
遮断機の向うも冴えぬ顔で立ち
申告をすませた顔が赤ちょうちん

島根県　榊原秀子

人間不信　花と対話の日が続く
どうしても無理ですハイといえません
くる筈のない便り待つ菜種梅雨
気が付けば土筆が背伸びする構え
お陽さまの方は向くまい春帽子

島根県　錦織文子

遠い娘と語る言葉を月と居る
月曜の静けさも良し三世代
掃き終えて仔犬と話している独り
美しい切手集めている孤独
花だけを咲かせて四季の無人駅

島根県　小砂白汀

鬼百合も咲かねばならぬ五月かな
けんめいに真珠育ててたち割られ
咲き初めて沈丁あやうく雨をよび
ほろ苦く昭和を送る蕗の薹
春一番本音聴きたい鈴を振る

倉吉市　渡辺独歩

水甕の水の嫌いな紙コップ
炭を焼く男は与作と限らない
遠野には宮沢賢治の風が吹く
四月馬鹿一円玉に花が咲く
托鉢のここから無欲の風となる

松原市　佐藤藤子

猫に餌やるなと風の立て看板
よく笑う男は嫌い月見草
またしても後悔をする両の耳
自信家のヘソがぺこんと窪んでた
改名をしても私はわたしだろう

奈良市　天正千梢

歯切れよい早口にしてやられ
ひと片の雲A少年の目に涙
新幹線得をしました富士が見え
「すべてを捨てる」その情熱にやけどして
骨のない障子に紙を張っている

倉吉市　奥谷弘朗

かちかちの心で心の窓が覗けない
物事はやれでやるよりやるでやれ
古里に自慢の伯耆富士がある
北風に乗せてしまった小さい嘘
人の和を信じ切ってる三代目

美禰市　安平次弘道

片道切符持ってあなたの妻になる
Uターン都会の水は苦かった
中流を自認弾まぬ労働歌
逆光線少し怯えるシルエット
播かぬ種は生えぬとくじを買い続け

名古屋市　越村枯梢

大正の仲間一人減り二人減り
待ち呆けポストは口を開けたまま
自分史の挿絵は漫画ばかりなり
割勘で屈託のない友と酌む
足袋十文娘でっかくなりました

西条市　片上明水

政治家に悪い手本も居て困り
十字架のように工事は辻を掘り
せめて春　核の話はやめましょう
横丁も春は余分な灯がともり
父の背を流して達者たしかめる

唐津市　田口虹汀

心地よく迫るぞ春の足音が
疑えば妻の扉がまた閉じる
傍に居た春にゃ気付かぬ遠歩き
子が束になって我が家に春が来る

味の好い返事は一寸舌障り　唐津市　仁部四郎

春五月緑の闇へ分身を
電話線切って入った花の闇
恋の闇探り合う手で灯を点ける
今日一つ闇に夫婦で嘘を捨て
終列車送って闇を縫い直し　唐津市　久保正敏

列島の一木一草喪に服す
正義派の亀が兎を起こしてる
一げんの客を断わるのも差別
逢いに行くポケットベルは置いて行く
ゼッケンをつけるとオシッコしたくなる　和歌山市　若宮武雄

平成よ守り抜けるかこの平和
この齢を独り生きたい意地っぱり
春雨に濡れて生気をとり戻す
蝶の舞い観てラーメンを食う独り
万葉に名高い山のつつましさ　大阪市　江城修史

石女は悲しからずやひな祭
忘却と風化の中の遠い人
父ありき観艦式と特高と
隙のない男と話す気の疲れ
むなしさは絆のもろさちぎれ雲　寝屋川市　稲葉冬葉

二面性どちらも私生きている
再会の道づれ雨の二月堂
保守的な答を嫌う少年期
トンネルを抜けると十八の乳房
にくいにくいと憎みとおした水の性　和歌山市　神平狂虎

語り明かそう谷間の雪の解けるまで
本も鏡もやがては僕に背を向ける
堕ちてゆく自分が見える春の酒
吹きさらしの路地が心の隅にある
春の坂星を背負って逢いにゆく　大阪市　藤田頂留子

気候まで人間じみて早合点
いたわりがジンと来るのも年やろか
しっぺ返し一人よがりの浅い読み
知るだけのお経でローソク消えるまで
スパイスの一つにストレス書き加え　玉野市　小谷仙山

疑いは晴れたははれた菜種梅雨
鼻薬ききすぎくしゃみ止らない
まだばれぬ嘘が大手を振って行く
何色を着ても影法師は黒い
腹割って話すは猫と庭の松　姫路市　人見翠記

大喪の日一億の涙雨
国中を沈めるように冬の雨

リクルート政治屋の仮面皆剝がし
人情に棹さして濁流に呑み込まれ
雑炊を食べて舌鼓打つも年

箕面市　坪田紅葉

スカーフの赤の色どり風の道
諦めているけど赤い花が好き
売れ残りとにっこり笑う器量よし
ここまでは昭和と共に生きた春
梅さかり甘酒茶屋の話好き

高石市　浅野房子

満員電車ギャルは平気で脚を組み
誤字脱字連ねてこわい手紙来る
ほめられていても言葉の裏の刺
寝たきりのこれも絆か姉看取る
昭和史を辿れば向い風に会う

大阪市　大塚節子

花見ほど腰の上がらぬ梅だより
書道展表装ばかり褒めて出る
鰻召せヘルスメーター気にせずに
そばちょこの手のぬくもりやもどり寒
木津川に京の風情のゆりかもめ

寝屋川市　岸野あやめ

露の世と思えば嘘も美しい
一日一善毎日嘘をつきながら
長の字が哀れ中間管理職
肩書きを捨てた五月の陽の長さ
岬には五風十雨と陽炎と

弘前市　斉藤劦

末っ娘よお嫁になんて行かないで
青空の鼓動伝える凧の糸
凧あげの風が気になる授業中
甘酒がとても美味しい雪灯籠
雪解けの泥が親しく付いて春

富田林市　田形美緒

帰るまで消ゆることない港の灯
家中の明りを灯す寂しい日
灯が入り五人囃子が唄い出す
たっぷりと話して来ます父の墓
春樹読む青い心に触れたくて

竹原市　森井菁居

思い切り翔べ青春のパスポート（長女・次女ヨーロッパへ）
セールス万歳自作自演の日々新た
丘を我がものにみどりよ太陽よ
リゾートを探す週休二日制
連休よ自称文士へ風光る

藤井寺市　吉岡美房

啓蟄で出たら昭和が消えていた
朧月影もおぼろについて来る
春の雨一層愛を深くする
春だから恋の噂を丸く聞く
タレントが近所に住んで居る自慢

宇部市　平田実男

気疲れがしてます境界線の杭
この指に止まってくれる孫二人
過疎にした責任問うている民話
補聴器をつけストレスを溜めている
これぽちの遺産へもろい血の絆

寝屋川市　江口度

税務署をみんなけげんな顔でで る
抜くよりも染めた方がと三面鏡
喜寿米寿女を通すコンパクト
花時計火傷する女数えてる
マグマそこまで国東の水うまし

西宮市　林はつ絵

強くなるノラの話に手をたたく
足跡がとうに化石となっている
飽食の猫に鳴らない鈴残る
本物の出来ぬ努力のガラス玉
いもづるの神話眼鏡を拭いて聞く

熊本市　永田俊子

石けりが下手で相手に届かない
姑の足袋洗って愛憎もみほぐす
議論はそこまで薬缶が噴いてます
露の世の争いに啼く鳩時計
鳥が水呑む天を仰ぎ地に謝して

岡山県　小林妻子

物忘れ行ったり来たりして終る
飄々と生きてボヘミアンの命
人形になり切り老母の日向ぼこ
老い悲し影が先へと行きたがる
鳩の出る帽子が欲しい日のあせり

宝塚市　丸山よし津

陽の縁で曽祖母の爪切ってあげ
開発に森の鴉も街へ来る
イヤホーンでジャズ聞いている子の無口
スーパーの刻んだ葱で足るひとり
近道も覚え春には二年生

出雲市　園山多賀子

雪柳相性のいい白い壺
或る悟り得て春眠に妥協する
皿を割る勇気もなくて貝になる
遅桜大器晩成願成就
自負と自我弥次郎兵衛も揺れ通し

出雲市　吉岡きみえ

大金をひろうたはなし風にのる
希望を抱いた蛇の早とちり
雑草の花芽に本気で恋をする
いやな奴向うから来る橋の中
もうひとつ笑いとまらぬわけがある

尼崎市　奥山美智子

風みどり人も自然も息をする
ジャンケンポン勝っても負けても何もなし
ポケットに信じてならぬデマがある
逢ってきた余韻の傘を干している

鉛筆がときどき謀反して困る

奈良県　長谷川　春蘭

ししおどし朽ちて音なき余寒かな
裸木のふかき眠りや春隣
水たまりよければ匂う沈丁花
つつましきくらしの知恵か蕗の薹
木の芽道まず上り坂下り坂

和歌山市　垂井千寿子

石庭の心を春の陽が温め
作戦も無い母さんの愛確か
友達としての隠し味わかる
菜の花や古里の風遠くなり
言い訳を許す炬燵の火が温い

倉吉市　野中御前

弟しか乗ってくれない免許証
窓ガラス拭いて近づく春を待つ
冬の蠅恍惚としてたじろかず
お金だけ貯めて老婆は愛に飢え
紅椿男へ釘を打ちたがる

高槻市　河瀬芳子

夢うつつ確かに聴いた銭の音
春風へコトンと僕の絵馬落ちる
次の世で添う約束は無い夫婦
4Bで書くシナリオがよく喋り
引き際の美学をおもう落ち椿

大阪市　黒田真砂

洗濯を干す春の歌口ずさみ
春恋し人心地する花時計
コーヒータイム二人の刻は幻か
炎ゆるものあって明日の夢楽し
抜き衣紋匂う衿足春衣

和歌山市　福井桂香

さくら草その手で夢を摑むまで
また嘘をついてしもうたシクラメン
春うらら私のめがね曇りがち
鏡見る五十は五十の顔をして
羅針盤正しいことが好きらしい

富田林市　片岡智恵子

易の灯の言葉にまどう乙女たり
渡れない橋の向うの虹を追う
たっぷりの眠り昨日の罪消える
探鳥会　極楽の園みて遊び
会釈だけのそれは静かな愛だった

和歌山県　寺田裕美

もうちょっと食べたい程に盛ってある
部屋中に灯りが点り「サクラサク」
合格をすれば鉢巻き親がしめ
置きかえただけで一気に喋る石
対岸の桜へ言い訳などしない

倉吉市　渡辺菩句

この家の空気吸うたびワハハのハ
空箱と判っていても蓋を取る

スワン貴婦人白をバッチリ決めている
ちょんちょんと逃げて鴉が舌を出す
天の声待っております日向ぼこ

和泉市　西岡洛酔

それぞれの顔それぞれの職通勤車
ノンフィクション今日を主役の茜雲
無為無策一番電車の隅に座す
嘘許す妻で五十路の坂に居る
塩送る敵が俺にも一人居る

五所川原市　加藤彩人

職業を出稼ぎと書くかかしたち
田を売って戸籍都会の塵にする
出稼ぎの駅の夫婦啞となる
妻子恋う出稼ぎ今日も明日も酒
篤農も出稼ぎ村に唄がない

大阪市　板東倫子

大喪の日は雨でよし雪でよし
飴か鞭か一億円がバラ撒かれ
買うて税貯めても税がつきまとう
情報過多の中でウロウロ生きている
幕引けば鳥居が消えた大手品

大阪市　神夏磯典子

春の陽を執拗に追うはぐれ蝶
休んでる時はおしゃれな縞模様
少しずつ花に馴染んできた煉瓦
健康法割算上手になりました

影法師みどりの風は弾み出す

八尾市　宮崎シマ子

青い空白木蓮がとどきそう
我田引水故郷の山が美しい
探梅へ観光課長お茶を汲む
どの趣味も切れぬ絆の縄電車
御多分に洩れず目医者と歯医者にも

八尾市　鷲見章

碁会所の一人テレビに所在なし
陽炎を海へ押し出す埋立地
町内に能筆が居て謝す近火
たこ焼に企業秘密の塩加減
訥弁をそのまま綴るラブレター

大阪市　中西兼治郎

競馬紙へ貧乏ゆすりが赤で丸
子供部屋母にショックな本があり
脈はもうおまへん貸した金のこと
ばったりとポックリ寺で友と会い
畑仕事きっちり帰る腹時計

東大阪市　森下愛論

年度末カラ出張で飲む話
猫抱いて肯定否定ないおんな
食って飲み喋ってほんなら去にまっさ
早いもんでんなと読経の中休み（亡妻一周忌）

大阪市　河井庸佑

新しい古いも無いと人の道

内緒話聞いて忘れることにする
沈黙が続き時計だけすすむ
平行線たどったままの夜が白け
大阪市　吐田公一

突き放す中に情けを込めた父
真直ぐに歩いた父の道標
切れ端を無駄なく使う母の針
謙遜な言葉に敵意見え隠れ
鳥取県　清水一保

火消壺に僕の炎も入れておく
平成に昔変らぬ一升瓶
微震でも僕のマグマも時に噴く
平成のおじさんという孫が出来
岡山市　川端柳子

歌ってる方が眠たい子守唄
子らも子に手古ずっている呆れてる
カイダンの下で吉報持つことも
生活の全部をあげる夫が病む
鳥取県　林露杖

リクルート俺がセンセは大丈夫
温泉の宿で老妻何か拗ね
四面楚歌妻は味方と信じよう
きみもまた嗚呼恍惚の人になり
和歌山市　堀端三男

耳順古希節目いくつも越えた春
ここで怒ると男の沽券にかかわるぞ
現金払いでないと買わない貧乏性
峠越えると亡母のふる里ある港
和歌山市　桜井千秀

薄笑い否定肯定どちらとも
サンタルチア声張り上げる丘の道
割り込んで貧乏ゆすりしなさんな
ドッコイショ別に言いたい訳じゃない
岸和田市　芳地狸村

日曜はみんな楽しむ城まつり
ふれあいのお城まつりに花の雲
義理チョコが持って帰った不協和音
パチンコの玉が嗤っている世相
高槻市　川島諷云児

終着が近づき積荷軽くする
幕を引く日までピエロを演じ切る
三度目の遺言書いて生きている
誤解したまんま別れた戎橋
静岡市　薗田獏沓

居眠りが下車駅わかる定期入れ
黄昏の道に魚を焼く匂い
働いた蟻に静かな冬が来る
足早やの癖がなおらぬ停年後
寝屋川市　柴田英壬子

勇気ある発言地元がついている
スランプを出雲の神にうったえる（出雲大社）
四月馬鹿に本気でプラン練っている

陰徳陽報老いてますますほおの艶
守口市　羽原静歩

朝礼の五百羅漢にハッパかけ（幼稚園）
縄のれん酒の肴にリクリート
献血車霊柩車とすれ違い
ユーモアの底でたっぷり哭いている
仙台市　川村映輝

仙台市やっぱり支店クラスなり
影法師さえわが意のままならず
占師殺人犯は占わず
戦争反対何故か兇器を持っている
大阪府　坂口公子

パチパチとくる静電気です才女
ライバルが支えてくれる意地と欲
ひく眉に今日の本音をしのばせて
内緒で食べた味ゆえあかせない
大阪市　北勝美

教育を憂う人間規格品
空豆が咲いて道草くっている
一気呑みした牛乳の腹具合い
又三郎出番ないまま春の風
東大阪市　崎山美子

マンションへ呼べず故郷にもおけぬ老母
頭金実家をあてにプラン組む
友の計を聞く雪はまだやまず
雪国の悩みは降っても降らぬでも
鳥取県　新家完司

あるだけの勇気使って生きている
梅が咲いたら天神さまに会いに行く
飛行機はことし何台墜ちるやら
命令を聞かなくなってきた体
米子市　澤田千春

休火山炎える火種を溜めて立つ
人も木もきらきら光るいい天気
風少し止んで小耳に亡夫の声
壁に耳寝た子が不意に輪に入る
羽曳野市　吉川寿美

言い分はわたしにもある冬案山子
大根の白さを妬む自虐かな
ほころびを繋ぎ合わせて夫婦の絵
病夫にはすまぬと思う面ふたつ
静岡市　渥美弧秀

五月晴れゲートボールにさざめいて
詩と音楽暮らしに生きて古希弾む
メーデーの声遠く聞く病む仲間
潮引いて孤独に愁い満ちてくる
河内長野市　井上喜酔

忘却の宿で恵みの雨にあい
初耳と巧い返事で言い逃れ
幸福なルツボで時計を止めて置く
信心の水へ偽り流そうか
羽曳野市　佐野白水

暖冬の庭冬の花春の花
暖冬は二月始めの猫の恋
リハビリは背に双葉を貼り歩こう
春の庭花芽数える老い二人

羽曳野市　田中隆二

順番を狂わす春のつむじ風
ライバルが隣で鼾かいている
つじつまの合わぬ話を聞く情
問題はそれから先にある話

七尾市　松高秀峰

見ぬふりと聞かぬふりして姑達者
勇退をうながす役を背負わされ
口下手の弔辞に式場すすり泣く
顔中の皺を集めて笑う母

堺市　柿花紀美女

風邪に伏し枯葉の舞を飽かず見る
老いて我平成の世に押し出され
余生まだ銭の話がついて来る
うろ覚えの教育勅語老い二人

神戸市　仲どんたく

啓蟄が這い出して来る掘炬燵
年号の別れがしみる砂利の音
人間味溢れて酒ぐせ女ぐせ
老人に梯子のコースある医院

寝屋川市　平松かすみ

スキップが連れて帰った温い風
リモコンでどうにもならぬお年頃
途中下車そんな絆もあったとか
姑さんは大河ドラマになる程に

大和高田市　岸本豊平次

昭和史の苦難に耐えた亡母の背
暖冬も油断出来ないお水取
留守番電話話せば台詞のようになり
同姓の豪邸の門に立ち止まり

今治市　越智一水

温む水よろこぶ妻がいじらしい
卒業へ太陽があり風があり
声かけてみたい日傘の歩きぶり
仲人に電話わすれぬ仲のよさ

土佐市　中内朱坊

煉の指乾杯の手が重い
自由化の波宿命の農を継ぐ
お互いの余生見守る夫婦箸
日雇に春の陽射しが長くなり

大田市　藤田軒太楼

床柱背に紋服の喜寿の春
旧師今特養院に居ると聞く
振り向けば寄り添う妻の達者ぶり
ええままよ言うだけ言って釘をさし

寝屋川市　宮尾あいき

闇を行く道案内は沈丁花
故里の山なつかしや藪椿

ああ平成うとましきかな消費税
夕餉時キンピラごんぼの匂う風
柳井市　弘津柳慶

何処までも白を切ってる御会見
飲むことに異議なくみんなついて来る
玄関に出れば靴が揃って居
ニュースまた今日もリクルートの事にふれ
羽曳野市　榎本吐来

不器用なとこもついでに好きになる
ペン先が逆ろうてくる宮仕え
酒汲んで不惑に遠くいる歩幅
総合口座マイナスのまま春が来る
出雲市　板垣夢酔

菜の花と月がきれいで逆らえず
蟹の値で家族たらふく肉が食え
一線を引かれてシャボン玉が割れ
弾み過ぎ毬遊びから帰らない
出雲市　石倉芙佐子

さくらさくら胸の疼みを忘れさせ
急がねば早や湖に日が暮れる
黄水仙おそまきながらと言うでない
候文の手紙など書く雛の宵
和歌山市　細川稚代

ついてない顔だと鏡言っている
もう少したてば忘れる義理の仲
菜種梅雨足から冷える電話口
置ごたつ少し時間を上げましょう
貝塚市　行天千代

バーゲンの戦場で出る馬鹿力
桃よりも桜が先に咲きはじめ
美しく老いたし白髪染めて見る
早くから目覚めて新聞待ちかねる
静岡市　永倉僕川

六十余年苦しい日日へ御名御璽（昭和天皇を悼む）
車座の中に可愛い鬼が居る
都会から来る人紳士と限らない
口に泡飛ばす議論の負け戦
静岡市　安本晃授

手の中の夢が逃げだす反抗期
やさしさを包んだ母の糸切歯
一本気父の口上舌足らず
古希もまだ余生へ賽を振ってみる
弘前市　真喜内實

菜の花を食べて緑の服を着る
赤ければハンカチ貌を出したがる
過去の苦労今のあなたを此処に置く
母素顔おねだりされる覚悟です
和歌山市　山川克子

人間様何か忘れちゃいませんか
誰にでも親切それは困ります
友達も悩みも増えて娘は二十歳
奥様は美人うれしくない女

川西市　松本ただし

年金と綱引きをする無為無策
噂なら良い耳で聞くことにする
あと何歩余生を刻む古時計
折り込みが知ってる心の小さい隅

米子市　白根ふみ

亡父とおく李下の冠光らせる
女絵図まだしたたかさのこしとく
果物を沢山盛っているひとり
負けて勝ついくさ知ってる妻の位置

鳥取県　江原とみお

逃げの手が嫌いで火傷ばかりする
春雷がびっくり腰にようひびく
ホームベース忘れないでネお父さん
先達の残した縄を綯ってます

和歌山市　山田高夫

太陽が斜めたこ焼売れ残り
日々多忙森繁節が似合わない
秒読みの病へ医者の詰将棋
いつの日か父を追い越せ三輪車

黒石市　相馬一花

技ありを取られた嫁の返し技
日本のシシャモはロシヤ語しゃべれない
クラシック聴いて演歌で口直し
ペンギンが二羽歩いてる卒業式

大阪市　井上白峰

二者択一いずれが菖蒲杜若
恋の彩パレットにあり老けられず
例えばの話が胸に突き刺さる
ああ序列妻子に及ぶ宮仕え

岡山市　井上柳五郎

美しく老いたし女の祈りかな
総入歯人生観も変えさされ
いんぎんな言葉で目にはさげすみも
水子塚香華は自責の祈りかも

豊中市　上田登志実

春四月何だかんだと主婦多忙
週休二日痛し痒しと愚痴も出る
誇るものしいて捜せば達者かな
痴話げんかそれも花見のせいらしい

弘前市　小寺花峯

古くなった時計で帰宅みな違う
叫んでも届かないほど距離をおく
娘の心摑めぬままに日が昇る
バーゲンの服が互いに見つめ合う

守口市　結城君子

野良犬も春です走ることはない
気の早い薬がカプセルからこぼれ
うそという顔で言訳聞いてやり
春らんまん薬貰いに行く車

出雲市　園山良子

切り抜きへ鋏を止める孤児の顔

我にまだ味方があった沈丁花
わくら葉も一緒に氷るポリバケツ
さよならのそれから長い立話

島根県　石田清泉

週休二日体のおきどころ
趣味一つ減らせと脳味噌に叱られる
余白さえ潰されそうなスケジュール
冬眠の夢にさくらが咲いていた

岡山県　荻野鮫虎狼

黒枠を酒の肴に通夜が更け
決定権妻に任せて六十路越え
四代を生きて老人性痴呆
鉛筆は親が削って塾通い

姫路市　大原葉香

王手飛車春ですそんなきつい事
うそをつく相手もおらぬ四月馬鹿
夫婦にも言うてはならぬ事がある
まっすぐに歩いて石にけつまずき

高知県　小澤幸泉

明治生れ意地と孤独を同居させ
お荷物を降ろせ消費税がとおる
定位置にふとんを敷いて妻を待つ
ふるさとの期待を背なに見送られ

東京都　吉川一郎

満点の夫婦がストレス溜めている
スタイルに弾みつけてるレオタード
ネオン川にプライバシーが溺れてる
勝算を胸に畳んだ底冷える

岸和田市　清野こう

父さんが笑った見舞の娘も笑顔
旅に出る明日へ夕焼け美しい
那智の滝入れて写真の三姉妹（西国三十三ヶ所詣）
登る人はげましおりる槇尾山

富田林市　新開千代女

般若心経覚えたはずが出てこない
邪気のない幼な児だけにある魅力
肩書が取れてすっかり好々爺
水溜り空想ひろげバスを待つ

海南市　三宅保州

丸顔が救い悪女になりきれず
真面目さが取り得の時計でも止まる
主義主張溜って仮面熱くなる
文通を重ね逢えなくなる虚飾

唐津市　浜本ちよ

年末の買出しに似た旅土産
入院をしたら途端に病人に
女には娼婦の心隠れ住む
秒までも合うた時計の憎々し

境港市　細木歳栄

幸うすき子等へも花咲き鳥うたう
山の野の妖精たちが呼ぶ五月
幸せは三猿主義というガード

何時からか蟬が棲みつき耳の奥　加賀市　細呂木　魯木

手切れ金女ひとり波の中
おふくろの手造り偲ぶ七回忌
正座する服の乙女のひざ頭
極楽を金で求めてネオン街　松原市　小池　しげお

灯台の白塗り替えて白いまま
水道のパッキン変えて愚痴が止み
満期まできっちり生きていたお通夜
春の雪絵になりたくてなりたくて　有田市　松井　かなめ

町内運動会ドウビング使用したくなる
こな雪が舞々降りて昭和閉ず
防空頭巾いらぬ平成期待する
六法に失恋の処置載ってない　吹田市　茂見　よ志子

やせ我慢ほどほどにしてお汁粉屋
野草の会日焼けがつらい春帽子
存分に話しをさせる聞き上手
地獄絵を見てから良心さからえず　八尾市　山下　みつる

別れ際営業用のキスをくれ
ヘソクリを失うた日の悪い酒
失うた小犬の親の乳がはり
朝は主婦昼はパートで夜はサロン

黄昏の故郷で明日を信じよう
お説教勿体なくて眠くなり
ウイークポイントえくぼの深さ確かめる
再出発シートベルトをぐいと締め　倉敷市　田辺　炎六

わが家の女よ見ろよ五月鯉
春霞何やらぼけも手伝って
ワープロでぽんと正しい送りがな
銀婚のいまだ呼吸の合わぬ愚痴　茨木市　井上　森生

みどりの日嬉しい私の誕生日
妥協癖ついて哀しく老いている
超ミニの若さまぶしや少し妬き
ポストまで走って行きたい良い手紙　岸和田市　古野　ひで

修復門仁王に休暇の出る疎開
何一つ病名の無いあばら骨
最後まで押し通された勘違い
嫁った娘に旅に出る日を喋っとく　高槻市　竹内　花代子

暖冬に寒さがかえるお水とり
順番に風邪家中をなめまわし
ランドセルかけて春呼ぶ孫の顔
物忘れ笑い合うてる老夫婦　岸和田市　原　さよ子

出雲市　小玉　満江

ざんこくな春合格と不合格
ここだけの話が隣に落ちていた
売り言葉買えば淋しくなるばかり
淋しくて苺大福買って来る

藤井寺市　福元みのる

スポーツ紙顔をかくして読んでいる
吸殻の形で社長の機嫌知る
混んで来て女の強さ知らされる
候補者のポスター笑顔に嘘がある

鳥取県　土橋はるお

焚火消した場所に嬶が引き返す
嫁さんが農業新聞読んでいる
ラブレターに若葉マークが貼ってある
後家さんが男の物を干している

岡山県　山本玉恵

亡母の絵が画きたくなった月の夜
聞き流す奥の手持って姑達者
冬帽子なさけたたんで居るばかり
無位無冠風はひょうひょうと背なを押す

鳥取県　森山盛桜

数珠玉の一つ一つに鶯の声
女文字何やら思い詰めている
飛んで来たブーケ受け損ねてしまう
たかが一輪なれど精一杯の野辺

高知市　北川竹萌

宿酔陽の沈む頃元気づく
二人の灯つけて時折愚痴も出る
ニュース見る己が指紋を大切に
相槌も打って隣とまるく住む

姫路市　丁坪サワ子

土筆の子戸惑い顔出す暖かさ
我を捨てて嫁に甘える終の水
絵空事へもう騙されぬ雑魚の群
孫や子に囲まれ亡夫の忌が巡る

姫路市　中塚遊峰

伝言が勝手に尾ひれつけて来る
待合室姥捨山を思わせる
ひたすらに励んだ寡婦の砂の城
置き忘れ何も手つかず自己嫌悪

枚方市　二宮山久

ラジオからふる里流れてくる小川
倦怠期らしくはないが無口です
お隣の新芽えんりょ知らぬまま

神戸市　山口美穂

バーゲンセールわたしのほしいものが無い
春の便り黄砂も花粉ももってくる
いかなごの釘煮気長に春を煮る

出雲市　久谷まこと

アパートも付和雷同で丸く住む
美しく老いたいままに口閉ざす
腕組みも解けないままに多数決

和歌山市　天満三千代

言い勝ってまだ苦虫を噛んでいる
二三日経てば落着く腹の虫
飽食の憂い明治は過去を追う
鳥取県　松下たつみ

職のない男の髭がよくのびる
振り子の足で稼いだグラフと見てくれず
一口は食って苺の蔕をとり
大阪市　町田達子

沈丁花けなげに香る風の町
売り言葉は買わぬようにと春の風
風まかせルンルン弾む春の旅
島根県　松本文子

すれ違い家族で犬が威張ってる
久し振りおてんとさんも立ち止まる
身構えて生きる足元掬われる
岡山県　矢内恵美子

昭和史の手垢が沁みる父の辞書
ドレミファの音符も高く春の使者
冬の部屋夫婦子のこと末の事
和歌山市　田中輝子

空仰ぎ咲くモクレンの白一途
疵口に言おう主婦業してますと
躾糸とる喜びに出会う春
島根県　藤原鈴江

衿足に女が匂う春の宵
離れても心が通うさくら貝
今もなおときめくものを持ち続け
島根県　松本はるみ

陸橋に夕陽が沈む望郷よ
味噌汁で昨日の罪を飲みくだす
埃さえ春の光にきらめけり
鳥取県　谷口次男

鉢植の大臣すぐに株増やす
どの顔も自我を殺して集金日
はっきりと口に出したら孤立する
唐津市　筒井朴竜

雲上へ囀る恋の揚げ雲雀
波まくら恋も汐路か磯千鳥
沖時化りゃ鷗群れ交う松浦潟
米子市　茂理高代

まだ死ねぬ孫を預る帆をあげる
おばあさんの声はとどかぬ愛の鞭
うり言葉買うて仲良く孫と住み
寝屋川市　堀江光子

祈ること合格祈願から覚え
ぼんぼん時計鳴った気のする午下り
膝に置く手が哀しみを抑えてる
米子市　金山夕子

自分への挑戦逃げるのはよそう
珍しい顔した猫が玄関に
ゆったりと素顔に戻る日曜日
守口市　森川まさお

島の果て水仙人を寄せ付けず
鉄塔のかげ車座でひと休み
山寺の添水に雀馴れている
竹原市　信本博子

女形の女らしさに憧れる
もくれんの莟が愛を抱きしめる
甘えてる猫は優しく爪たてる
吹田市　栗谷春子

寒もどりふたたび戻る水の味
今はむかし文学少女の夢のあと
物忘れする人だから打ち明ける
倉吉市　淡路ゆり子

芯のある話はしない花の下
少しだけ心許して火傷する
満月が気付いてくれた独り言
豊中市　辻川慶子

梅匂う我が身勝手な神だのみ
ミシン目をまた間違えた物思い
苛立ちを緑の風に論される
西宮市　藤村宏子

手拍子に乗りやすい日とのれぬ日と
こんがらかったままの絆をあずけられ
ワープロは優しい文が苦手です
吹田市　園田文子

そっくりのうしろ姿に母を見る
腕立てのバッタと競う空の青

養老院哀しさじっときく振り子
大阪市　渡部さと美

どんな過去東寺出店の古人形
フルムーンの空御近所に気遣われ
食べてしゃべって妻のウエストゆるぎなし
鳥取県　田村きみ子

今日からは愚痴言いません仏さま
昭和史にわたしの恋は一つだけ
ホテルから朝の空気を吸いに出る
羽咋市　三宅ろ亭

日記帳の表紙平成と浄書
灯油数今年は数えぬ安定値
天皇記の雑誌何冊買ったやら
鳥取県　さえきやえ

ボケと居て意にかなわない日が続く
定年のくる椅子釘をしめておく
来年の予約はしない北帰行
茨木市　堀良江

轜車発引切って落したように降り
弔砲も湿り大内山しとど
思いこもごも迎賓館のシャンデリア
出雲市　竹治ちかし

吉報も凶報も聞く同じ耳
振り返る里は昔のままが良い
父と子を結ぶやさしい母の橋
和歌山市　玉井豊太

作戦は妻の意向で練り直す
農嫌う子に卒業の日が迫る
矢車の音は出世の風に乗り

岡山県　岩道博友

桃太郎の史蹟尋ねる春の島
新コイン手に入る日を期待かけ
落書を立ち読みしている春の宵

大阪市　北山悟郎

義肢だけが停年ないと愚痴を言う
亡き父の雅号を継いで父困る
路傍の石時流に乗れず埋もれる

広島県　田村新造

裸祭に男が燃えて春を呼ぶ
窓際の席でたそがれ思い知り
帰り鶴また舞い戻る空の荒れ

豊中市　一瀬福一

外は雨チャンネル変えに孫が来る
古代史を探る竹ベラ春の風
ザックリと一鍬起きて春の土

岡山市　花田たけ志

幸せな暮らしを唇狂わせる
義理チョコで六十路の坂が緩くなり
有り余る知恵が孤独にさせている

和歌山市　青枝鉄治

咲いたまま落ちる椿の出す吐息
左遷地の庭につつじの真っ盛り
タイムカード押して企業の貌になり

岡山県　二宗吟平

言い出して引けぬ自分をもてあまし
便乗で行って砂湯に浮かぶ首
勲五等あの世に送るすべがない

西宮市　瀬尾六郎太

己巳如月二十四日大喪儀
八瀬童子念願かない出番あり
梅まつり画面丹念老婦人

河内長野市　植村喜代

冬の海哀しいまでも荒れ狂い
このままで止ってほしい老いの坂
春雷に朝の出足を挫かれる

竹原市　岩本笑子

答出す過程を女聞きたがり
近道は知っていますと丸木橋
どんぐりの幸せ丸くころがろう

松山市　谷信夫

梅干の詩を暗唱呆け封じ
遺言を書く気になった気の弱り
誕生日テレビ料理を見てひとり

岡山県　直原七面山

頷いて聞けば泣き
欲捨てて捨てて生き
無邪気さを気に入られ

唐津市　山口高明

恋文を回し読みして女学生
缶蹴りを知らぬ世代に缶の山

今日の反省を終えてからの鼾　鳥取県　乾　喜与志

拭いても拭いても眼鏡かすんでいる　大阪市　宮下　とし

鉢植を子を抱くようにバスの中
相性はどうであろうと嫁ぎます　島根県　小田川　智重子

長電話そのうちだんだん気が変わり
留守中をお邪魔してました鳥の跡　姫路市　都里　遊光

指切りの夢は捨てずにいる小指
良い話だから欠伸が出て困る　大阪市　冨岡　温子

歩くのが健康法と信じ込み
痩せる話ばかり肥えたい日の焦り　奈良県　宮川　古都路

初誕生帝王切ってやっと出来
香焚けばけむりの匂いしとやかに　大阪市　塩田　新一郎

警官不信拾った財布また捨てる
妻という天敵が居る生態系　竹原市　石原　淑子

雨音に春聴きながらしまい風呂
小心でもぐら叩きは出来ません　鳥取県　津村　八重子

明日の夢つつむかっぽう着は白い
ヘソの緒を入れた小箱だあけられぬ

冬木立木蓮蕾つけており
暇あれど金もなければ知恵もなし　岡山県　池田　半仙

念入りに筋書よんで砂をかむ
晩酌の話題老兵くり返す　米子市　小村　てい子

子は塾に親はテレビの漫画見る
学半ば果敢無く散った子の写真　箕面市　椎江　清芳

牛の値に期待明日へ瓜を切る
オートバイ若さで追い越す春の風　出雲市　小白金　房子

毎朝の鏡にえくぼを教えます
村の噂がふたまわりして春近し　米子市　川上　より子

ふつふつと大根煮える銀婚式
入院も一週間ならお気軽に　大阪市　山田　妙子

女房に跨がれて見た怖い夢
黙秘権これも男の友情か　奈良市　米田　恭昌

暗闇の風の匂いは沈丁花
ふんふんと孫の内緒を聞いてやる　大阪市　松永　すすむ

本当はなんだったのか玉手箱
影帽子私の席で待っている　出雲市　河原　恵美子

自選集

春日遅々和紙の手ざわり楽しめり
絵にかいた餅と心に思うとく
断ちきれぬ絆に春がついてきた
お祭りの影がだんだん重くなる
ひと山は越えたと思う茶がうまい

正本水客

雑音となり難聴の耳に入る
もろい体質へ賄賂の虫がつき
支持率低下どころか四面楚歌になる
皺は嫌いと面食いの両替機
微生物の活躍すぐに気は付かぬ

金井文秋

水すましリズムにのせる春の川
山びこの空は答えぬままに澄み
父の挽歌に汗と涙の握りめし
箏曲の春の調べに散る桜
花盛り長谷の仏は口閉ざし

藤村〆女

破戒僧の身の上を聞く風の道
枯れ芒これ見よがしに靡く道
本売りに盲者集まる部屋がよい
王手打つ常套手段照れもせず
掌の中で鋭い石を玉にする

野村太茂津

言い勝って迷路で妻に相談し
畔道で怒鳴り合うよな久し振り
節くれの指がたまさか妻を恋う
シナリオがまた繰り言になる枕
花贈るやさしい心は春さかり

児島与呂志

待たされてよし美しいお茶に酔い
過疎の灯の影絵へ雪は降りやまず
これでよし見事な負けっ振りを見せ
力んでも当って砕けるほどでなし
古き良き夢の短かさなど思う

水粉千翁

円満袋気さくに提げて来る友よ
ブルドーザーみたいな友の頼もしさ
ど根性褒めてけなしてまた褒めて
絵空事と嗤われても我行かん
土地ブーム緑また消しまたも消し

本田恵二朗

平成や早くも昭和遠ざかる
大正・昭和・平成と生き呆け始め
酒止められて生ける屍
おじいちゃん元気を出せと励まされ
ポストまで行って帰って来た安堵

工藤甲吉

宝石にまさる思い出数知れず
おかあちゃんのニックネームも春になり
女の子にも紙の兜を折ってやる
春の海沖へ沖へと漕ぎ出でん
春の宵時計にさえも無視されて

小出智子

どっこいしょ自分の腰だけ上がらない
パチンコのリズムで背の子が眠り
親が子に説明を聞く玩具箱
易の灯へ恋に疲れた手を見せる
リクルートどこまで続く泥濘ぞ

有働芳仙

大屋根に抱かれて過ぎてゆく嵐
たましいを寝かせぬようにゆすってる
弱虫の巣にふえてゆくコンセント
水際に立たねば海の絵は画けぬ
海からの風に無力な拳たち

八木千代

一円が目をさますにがい消費税
いつの世も金の魔力に罪と罰
政界へ新旧交替の秋と知る
親子孫きずなくずれる個人主義
受章の喜びもいちど若返る

藤井明朗

空間の一点にらむ練りわさび
戦友と会うあの頃の顔になる
無駄ばかりしたと履歴書には書かず
石仏の中に恩師の顔がある
夕焼の向うの向うにある浄土

月原宵明

脳死などふと思わしむ木の芽どき
短刀直入　失うものがない
こん畜生敵ながら敵ながら
マジシャンに息吹きかけられた立ち暗み
ハイ先生ひとこと言っていいですか

山内静水

おしゃべりな風は峠が大好きで
買いそうにない客だから無愛想
カンナくず一つもなくて家が建つ

黒川紫香

鳥取県川柳大会に参加して

今年もまた日本海を見に来たよ
一日を終えた駱駝が去ぬ砂丘

米澤暁明

いい知らせ雨だれの音のいいリズム
快い音ではかどるガラス切り
水割りの氷の音が何か言う
手作りの凧が一番よく上り
まっすぐな道をまっすぐ歩かぬ子

小林由多香

成人式今日からたばこやめました
単身赴任とっぷり厚い情にふれ
腹黒い男が世話をやきたがり
日曜日子供に朝を起こされる
平でいる気楽さ子には教えない

大矢十郎

国会へ信じる人のない不安
はだしの国見れば教わる事多し
お日さまが大きい園児の絵に見とれ
その前の嘘を忘れて嘘を言う
平成の税はマジックめく仕組

第4回国民文化祭さいたま89文芸大会川柳作品募集案内

作品　未発表作品（厳守）課題4題・各二句詠・一題二人選

課題と第一次選者　「咲く」〈越郷　黙朗・森中恵美子〉「遺跡」〈佐藤　正敏・吉岡　龍城〉「立つ」〈ちば　東北子・野村　圭佑〉「窓」〈去来川巨城・山崎　涼史〉

応募方法　二百字詰原稿用紙又はタテ書き便せんに各題別紙、無記名。作品とは別に〒番号・住所・氏名・年齢・性別・職業・電話番号・大会・交流会の出欠を明記、封筒の右上に「川柳」と朱書・郵送のこと。

応募料　千円（郵便小為替を作品に同封）但し海外投句者は無料。応募者全員に入選作品集を無料配布。

宛先　〒336　浦和市高砂三－十五－一　埼玉県庁第3庁舎第4回国民文化祭事務局内「文芸大会川柳部門係」

締切　平成元年七月三十一日（当日消印有効）

第二次選者　川俣喜猿・佐藤美文・篠崎堅太郎・須田尚美・関水華・田中白牧・千島一平・西村在我・藤原時化緒・堀口北斗・松村育子・山田良行

賞（予定）　文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・埼玉県知事賞・他

主催　文化庁・埼玉県・埼玉県教育委員会・浦和市・日本川柳協会・埼玉県川柳協会・他

大会案内（入場無料）

日時　平成元年十一月十一日（土）12・30～17・30

会場　埼玉会館大ホール　JR浦和駅西口下車。県庁通り右側徒歩六分（浦和市高砂三－一－四）

分科会　（於7A・7BC集会室）○宿題（各二句）「無限」渡邊蓮夫「細心」神田仙之助。○席題（同一句二句）大会当日一題（二人選）選者、花南井可・熊本茶暮天（12・30～13・40）

締切　宿題、席題共大会当日　13・20（厳守）秀逸句呈賞。

全体会　短歌・俳句・川柳三部門合同大会（於　大ホール）

講演　大岡信（詩人）、講評・表彰式（14・20～17・30）

短歌・俳句・川柳・連句交流会

会場　埼玉会館ホワイエ（18・00～20・00）

会費　四千円（当日受付にて受領・参加自由）

川柳太平記（132）

川柳の群像

尼 緑之助

東野大八

「みどりさん」では少し子供くさいから、「ろくさん」に変えたら、呼ぶ方も少し大人びた気持になれていい気なものだった。暗い裸電灯の下で、瀬戸物火鉢を抱えて語り合った日のあれから、お互いに痩軀、老斑をかこつ今日、数行の近況で足りる往復が、時には数か月を置くことがあっても、よくも六十年の長い交友が続いたと思う。

緑之助には誇張がない、はったりがない、その余りにも真面目な人間性に惹かれたのが絆のよりはじめである。

文学少年から青年へ大正の末期、彼は高松緑之助で川柳の道へ一歩を入れた。呱々の声をあげた地（旧簸川郡高松村白枝）の緑地帯のたたずまいが、少年忠三に詩心の芽を与えたにちがいない。後に私の古城精之と、ぶらぶら生意気にも文学の生噛りを語り歩こうと高松緑之助を名乗った時期もあった。多感で感受性の強い少青年時代のこそばゆい他愛のない思い出である。（中略）

彼が「川柳は人間陶冶の詩である」と主唱された麻生路郎師に心魂を打ち込んで師事。今日、川柳塔の主流をなしている精神の底流は、既にしてここにあった。開眼は、緑之助をひとまわり大きくした。

初期の作品

何もかも捧げたようにバラ散りぬ

かつて絵にもなき月の小川なる

月に彼女を盗まれし　（以下9句略）

などには、若き日の大胆で秘められた個性がある。六十年の作句歴をもつものの一度は避けて通れなかった一過性の作品として見過してはならない。後期作品とは異質とみる向きには、表現形式に捉われないで、作者の人間形成へのこころの看取がほしい。（中略）

彼はまた希にみる愛妻家、家庭人で羨望される九人の子福者。こよなく酒を愛し、酒を知る人間でもあって（注・以下24句から）

考えて見ねばなるまい子の寝言

川柳は吐息酒から句が生れ

朝よし昼よし残ったそばで又始め

夫として、子の親としての無飾で赤裸々な川柳を書き、時には酒をみつめて低唱し、酒と語り酒と遊んだ。牧水とはちがう境地で哀歓を綴り忘れぬ緑之助である。

五十五年の九月、祝福さるべき金婚を前にして不幸にも愛妻を失い、その後、体調すぐれず、周囲の気遣いに応えながら「生かされて」の起伏におどろくべき突っ張りを見せている。

以上は唯一人の竹馬の友、津川紫吻のあたたかい『尼緑之助句文集・生かされて』の「跋文」の抄録である。緑之助は明治40年6月11日の誕生で、昭和6年結婚して尼姓となり、

地元の高松村役場吏員となり、昭和16年町村合併で出雲町となり、同17年市制により出雲市となり、爾来、33年間公務員生活を送り、商工課長、地区公民館館長などを勤めた。

川柳歴は大正15年川柳たかせ会を結成。昭和二年麻生路郎の『川柳雑誌』を識り、昭和四年から川雑同人、以来六十年間、路郎師の掲げる「人間陶冶の詩」「生命ある一句を創れ」の路郎の川柳イズム一筋に傾倒。川雑直系の『川柳いづも』を発刊。昭和30年には路郎師を迎えて出雲市公会堂で三十周年大会を開催。この間、島根新聞柳壇、山陰中央新報柳壇、毎日新聞地方版柳壇等の各選者をつとめ、NHKラジオ川柳の選評も担当し、島根県川柳協会（昭和43年）の発足では副会長となり、昭和62年出雲文化協会から文化奨励賞につづき、島根県教委から文化功労賞を贈られた。

昭和五十八年川柳塔社から出版された句文集『生かされて』は代表的秀句

天と地のはざまにふわり生かされて　緑之助

の句意からとられたもの。緑之助の喜寿を下しての記念出版であった。

「幼童の頃トロッコの下敷になって九死に一生を得たこと、中学三年の頃、誤診により病人にされたこと。おかげさまといえば変だが兵役は除外された。というわけでせいぜい四十歳までが寿命と思っていたのが、喜寿（文字はきれいだが）といわれておどろいている。四人姉兄の末っ子（一番上の姉はすでに亡いが、兄二人は健在）、三年半前、生命の予告（軽い脳血栓）は黄信号だったと思っています」と同書のあとがきに記しているが、こうした病身の老齢というわが身に、神仏の加護によって「生かされている」ことの実感のその句が、この本の題名を呼んだものと思われる。

生かされてここに川柳緑之助　緑之助

の句に花を添える彼の生涯のハイライトは、昭和48年5月に国立公園、日御碕の句碑建立というべきだろう。

灯台の夕陽神話を抱きよせる　緑之助

この碑面の句は、路郎賞に輝いた句だ。

この盛大な現地での建立記念式典や祝賀句会のあと、恩師路郎の葭乃夫人を訪ね、建立の挨拶を行った際、

恋人のようにあいさつして帰り　緑之助

の句が残されているのはほほえましい。彼の得意の心証を遺憾なく示した句と言える。

昭和62年10月尼緑之助主宰出雲市文化奨励賞受賞祝賀川柳大会が開かれた。出席者百十九名の盛況さで、歩行不自由な老緑之助にとっては、胸の赤いリボンも晴れがましい、生涯最後の川柳祭典となった。この日から半年後の昭和63年4月6日死去したのである。享年81。柳抱院釈緑仙居士。

筆者がこの川雑の大先輩と初めて話を交したのは、四年前島根県教委の文芸祭の招きで松江の地を踏んだ時であった。

松江駅の高い階段の上まで、不自由な足をひきずって出迎えられたこの人の姿に、思わず胸揺さぶられるような感動を覚えた。

宿舎で二人切りのフロントになった折、

「先生の御本『生かされて』の巻頭口絵に天皇陛下の御写真がありましたね。57年10月島根のくにびき国体の折り。日本海の説明を知事から御聴取中の陛下の写真の後ろ、松林の中に大きな先生の句碑が映っていました。陛下はきっとこの句碑のことをおたずねになられたと思います。川柳ここに在りですよ」と言うと、さもうれしそうにうなずいていた笑顔が今も昨日のように忘れられない。

★次回は「**山田祥園**」

■**訂　正**　4月号の課題吟「始める」（67P）の「相談を始める前に樹をゆする」の作者名〝雄二〟は**雄々**の誤りです。（**編集部**）

誹風柳多留廿六篇研究（四十一丁）

石田晋一・南　得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木　黄・多田　光
故岡田　甫

692　**なにほとな銀てお家様寺参り**

石田晋＝類句に、

だに程な銀でしうとめ寺まいり　八12

がある。「だに程な銀」は玉銀のこと。上方のお家様のケチを詠んだ句。

南＝賛。江戸の金相場に対して、上方は銀相場であり、また京はけちな所とする。

八木＝「銀」は「カネ」と読むのかも知れない。

多田＝「お家さん」は西鶴にも一、二ヶ所出てくる。

693　**村使ぬれて正月ふれて来る**

石田晋＝「正月」は祝って休む物日の異称。

正月を二百十一日にふれ　二一22甲

松をたてない正月を庄屋ふれ　一八1

田も青々と正月を庄屋触れ　傍四29

明解な句解はできないが、晴れたら村共同でするものがあったが、雨のため休みとなり、それが村では正月であるというのであろうか。

南＝正月をふれる使が「ぬれて」来たのであるから、夏の日照り続きに慈雨が降ったのであろう。それを祝って骨休みの臨時正月と思う。

本多＝農村に古くから行なわれていた「三日正月」を詠んだ句であろう。農作業の激務の合間に、農民が三日の間仕事を休むのを三日正月と言う。

主題句は、農事も一段落、今日は雨降り、ここらで骨休みをというわけで、庄屋からの三日正月の使いが雨の中、村中へ触れて歩くというのである。

多田＝本多説の通り。

694　**つらい事棹をにぎってこいて居ル**

石田晋＝張見世のすががきの句。夜見世中弾いていなければならないのでつかれるし、居眠りもしてくる。その姿を成句「船を漕ぐ」を使い、棹、こぐの船の縁語でまとめたもの。

すががきの中でいねむるなれたもの　一〇32

つらい事折々ばちで膝をひき　拾七28

引四つにばちをあくびのふたにあて　拾六26

多田＝賛。

695 **たばこ盆取上られてついと立チ**

石田晋＝張見世の遊女の前には、馴染みのため吸い付け煙草用の煙草盆がおいてあり、客がつくと、それをもって店をはなれるようである。

煙草盆提げて這入るは決ったの　明五桜3
いいと思へば煙草盆さらってく　安八天1

「取上げられてついと立ち」―子供がおもちやを取上げられたときのような状況を言うのか。何かの表現であるような気がするのだが。

南＝賛。

袖口とあふきと持てついとたち　安五智2

右は踊りの初めの所作観察の句であろう。「ついと立ち」の状況が想像される。

客がつくと張見世のその遊女のたばこ盆を妓夫が持ち去る。それに続いてその遊女が「ついと立ち」ということになる。張見世風景。

石田成＝賛。

先最初たばこぼんから天上し　四一23

多田＝賛。

696 **ていねいに西瓜をくって下びる也**

石田晋＝「下卑る」はいやしく下品に見えるの意。普通は物を残さず、きれいに食べきってしまうのがよいが、西瓜は皮の間際まで食べてしまうのはあまりよくないの意。

八木＝賛。今だとメロンでそんなことがある。

鈴木＝同。梨の皮は乞食にむかせ、瓜の皮は大名にむかせの諺のように瓜類は皮をあつく残すもの。

多田＝賛。

697 **柿盗人を呼生ケる馬鹿な事**

石田晋＝「呼生く」は呼びたてて生き返らせる。大声で呼んで正気づかせるの意。

句意は、柿盗人が転落、気絶したのを、柿の木の持主がかいほうするというのであろう。

柿の木の下へ気付けを持てかけ　二四4
柿の木の上であやまる馬鹿ななり　傍一31

大屋＝賛。柿の木の枝は折れやすい。

多田＝賛。

698 **あたり見廻して汁戸へ下戸這入**

石田晋＝句解必要ないと思うが、上戸が酒屋に入るのは問題ないが、男が汁粉屋へ入るのはどうも肩身がせまいというのであろう。

小野＝賛。矢張り男は酒でなくちゃ。

多田＝賛。

699 **不二みやげ舌はあったりなかったり**

石田晋＝富士土産は麦わら製の蛇。これはこわれやすいのか、実物を見たことがないので知らないが、のりか糸でとめた紙の舌をもって帰る間にか、人ごみの間を通る時にとれてしまうのか。また吉原によっている間にとれるのか。どちらにしろ、とれやすいものであろう。そういう土産を持って帰る人々の姿を写したものか。

南＝賛。ただし舌は紙でなく、附木を赤く染めたもの。

多田＝賛。

700 **酢とこんにやくハ紅葉から帰る也**

石田晋＝「酢とこんにゃく」＝なんのかのと文句をつける　(1)酢の蒟蒻でも＝煮ても焼いても　(2)酢でも蒟蒻

正灯寺の紅葉狩りからでも大一座で吉原へくりこもうというのであろう。ところが「私は家に都合があって」などぐずぐずいうのは、もうほっておけということ。

是からハおくのいんだと正灯寺　安三仁3

鈴木＝賛。

居候酢のこんにゃくを不断喰い　三七20

多田＝賛。

五煙抄

黒川紫香選

八尾市　高杉千歩

耳よりな話へ慌て解毒剤
三世代生きていますと肩を張り
マルキで買った渦巻きパンを夢で追う
下積みが性に合いますベレー帽
縦のもの横にもせずに鬼の留守

今治市　野村京子

自画像へ知性を足して他人めき
半端な風に乗りたくはないシャボン玉
切り札は妻に持たせている安堵
喪が明けて背中を押した春の風
翔ぶつもりルージュの色を変えてみる

富山市　舟渡杏花

風花へまぶたの裏の放浪記
プロポーズそれは美事なマンガ文字
もう呪文効かなくなってから久し
終章でたたら踏んでる私小説
風圧へ揺らぐだけですおじぎ草

名古屋市　藤井高子

風は五月よ山の呼び声野の誘い
オルゴール鳴らして哀しみを隠す
いくさ果てれば視野にあらたな雪月花
ど忘れの名前へ愛想よく笑い
チビチビと払うとります消費税

広島市　流奈美子

如月の雨も泣いてる大喪礼
まだ生きるつもりせっせと種を蒔く
襟足がきれい振り向いてはならぬ
消費税の講演を聞くただそれだけ
自画像の横向く鼻をもて余す

米子市　新正子

本当だ裸にさせて見る太郎
過ぎた宝と言って下さる人がいる
男物のセーター洗う小さい幸
ぶらんこのゆれる速度の恋である
軒先を貸すのは燕だけにする

鳥取県　美浦美代子

紅バラの香りにむせる絵に出合う
ジャンプして冷たい風の空と知る
飽食の街でカラスは山を捨て
歯の抜けた顔善人に仕立て上げ
歯車が合うと求婚されていた

長岡京市　木本如洲

王様のつまずく石が置いてある
指人形憎まれ口を派手に言う
もどり寒遺言状を書き直す
母にだけ情けをかける夜なべの灯
花だより葉書表に書いてくる

静岡市　沢田きん

なぐさめてくれる可憐な花が好き
程ほどに生きる姿の難しさ
泥沼に染まらぬ意地の蓮の花
それなりの姑で家族に親しまれ
油断して付きまとわれた風邪の神

熊本県　大川幸子

親の夢詰めて重たいランドセル
転居した事をツバメにどう知らそ
まだ不慣れ義歯がほッぺに噛みついた
試し算魔法のように余る金
花屋から春が足音たてて来る

鳥取市　小谷美っ千

胸に棲む蛇は二つの顔をもつ
部屋のバラ中流らしく咲いている
おめでとう素直に言える男(ひと)といる
唇を許すと逃げる影法師
あの男が黒い霧から出てこない

藤井寺市　高田美代子

どうにでもとれる言葉で煙に巻き
子らの手が離れてからの失語症
浮き雲の自由にのってみたくなる
もうこんな齢になったかチャンチャンコ
昭和史の重さよ骨の中に鳴る

伊丹市　山崎君子

木蓮の花艶やかに雨あがり
舞扇艶の一字のありったけ
塀越しに声が聞えるおままごと
絵日記に書いた裏道花があり
足袋脱いで今日一日をふりかえる

熊本市　宇野昭代

いたずらな指を許さぬバラの棘
澄んだ瞳が大人の痛いとこを突く
旗持ちは目立ちたがりにまかせとく
笑っても泣いても初孫よろこばれ
パトカーが横に並んでギョッとする

京都市　木村たけし

相談はしたが座布団遠く置く
王さまの旗はBランチが目あて
潮騒を遠くで聞いた海苔の味

賤ヶ嶽冬は夕焼けから赦す
裏山に何焚く煙か春香る

出雲市　金村青湖

恒例のように道掘る年度末
ふるさとは友あり季節の味を食う
スーパーの味も乙なり差し向い
まな板のくぼみに主役入れかわり
どの道もやがては墓地に辿りつく

熊本市　北川一進

省略にしては文面只二行
二浪までまだまだ夢を持ち続け
初孫を抱いて重い重いと渡す祖母
思い出が一つ一つにあるこけし
打つだけは打ったと社長椅子を降り

鳥取県　幸家単車

祝電の小さな義理が温かい
骨のある祝辞ライバルから貰う
遠景に火葬場がある安い土地
遠く住む子に親馬鹿が荷をくくる
芽の出ない夫に妻の愚痴がとぶ

京都市　松川芳子

父さんの脛をかじっているゆとり
叩かれて太鼓本音ではずみ出す
紹介状貰うて回る医者通い
好きだから挨拶他人の顔になり
下駄箱を買えばシューズもはずみ出す

久留米市　鶴久百万両

鶴は北へ別れを惜しむように虹
易の灯に息子の未来見てもらう
善人になろうなろうと化身する
草に寝て少年Aのこと思う
恋に溺れて花のこころに疎くなる

尼崎市　尾宮弘治

大欠伸すると入れ歯の音がする
遠い日の酒量を老妻笑い合う
母になる日までを綴る母子手帳
年号が変り静かな置き炬燵
ヘソクリを応分に持っていい夫婦

富田林市　池森子

波風は立てまい寡黙になる海よ
春うらら猫と並んで歩くなり
ときに淋しい手さげを持って里帰り
悪魔一ぴきいつも入れてる小引き出し
似顔絵が少し美人でよくしゃべり

草津市　久保和友

母達者夜なべの唱歌口ずさむ
母達者満州の話まだ尽きず
パスポートに八紘一宇は伏せておく
肩書もとれた炬燵へ友の愚痴

東予市　小山悠泉

上を向いて歩こう空が美しい
決断を急げば話行き詰る

キュウイ輪切り少しリッチな膳になる
駅伝の襷青春まっしぐら　松江市　原　長三

黒枠の妻最高の美人です（妻七回忌）
白くなり諦めぐせのついた髪
若草の山焼く人の上手下手
六十でアニメに逝ったベレー帽　大阪市　亀井円女

平成の文字がだんだん好きになる
人の世のさだめか坂が多すぎる
春風が派手になさいと囁いた
ふくれ面五分と持たない楽天家　熊本県　岩切康子

気心の知れた友来て笑いまく
ぽったりと乙女椿が部屋でおつ
言訳をハガキに丸く書き終える
三十年のトンネルを出て職を変え　和歌山市　堀畑清子

春うららせともの市を見てまわる
気詰りを救ってくれた子の笑顔
菜の花の土手に寝ころんでるゆとり
七日ぶりの御帰館夫眠るのみ　尼崎市　的場十四郎

振り向くと時の流れは早すぎて
指ダイヤ女のエゴを光らせる
遠い雲追うて急がぬ一人旅
荒波を乗り切る妻が居てくれる　尼崎市　中澤向西

独身でコーヒーだけを友にする
嫁いだ娘来ている二階よく笑う
おふくろの信玄袋に柿と栗
水に浮く一円玉も役にたつ　兵庫県　森脇和子

義理欠いた仮面を責める水鏡
昭和史のB面好きな四季の詩
さざんかの北風に舞う小さなショー
長命の手相を笑うにぎり飯　大阪市　上田柳影

寝顔には生れたままの顔でよい
のぼりつめ明日は知らぬ天道虫
みの虫の僕にも区名変更書
旅がえりごめんごめんと水をやり　西宮市　秋元てる

今あげたばかりの賽銭集められ
教養が邪魔で火の玉にはなれぬ
世話好きな傘で息つく暇がない
子飼いという言葉が生きて連座する　尼崎市　森安夢之助

嫁が来て新風が吹く我家なり
最善の手はつくしたと医者はいう

野良犬が割り込んで来た二人暮し
初めから読む気のない本を買う
岐阜市　渡辺杏村

梅桜藤へと続く花見酒
転勤が話題となった昼休み
鯉のぼり公害の空咳をする
古墳群俄か学者が押しかける
出雲市　金森知恵子

春動く気力充満する新芽
つい口が滑ってミスもこぼれ出す
花よりも実を人生を地味に生き
故里の山が視界にある安堵
吹田市　井上照子

甘酒が後悔の胸熱くする
老いてなお夢を轆轤にかけている
伝説にひかれ訪う山の里
アバンチュール余生の夢が広くなる
寝屋川市　豊福路子

句集むらさき読めばやさしい句が生れ
合格のお礼参りがおそくなり
貝殻の中では狭い春のゆめ
鈴懸が咲けばうれしくなる私
寝屋川市　宮崎菜月

子離れは何でもないよな親雀
叱られた後もたらふく次男坊
落ち込みへカッチンうどんが慰める
鉋屑ひょろひょろ泳ぐ水溜り
鳥取県　西浦小鹿

巡礼の絆は春の海へ行く
喪が明けて和服の似合う女になる
岬めぐりのバスに二人だけ乗る
海の絵が描けず毎日みつめてる
尼崎市　鈴木良征

手作りパン誰かの臍に似てないか
転がり出した噂を止める術がない
あいまいな人に紹介された仲
逃亡を考えている木の芽どき
島根県　高野律子

活け上げて花の心にふと惚れる
良い友が本当のことを言ってくれ
娘に贈る言葉は母の命かも
古里に何処にも負けぬ川がある
尼崎市　明壁敏之

風上におけん輩が音頭取る
和解して急に空腹感じられ
笹舟の流れ童謡乗ってくる
どさ回り楽屋の裏の夕仕度
和歌山市　山口三千子

側に居ていつも濡れ衣着せられる
偉い人ばかりで話まとまらず

偶然のように本屋で待ち合せ
春そこに根回しをした椅子を待つ

熊本県　高野宵草

大手術した親呆けて生き残り
よもやまの話で散髪もう済んだ
役立たぬ男で詩人ぶっている
テレビ観て何にもせずに寝る時間

尼崎市　山田保蔵

美しく老いたらエンマも困るだろう
サラ金に恨み残して移転する
結論を先に言うたら皆逃げる
流れ星いずくの空を慕うのか

枚方市　森本節子

平成の二月は雨で過ぎてゆく
紅梅を見上げ頬ばる菜種ずし
絵心が物を見る目をこやしてる
作り置きの金平牛蒡で留守たのみ

西宮市　松本一郎

筋書は神のみが知る浮き沈み
故郷はのどかに瓦やく煙
夕焼けにバイバイ子等が右ひだり
子のくれた周遊券の温い旅

尼崎市　吉永伊三郎

左遷地で地酒を呷る冬の月
亀さんを信じ未来の道を行く

一仕事済んで地球の肌に寝る
視野にはあるが届かぬ金と女

鳥取県　太田幸枝

淋しさと気楽さ田舎にて候
くちびるの褪せないうちに嫁ぎませ
温泉と花咲く丘に独り居り
貧乏という神さまと古稀近く

佐賀市　江口万亀子

ポカポカの陽気がさそう試歩の杖
御馳走のように煮えている注射針
部長さん意外なほどに恐妻家
寄付帳が断われぬ人連れて来る

岡山県　千原理恵

月影がうれしい愛を浮き彫りに
愛の化石じっと抱いている命
二代目もそろそろレール乗ってくる
何ごとも投げたらあかんと子に訓す

和歌山市　森茜

フォーカスも顔負けになる社内報
残業へ月がのぞいた誕生日
腹たてることも面倒くさくなり
餞別を送るそれぞれの価値観

守口市　森川春子

屋台店いつも出ている柳かげ
流し雛土産の棚に飾るなり

法善寺田舎の客を連れ歩き
迷ったがやっぱりきつねにしとくなり
鳴門市　八木芳水

鈍角に暮らしみんなに愛される
愛想はよくて返信くれぬ人
戸締りも出来てその日の疲れでる
結び目がいつかゆるんで物忘れ
貝塚市　池田寿美子

ストレスが夢に溶け行くオルゴール
喝采を浴びて謙虚に反省す
コート着せポンと背中叩いとく
逆立ちしても若くなれないものがある
富田林市　大澤三四子

たっぷりと静寂吸って朝日が出
遠眼鏡下げて素直に野鳥見る
鷹になれ叱咤激励塾通い
覚えたて使ってみたいカタカナ語
羽曳野市　麻野幽玄

コインランドリー単身赴任の連れが出来
度々見舞ってくれてた人の訃よ
きっと来る母は信じる五目寿司
ちらほらの頃から桜見上げられ
大阪市　吐田純子

新築へ越して禁煙強いられる
切れ味の悪い男の愚痴を聞く
輪の中に一人拗ね者いて困る
財テクの数字伸びたり縮んだり
高槻市　芦田静江

彫ふかい埴輪の像に見る平和
無表情の影に生きてた童唄
根まわしのうまい男の影法師
羽ばたきのステップ孫の親ばなれ
京都市　小林英子

飲む程にグラスに溜る自己嫌悪
淀みなく白寿の絵ふで富士を盛る
さりげなく妻と書かれた夢旅情
しるこ屋でひと休みする春彼岸
酒田市　永沢裕子

身勝手な願い許りで手を合せ
良妻があやしくなった定年後
カーテンが揺れて噂を探ってる
人形のようには行かぬ孫の守り
尼崎市　野瀬昌子

ダルマにも話相手が欲しい日も
パート募集五十迄と書いてある
宅配の弁当を待つ一人者
精進の良い人と行くバス旅行
岡山県　後安ふさえ

春財布五円を入れて友がくれ
これ以上欲は言うまい共白髪

半日を砂場で遊ぶ孫の守り
古里の友は言葉を飾らない

広島県　森川抜智

特売場男は階段の椅子で待ち
働いて損をしているサラリーマン
リクルートという怪物があらわれた
君ヶ代が嫌なら炭坑節なと唄え

大阪市　今西静子

焚火して日雇街を朝にする
侘助の一輪ざしがある個室
大正のロマンに染まる華宵展

寝屋川市　井上すみれ

明日からはお嫁入先で爪を切る
へらず口いつも用意するお人
同病がお互い廊下で診断し

香川県　上藤多織

派手かしら一度は言うてみる試着
文学の小道　話に花が咲き
レストランのメニューに愛が見当らぬ

岡山県　大石あすなろ

妥協して水に流してから眠る
それからの話が長くながくなる
荷の重い話に二の足ふんでいる

出雲市　岸桂子

指先でつかめる程の幸の中
化粧して今日一日が始動する
小銭入れ私の暮らし知っている

尼崎市　木下義嗣

貯金帳妻に時々調べられ
赴任先夢で毎晩帰りたい
風止んで山は素直に笑ってる

尼崎市　新井泰子

つっぱりがつっぱりのまま旅立つ日
石けんの香りに今を確かめる
ハモニカが聞こえて来そうな春日和

枚方市　中山おさむ

河川敷ひとりになれる石の椅子
てのひらの砂がこぼれて愛終る
倖せも中途半端な片えくぼ

鳥取県　久野野草

一粒の種に大きな夢を抱き
春一番となりに嫁の荷が光る
畦道の続くかぎりは草もえる

徳島市　宮武まつ女

強風をものともしない春の蝶
平成の重さへ掬う春の水
らくがきの傘が濡れてる樹を揺する

鳥取県　西川和子

花束にそっとカードが添えてある
たくましい蝶が選んだ白い花

郷愁にダイヤル回す雨の午後　田辺市　染道佳明

満天の星空を見ているゆとり
たまには左手で書いてみる文字
恋女房などと夫も粋なのね　鳥取県　鈴木芙美

浮雲のなんとのどかな春の旅
名古屋から大阪の旅娘をめぐり
かたつむり天を仰いで遙かなり　堺市　神原文

二人で食べるおでんがうまい花の下
着陸の瞬間命惜しくなる
洗いものあしたにすると飲み明かす　倉吉市　青砥菊枝

根性はないさ世渡り上手いだけ
サラ金でホッとした日もあったでしょ
コーヒーと想い出が好きティールーム　寝屋川市　河合時弘

もう山の見えた酒席に出る茶漬け
少年の夢よみがえる華宵展
病院の片隅に灰皿ある安堵　米子市　服部朗子

一押しが出来なくなって逃げようか
土壇場で柱時計が鳴り出した
老い先の影を気遣う子の便り　枚方市　山崎彩子

浮かぬ日々香水の名はジョイなのに
新しいキャンバスに先ず深呼吸
二時間の視線に耐え得る師の好み　静岡市　小木久子

口止めをされて口止めして話し
成人と認めてくれた選挙権
血の絆意外に脆いものと知る　吹田市　山田里子

気の張ったコーヒーカップに紅がつく
信号のないふるさとで安らげる
陽に向けて作業衣干せば蒸気立つ　寝屋川市　太田藍子

知名度が低くて噂にもならず
責任の話題になると下を向き
欲張りな夢を見ていた玉の輿　佐賀市　古川一徳

世渡りが下手で歩幅が変えられぬ
空振りの父の姿は作業服
草餅の香り郷土の村おこし　富田林市　山原昭水

冷蔵庫いっぱいにして妻旅行
思い出の鎮守の森がゴルフ場
うちの娘にナフタリンでも持たそうか　流山市　神田治

人間をウキウキさせる春の嘘
一人になればやはり空しい花の酒
満点の男を捨てるおとこ運　和歌山市　田中みね

是非逢いたいてなこと書いた文よこい
血を分けた母より義母にみる温み
離縁状子の無きことが幸いし　大阪市　尾崎黄紅

吹き溜りに生きて優雅な詩を詠み
老妻と語るは過去のことばかり
粗品進呈なるほどに粗品だな　静岡市　久保きぬ

逆らった意見寂しい後遺症
いい姑にされて不満を言いそびれ
子の罪を親は二重の罰をうけ　米子市　大田みさと

荒磯の岬まわれば友が待つ
観光船岬の秘話を歌に込め
勝つよりも負けて気持が楽になる　兵庫県　酒井靖子

満開の梅に手が出ぬ花ばさみ
空意地を出し切り春の風に乗り
気兼ねしつ嫁のほころび姑が縫う　旭川市　朝倉大柏

たかが男そんな男と棲み慣れる
蹴り返す靴を磨いてくれる妻
忍の字を守り通している案山子　青森県　荒田つる

小金など溜めて年寄り落ちつかず
コーヒーとパンで田植えの朝を出る
連休は田植え予定に組み込まれ　松江市　豊田巡歩

合格で早速車買えと言う
何となく春らしくなり土動く
回診のときドクターにあまえてる　鳥取県　武田照女

花言葉熱い想いを温める
ひとり居の暮しになれた目玉焼
足許を先に見られた示談金　静岡市　柳沢たま

神前に親子着飾る七五三
若いわと言われて一寸背延びする
神仏に願う心は命乞い　鳥取県　横山房子

老骨に鞭うち生きる欲をもつ
弱点のある夫婦だから馬が合い
子育てを卒業してから太りだす　豊岡市　三宅つえ子

眠れぬ夜数かず聞いた子守唄
桂林が匂う器の蓋をとる

ガラス器に夢が広がるサクランボ　堺市　近藤豊子

姉いもうとそれぞれにあり雛の客
青春の部屋にビビアン・リーもいた
梅林の風人を留め車留め　堺市　船越重子

激動を共に過した昭和逝く
写真機が右往左往の運動会
胃カメラを呑み俎の鯉になる　泉佐野市　真崎浪速子

子には子の楽しみ泥と水溜り
横顔に男の嘘が書いてある
妻の掌の上で上手に舞う男　熊本県　増田一乗

仲人を主賓に据えて初節句
民宿は木の芽和えに牡丹鍋
人形負う子をおんぶしてママバイク　藤井寺市　武部敦子

カーテンを閉めてへそくり数えてる
未来図は兎と暮す月世界
秘書の夢やっぱり社長にあこがれる　藤井寺市　中島志洋

連休が済んでぐったり出る疲れ
母の日母は中座へ泣きに行く
耳たぶが迷惑そうなイヤリング　八尾市　片上英一

一身上の都合で万事けりつける
節分に歩くとどこも鬼ばかり
音景色　雪とカモメと波ばかり　岡山県　中嶋千恵子

すんなりと語りつがれた童唄
釣銭の枠をはみ出る消費税
卒園の孫の演技も熱をおび　和泉市　中川楓

逃げ道を一つ残して叱る父
北風に顔つぶされて逃げられる
事故ニュース他人行儀なアナの声　米子市　小塩智加恵

頼む顔頼まれる顔街で逢う
隠居だと言いつつ父は小旗振る
孫帰省一日だけは面かぶる　奈良市　米田芳子

雨しきり世間話の旅の宿
アメリカン香り楽しむ旅の駅
家風呂で名だたる温泉入りつくし　鳥取県　乾隆風

だいこんの花と身の上ばなしなど
うぐいすの声にほだされ田んぼ鋤く
あの頃は葉桜でまだ炎えて居た　和歌山市　前田美子

この土地でやっと馴染んだ里言葉
連休のごろ寝のツケが胃にたまる
悪女になったつもりで面をつけ

島根県　加本義良

ネクタイをゆるめた酒にどっと酔い
ライバルに見せてはならぬ二日酔
正直なだけでは迷路抜けられぬ

唐津市　中村順子

もう父が起きているらし朝厨
騙された男へ逢いにゆく化粧
沈丁の香に誘われて散歩する

宇部市　中村三良

消しゴムで自分史の曲り角を消す
自負と自我に振り回されて少し老い
レモン厚く切って二人に朝の冷え

岡山県　福原悦子

子の返事素直に聞いて負けておく
忍一途山頂までの修羅の道
絵羽織のそこから聞える亡母の声

岡山県　松本元江

巣の中に抱いているのは不発弾
爪を噛むきっとあの子は自閉症
春うらら花盗人の目が光る

川西市　西脇冨美

笑顔では届かないから拍手する
にこにこと医者はカルテと見くらべる
春炬燵身の振り方をきいている

鳥取県　山根八重

道草を許してくれた鍵ひとつ
弱点を拾ってくれるひとがいる
デートした余韻を横にして眠る

吹田市　山本希久子

折返し過ぎて景色が見えはじめ
美女通り過ぎ一陣の風が吹く
落人をかくまう谷の山桜

十和田市　阿部進

上役がその上役へゴマを擂り
結び目がだんだんゆるむ倦怠期
上司にはペコペコしてる二枚舌

和歌山県　岩崎瑞穂

春一番冬のうつ憤吹きとばす
驚嘆の一声高く富士の山
怒っても無邪気な孫は笑ってる

島根県　喜島ノブ

想い出の華も咲かせる見舞客
リハビリの努力が実り身も軽い
見舞客思い出せない顔で来る

新潟県　高野不二

看護婦の言う事聞いても眠られず
平成平成と言いなれてみる

礼金は神様までは届かない　京都市　渡辺圭坊

梅の宮も一度来たいカキツバタ
久し振り晴天どの家も布団干し
夏咲きの花の種撰る彼岸前　相生市　中塚礎石

天皇と共に歩いた昭和道
おばはんと呼ばれてはいと返事する
義理チョコでいいから一つ欲しい顔　静岡市　西村千代

言えぬ愚痴袋に詰めて川に捨て
八十の手習い今日も辞書を繰る
綴り方子の正直へ笑う親　今治市　渡邊伊津志

嫁自慢する中老の顔の艶
棟梁が持つと金槌音を変え
本棚の古書から蒼い海へ出る　堺市　井上たかし

留年と子はほがらかにバイト馴れ
パチンコの好きな男のでかい夢
定年にだんだん狭い守備範囲　鳥取県　黒田くに子

お日様と朝のあいさつしています
カーテンのすき間にあった落し穴
雑踏の一人ひとりにあるポーズ

先帝の御遺徳解るいつの日か
針供養日本女がまだ多勢
庭石の陰に残雪陽はうらら　岡山県　牧野秀香

今朝も晴れ生駒の山の春霞
大都会今夜も走る救急車
アメリカへ行って来たよと軽く言い　大阪市　堀口欣一

ちょっぴりと嫉妬横顔美しい
くよくよせぬ妻にはいつも救われる
下積みの人生で小金貯めている　橿原市　西本保夫

唐三彩馬俑たしかに嘶いた
頬張ってからタコ焼の熱さ知る
紀の川の投網に夕陽落ちかける　大阪市　桝本蕗児

そろそろと酔がまわった泣き上戸
命ある限り咲きます女です
村を愛し土を愛した母の爪　岡山県　福原辰江

たのみ事太鼓叩いて神起こす
人生の下りの道でまた転び
九官鳥飼ってかたきを討ってみる　岡山県　富坂志重

静岡市　宇佐美寿美

掘ごたつ足の指まで旅に酔う
青い鳥見つけ白無垢旅に立つ
胎動に語りかけつつ母となる
愛媛県　八塚三五島

買物につきあっているそれも愛
一本の藁も願えば神となる
餌づけ箱野鳥足腰のばしてる
南国市　窪田和広

日に三度忘れず薬飲む余生
吉と出たみくじに少し期待する
小雨決行熱気が雲を吹き飛ばし
鳥取市　武田帆雀

ネズミ捕る猫で血統書はいらぬ
恐喝のように催告状が来る
真直ぐに登る紫煙に風が出た
広島市　名和喜一郎

ちゃん付けで残り火爆ぜる同窓会
裏道を覗くのもよしこの辞令
もうひとつ先の駅まで行きたいな
富田林市　楠美子

たっぷりと陽ざしが欲しいシクラメン
町灯り恋しくなるような旅をして
掌中の珠もそろそろ持てあまし
兵庫県　倉垣恵美

片手だけ後ろに隠している主張
飛び込めばふところ案外広かった
愛されているのは白い猫のほう
岡山県　後安江山

今ならばきっと優しく出来たのに
花占い少女は恋を知りそめて
心の隅に何時もやさしく生きつづけ
岸和田市　三輪通彦

賞味期間過ぎた妻でも赤を選る
無い袖は振れぬと妻は素っ気ない
堅物と思えぬような渋い喉
唐津市　福島紀一

自民党いくら切っても血も出ない
公認にもれて男は勝負する
市町村一億円であしらわれ
岡山県　平田たけよ

やさしさが一句一句ににじむ女
山盛のみかん見すごす遍路笠
花便り旅のプランも練ってみる
奈良市　井上大

偏差値と異なる親の志望校
アトム星皆で送った星の夜
一円貨拾っておこう消費税
河内長野市　大西文次

勝目ない喧嘩を妻としてしまう
冷蔵庫空っぽにして孫が去ぬ

川西市　野村静雄

自嘲する話ばかりを昼の酒
年寄りを看る年寄りになりにけり

静岡市　大村正雄

強き母ありて一家のまとめ役
ほころびが知らないうちに縫ってある

鳥取市　森山豊子

相合傘歩幅ちがって濡れて行く
家の子とひと目で分る孫が出来

鳥取県　木下芙葉

寝たきりの薬頼りに明日を生き
日曜日重宝がられ使われる

鳥取県　石尾かつ乃

メモ片手可愛い嫁の匙かげん
土愛し土を信じて種をまく

鳥取市　岩原喬水

憎いほど姑ますます元気です
突然の出合い名前が浮いてこず

大阪狭山市　桜井荘次

真っすぐな道しか知らぬ急ぎ足
人の目を忍ぶ二人に影がない

八尾市　向井しづ子

そこにある物が見えない自己嫌悪
宣伝も明るくなったJR

大阪市　島路太郎

寝たきりにナースコールが命綱
何かしておらねば淋しい春の宵

八戸市　島田昭治

青い空何故に核など考える
しばらくぶり方言同士の高笑い

鳥取市　西村勲光

枯れ木にも花を咲かせる詩心
地球儀が右へ傾く胸騒ぎ

伊丹市　猪原石荘

小さいがジャンパーを着て子らのボス
立話二階の窓でみんな聞き

河内長野市　岡崎実

生涯の仲間は妻と気づいたり
強情を通し汚職に縁がない

大阪市　乾哲静

合鍵を許した恋に悩まされ
仔猫まで蹴散らす今朝の忙しさ

静岡市　片平静代

見合席私の値段決められる
山盛りの料理お腹がよせつけず

静岡市　三浦つね

漫画見る子供掃除機追いたてる
古本屋漫画で埋めてよくはやり

鳥取市　萩原美雪

赴任地へひょっこり妻が来てあわて

とりやすいとこから税をふんだくり　静岡市　増田扶美

また来たくなる民宿の人のよさ
子に背丈越され喜び心配と　鳥取県　前田嘉津江

まっすぐに伸びよと杉の枝を打つ
海猫の歌も悲しい時化の海　岡山県　森下正子

軽口の中から拾った良い思案
美しい思い出詰めた玉手箱　大阪市　山北三三三

旅はよし妻と二人は更によし
新婚も旧婚もいるツーリスト　泉南市　坂根流水

ちょっとだけ惚けて家族の和を保ち
啓蟄に浮かれて出たが世は無情　高知市　山崎一求

心身の防腐剤です趣味の道
顔見れば秀才ばかり受験生　静岡市　三井三津子

この人と決めると酒もうまい味
春うらら新婚さんの大欠伸　唐津市　浜本治幸

こだわりに酒が力を貸してくれ
毎日が休日なのに暇がない　出雲市　高橋きよし

万国旗ひらめく過疎の運動会
目がとどくとこに置きたい姫鏡　川西市　田中喜俊

成人の孫振袖がよく似合い
山荘に長年住んで坂に慣れ　島根県　菅田かつ子

二号にも遺れと遺言状には書けず
雑談を聴かされながら歯を抜かれ　豊中市　みきわきみ

撮り方はまずいが俺の孫ですぞ
消費税上乗せ香奠持って来い　兵庫県　奥野テル

苦は楽と見きわめて来た今日の幸
はるかなる思い出みんな美しい　神戸市　岩田信義

分数のままで許せぬ苦労性
灰皿の煙草の煙の自己主張　静岡市　青柳金吾

口止めが孫の口からもれていた
相傘が喜んでいる俄雨　大阪市　平井露芳

平成となっても昭和の孤児残る
コマーシャル江川の福耳金を売り　神戸市　石神草風

医者嫌いくすり嫌いが長寿法
天神さん梅を観るにも銭が要り
藤井寺市　菊地繁男

野次馬がアレヤコレヤと指図する
裕福な国で貧しく暮してます
藤井寺市　楠昭子

開き直ると前後左右気にしない
笑われる先に笑ってこれも知恵
大阪市　平山登代

行けもせぬ旅案内を見るばかり
角力茶屋重いお土産持って来る
静岡市　大石たき

魂胆があるから父に世辞を言う
友達が増えてうれしい老人会
静岡市　浅子まつる

首揃え出る葱坊主春を告げ
眠りつく頃に屋台のラーメン屋
岡山県　清水悠貴女

仏さま春が来ました草だんご
初出勤の孫へ仏の灯をともす
岡山市　河野青銅

単身へ空気のような妻を恋い
真夜中の蝶はカボチャに載ってくる
静岡市　丹羽定次

赤札を見つめる妻は買う気有り

ランドセル弾む心で入学式
静岡市　山中竹野

カトレアの芽をはかりつつ花を待つ
言い訳をさめた心地で聞いている
芦屋市　根来敬

黄昏よ我が生き様を責めないで
老練さを一徹が邪魔それだけさ
泉佐野市　大工静子

あんばいと帖尻合った幸不幸
久し振り帰って出荷の手伝いす
島根県　兒玉幸子

ポストから夢が届いた嬉しい日
初入社の孫を家中で送る
岡山県　土居ひでの

一段と輝く米寿の夫婦雛
啓蟄へ蛙もふるえる春の雪
青森県　木村喜衛

たかが三パーセントされど多額の消費税
農協は旅と物売りの商売屋
呉市　岡田寿美礼

八十の顔小さく笑みて初鏡
八十路坂春の訪れ福寿草
大阪市　清水利武

港神戸異人街あり粋な町
春場所が明けて浪速に春の色

マンガでも心に残る本がある　豊中市　滝北博史

城のある町にはうまい桜餅　豊中市　村上とく子

休診日虫歯押えてすする粥

いい名だが嫁ぎ先では凶と出る　出雲市　森山健歩

丸腰の庶民を襲う消費税

離農促すバイパスへ田が売れる　岡山県　伏見すみれ

郷愁をそそる訛が忘られず

古稀過ぎて節分の豆まだ噛める　姫路市　谷清柳

統領は竹光ぬいて身構える

この橋があるから未練捨てきれぬ　唐津市　入江喜久夫

焼芋の匂いに姑の眼が光る

沈丁花恋知り初めし春想う　摂津市　もちづき遊美

顔見えぬ恙無しやと思う日々

内輪話少し零して行く患者　大阪市　川原章久

親想い息子夫婦に媚びるボケ

居て欲しい息子は既に昇り龍　倉吉市　橋本さつき

日本海逃げても所詮雑魚は雑魚

酒くさい便りさみしい男より　豊中市　額田明吉

大喪の流れの間に間世相見る

記帳する心に古都の鹿の声　岡山県　江口有一朗

孫と来てお子様ランチ二人分

平凡に徹し切れない平凡さ　豊中市　田中道胤

残照の中で自分史読み返す

一枚のカードも用のない暮し　兵庫県　円増貞子

俄か雨かけ込む軒でお茶よばれ

平成へ平和を願う鶴を折る　茨木市　藤井正雄

胃カメラを涙でのんだ物語

白旗は手土産の寿司終電車　静岡市　滝田たけ志

したたかに手段選ばぬ金あさり

さりげない仕種の内に秘めた恋　岸和田市　岩佐ダン吉

火が消えたようです末の娘まで嫁き

列島は三パーセントの春嵐　静岡市　中西雅

白線に並ぶ選手の眼の光

おみくじの吉にすがって夢ふくれ　豊中市　小林一夫

高級酒ときに賄賂の味がする
彫刻展まず母子像が凜と立ち　岡山県　杉本伊久栄

竹槍をかついだ昭和も終り告げ
九十の姑がハッパをかけてくれ　鳥取市　松本伊都子

店頭で家の野菜と比較する
茶柱が立って予定変えて見る　島根県　松本聖子

水面下で決めた人事の後始末
暖冬に欺されました狂い咲き　寝屋川市　北岡波留吉

出雲神楽に古代を偲ぶ一人旅
渦潮にしごかれて美味鳴門鯛　吹田市　西岡豊

浅はかな仲間あつめて猿芝居
ホステスも二流どころが性にあう　島根県　岩田三和

おごそかに大喪の礼首都の静
大笑いのど仏にも陽があたる　島根県　今川三津江

おもろい事ないかと友へ電話する
山一つ崩す地球へひびく音　箕面市　岩津岳夫

親近感陛下といわずてんのはん
放送局という奥さんがいる社宅　鳥取市　近藤秋星

真実を記す日記の重たさよ
てのひらで雪を受けてる暇な人　富田林市　浦田トシエ

戸をたたく春の嵐に眼がさめる
小雪舞う参道嫁とうどん屋に　和歌山県　田中隆積

春風が心のすきま埋めてくる
遠くからジッと見ている老父の目　富田林市　加藤ミツエ

平成や二十歳の孫の晴れ姿
古ネクタイで豆ひな作り段飾る　東大阪市　大平太一郎

父ゴルフ母は内職僕は塾
一年生テルテル坊主も友達に　鳥取県　美田旋風

建前で飲んでる酒は肩が凝り
髪型を妻は鏡と話してる

◆ジュニアの部

友達は何より私の宝です
ホワイトデーいくつお返しくるだろう　大阪市　福西範子（小五）

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

小林　由多香

自信過剰だんだん酸素薄くなる

石川　侃流洞

自信を持つことは大変、結構なことであるが、持ち過ぎると往々にして自分を苦境に追いこむことがある。「酸素薄くなる」がおもしろい表現。

ティータイムみんな漫画を読んでいる

西山　幸

確かに漫画を読んでいる。一人でならまだしも、二人で居れば二人とも静かに読みふけっている。漫画でいささかなりとも疲れがほぐれればいいんじゃないですか。

葬式へ行くときだけの夫婦連れ

高杉　鬼遊

こんな夫婦が他にもあるんだなと、心強く思った次第。別に夫婦仲が悪いというのではない。むしろ夫唱婦随、波風のない夫婦ではなかろうか。

面つけぬ同士の酒でよく弾む

西口　いわを

いくら好きな酒であっても、人の顔色をうかがいながらの酒ほどまずいものはない。気心のわかった者同士で飲む酒は格別うまい。「よく弾む」にその雰囲気が伝わってくる。

すっ裸知恵より他に武器はなし

本間　満津子

知恵という武器ほど頼りになるものはないじゃないですか。金や物には限りがあり、目先だけの道具にしか過ぎない。時には悪知恵などもいかがでしょう。

お見舞に行くしあわせを噛みしめる

津守　柳伸

こんなしあわせもあるんだな、ふと感じさせられた。考えてみれば、自分は健康であるというよろこびであろうが、実にうまく詠まれたものだと思う。

冬の陽が何か忘れたままおちる

吉岡　美房

つるべ落しは秋であるが、冬の日も短い。特に曇った日、雪模様の日は暮れるのが早くやり忘れたことがあるように感じさせる。「何か忘れたまま」と言い切った表現が良い。

僕だって灯りをつけて妻を待つ

堀江　正朗

「僕だって」に目の不自由な正朗さんの、誰にも負けないぞという奥さんへの愛情が強く伝わってくる。また、「灯りをつけて」に正朗さんにしか詠めない句の感動を覚える。

減点を探すと審査やり易い

辻　白渓子

一般的には良いところを見て評価されるものであるが、普通良いところの方が多いので悪いところを拾った方が早く計算ができるというもの。

一夜明けて思いすごしの顔洗う

寺沢　みど里

一晩考える、とか、一晩寝ればなおる、など言われる。静かな時を持つということであろうか。思いすごした自分が情けなく思うこともある。「顔洗う」は反省でもあろう。

老いらくの恋をたっぷり夢で見る

植山　武助

たのしい夢であり、たのしい川柳である。いいところで覚めるのが夢であるが、たっぷりとは羨ましい限りであり、こんな夢に一度あやかりたいものである。

ケーキより美味しい言葉ありがとう

真喜田　實

ケーキより美味しい言葉ってどんな味のする言葉であろうか。なかなかしゃれた表現であり、また、「ありがとう」がこの句にぴったり。ごちそうさまと言いたい。

黙ってる父が一番うれしそう

松高　秀峰

黙っている父の句は今までに何句もお目にかかったが、「一番うれしそう」が良近に感じられるお父さん像と思える。

愛染帖

橘高薫風選

大喪の日に大観の山険し　伊丹市　樫谷寿馬
妻の雛四月一日まで飾る　藤井寺市　高田美代子
正直な人で火になり水になり
ハードルを上げてみようか桜咲く　大洲市　米沢暁明
うまい水末期の水はなくもがな
誰もいぬ廊下走ろう思いきり　寝屋川市　岸野あやめ
雛据えてノラにはなれぬ我と知る
切り札が福沢さんに似て来たよ　大阪市　小出智子
それも浮世傘を買ったら雨が止む
自転車に乗って私を捨てにゆく　仙台市　川村英僖
四面海汐の香消えてゆく恐さ
徹底追及わが事知らん顔をして　黒石市　相馬英三
生きてれば地獄で死んでまた地獄
ペンギンがぞろぞろ歩く祝賀会

出土品アダムとイブの匂いする　守口市　羽原静歩
平成の流れも同じパチンコ屋　堺市　山本半銭
一分の黙祷胸の奥が鳴る
キッチンの最早姑の城でない　鳥取県　土橋蛍
鼻の下擦ると悪い知恵がでる
学成り難しピンボケて卒業す　島根県　松本文子
皆嘘だから枯葉になっていく　名古屋市　藤井高子
錯覚でよし美しきものこの世　米子市　八木千代
きのうより大事になってきたからだ　藤井寺市　福元稔
代議士をみんなで流し雛にしよ　奈良市　米田恭昌
海猫は岬を守る防人か　和歌山市　西山幸
復活祭の帽子にいつも憧れる　流山市　神田治
日本の文化か知れぬタモリの眼　西宮市　奥田みつ子
カラスの声雪が頭に落ちてくる　米子市　林荒介
白牡丹姉の手紙にははが居る　米子市　川上より子
鬼ごっこ鬼ごっこだろおーいおい　弘前市　斉藤劦
大根の白は工場のものでなし

朝ぼらけ老い美しく二歩三歩　東大阪市　大平太一郎
一長一短差し引けばただの人　青森市　工藤甲吉
セピア色なれど凜凜しき竜馬かな　堺市　近藤豊子
射損じた事を善人気付かない　出雲市　森山健歩
キーボード打たぬひとときを数珠を提げ　町田市　竹内紫錆
真黒い下地は赤い色だった　竹原市　信本博子
おお事に成らない程の恋もして　和歌山市　田中輝子
死に急ぐ命を待っている移植　和歌山市　牛尾緑良
夫病んで命あるものみな愛し　富田林市　藤田泰子
雑草の花に貰った花言葉　名古屋市　越村枯梢
木の芽草の芽風も私も病み上がり　和歌山市　神平狂虎
謎解きをしている縄を綯っている　和歌山市　後藤正子
涙するたびに記念樹太くなる　香川県　上藤多織
闘いへ乱れを知らぬ蟻の列　今治市　越智一水
償っても白いハンカチにはなれぬ　米子市　青戸田鶴
大根の白は工場のものでなし　堺市　高橋千万子

応接間ウソつく人が入れ替わり　箕面市　椎江清芳

不揃いの皿は子育て繁昌記　和歌山市　山川克子

ロボットの様なウエイトレスがくる　富田林市　片岡智恵子

かもかもめ手帖に春の日が溜まり　鳥取県　江原とみお

頭陀袋に青梅ひとつ入れておく　鳥取県　新家完司

流れ去る景色の中に君がいる　岸和田市　原さよ子

ペン先を替えて履歴書書いている　米子市　菅井とも子

抜け道は必ず持っている林　高槻市　河瀬芳子

女雛酔い給えり扇落ちている　唐津市　田口虹汀

小さい噂があっという間に海へ出た　島根県　小砂白汀

鷺孤独群れていてさえなお孤独　米子市　小村てい子

目の前で上がる遮断機のめりこむ　米子市　金山夕子

花飾り春のピアノはよく響く　廿日市市　森川抜智

ちょうどよいところへ来たがくせものだ　八尾市　向井しづ子

戦士の碑涙の様な冬ざくら　唐津市　久保正敏

列島を曇天にして霊車行く　茨木市　堀良江

芽吹く音大内山はあるじなく　鳥取市　西尾呼風

春の雨卑弥呼の記事を切り抜いて　西宮市　松本一郎

警策の音雑念をかきたてる　富田林市　松本今日子

間違いなく私を乗せるエレベーター　吹田市　栗谷春子

逝く春やほどほどなりし虚と実と　鳥取県　さえきやえ

お月さま嘘つきごっこに負けました　神戸市　岩田信義

ポケットの手を出してから何をする　米子市　白根ふみ

それは山ほどの果物もるひとり　唐津市　山口高明

風みがく女は夜の狩人で　徳島市　宮武まつ女

炎の彩よりも精いっぱいの葱坊主　島根県　柳原秀子

春の雪あなたに告げることがある　米子市　田中亜弥

橋渡る人を数えて夕暮れる　今治市　月原宵明

フルムーン椿のアーチだけくぐり　大阪市　尾崎黄紅

童謡を聴く涙ぐむ歳になり　岡山県　福原辰江

巣を守りとびたい夢も捨て切れず　姫路市　大原葉香

お隣の時計も二時を打っている　岡山市　川端柳子

べからずがあまりに多い白百合　和歌山市　青枝鉄治

医療費がただと思えぬ肌の艶　吹田市　西岡豊

ああしんど二歳の孫に惚れられる　姫路市　中塚遊峰

腑甲斐ない母が見つめる息子の背中　鳴門市　八木芳水

胸のうち煮えくり返る笑顔あり　島根県　堀江正朗

夜昼のない白杖とマイペース　島根県　堀江芳子

赤ちゃんのように湯舟の夫洗う　大阪市　塩田新一郎

一大地シルクロードと長城と　唐津市　筒井朴竜

戦時には兵器で飛んだ伝書鳩　高槻市　川島諷云児

この歳で何をいまさら自己顕示　堺市　神原文

とむらいの数珠ファッションになってくる　尼崎市　春城年代

たくさんの情けに傷が癒えてくる　米子市　光井玲子

ともかくも流れに添うて生きてきた　羽曳野市　吉川寿美

ついの日へせめて白足袋白くはく　岡山県　土居ひでの

香焚けば亡父二十五歳の句の出合い

守口市　森川まさお
駈け抜けて轍のあとがすぐ消える

和歌山市　堀畑靖子
激辛の妻にならせたのはあなた

和歌山市　桜井千秀
古狸どうも私のことらしい

豊中市　辻川慶子
彩よりも匂う尼僧の白と黒

弘前市　波多野五楽庵
逢いたさがつのる暦は春になる

堺市　井上たかし
どれがどの季節だったか果物屋

川西市　松本ただし
十字架も少しは軽い古稀の春

奈良県　横井都姫子
久しぶり逢う日の雨は味方かな

茅ヶ崎市　山上元孝
その内にケンカもできるよベト・ドク君

鳥取市　小谷美っ千
こころの中に男と夫が同居する

守口市　結城君子
生産のけむり真直ぐに上る

高槻市　笠嶋恵美子
追い込みの鞭にも駄馬のマイペース

高槻市　小松良
沈丁花一対の香で迎えられ

唐津市　福島紀一
雛かざる老妻に桃の花一ひら

川西市　野村静雄
面白しヨイショと言えば掛け易し

箕面市　岩津岳夫
この店のワケギのヌタが好きやねん

枚方市　山崎彩子
得意気に玉虫色の鳩の胸

広島市　名和喜一郎
湯煙りに男の軽さ浮いている

和歌山市　古久保和子
口火だけ切って高みの見物す

鳥取県　西浦小鹿
裸木を孕ませてやる風になる

芦屋市　根来敬
手の平に少しとまって消えた雪

大阪市　北勝美
治療受け歯医者の素顔見ないまま

唐津市　中村順子
妹の病背負うて雛流れ

寝屋川市　堀江光子
再びと書くことの減る日記帖

河内長野市　岡崎実
景色よし酒うまし村捨てられず

引前市　真喜内実
命令は受けずお願いなら聞く娘

静岡市　渥美弧秀
〝花〟合唱仲間の絆なお深く

米子市　石垣花子
地上げ屋がまぼろし見てた此のあたり

八代市　増田一乗
割り勘を社長経費で落とさせる

岡山県　清水かつとし
初出勤平らな道と思うまい

唐津市　浜本治幸
物想い犬も黙ってついてくる

唐津市　入江喜久夫
向い合う鶴の翼の舞扇

大阪市　上田かつみ
エゴもまた生きる一齣とは佗し

大阪市　町田達子
雛の宵きまって亡姉を夢に見る

豊中市　滝北博史
竜宮へ行ってください流しびな

米子市　小塩智加恵
孫の手のぬくもり残る二三日

和歌山市　森茜
私への懐剣ひとつしのばせる

鳥取県　土橋はるお
つららバラバラ折り踏ん切りがつきました

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「欲」　選者　**森中恵美子**
締切　**5月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43
NHK大阪放送局〝ふれあいラジオセンター〟川柳係

発表　5月28日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

堀端三男

居眠りをしている母が好きになる

西浦小鹿

ホーム炬燵でテレビを見ながら、縁先の日溜りで編物をしながら、居眠りしている母の姿を好ましいと受取る母と娘の愛情溢れた微笑ましい句。母を姑に変えて、こういう気であったら嫁姑の問題も起こらないだろうに。

どの子にも一寸小さい亡父の靴

尾宮弘治

最近、少し子供の成長率も止まったようだが、戦後の我が国の子供の成長はすばらしく、中高生になると親を追い越してゆく。亡父の靴が小さい子供の成長を喜ぶ親の気持が素直に表現されている。

気がつけば十日も日記書いてない

山田保蔵

一日の過ぎるのが年とともに早くなるような気がする。知らぬ間に、日記に空白が出来ていて、さてこの日は何をしたかなと思い出すのにひと苦労するものである。

ドッグフード夫に渡して出発す

染道佳明

旅行されるご婦人が、留守をする夫や子供の、「何日間の餌を冷蔵庫に入れて来た」などと笑わせるが、本当にご婦人が旅行するのも楽でない。ペットブームの昨今、愛犬の世話を夫に頼んで出発したのだろうが、前者のように解釈するのも面白いのではなかろうか。

酒癖の悪さ任地へ先につき

明壁敏之

宮仕えのしたことのある者なら、誰でも経験のあることである。「悪事千里を走る」とか、悪いことは先に知れているものである。赴任したら貴方の長所もわかって来ますから、恐れず堂々と赴任しましょう。

最後まで本音に会えず来た訣れ

田中みね

何時、本音を出してくれるかと、心をときめかして待っていたのに、聞かずに訣れねばならぬはかなさ、気持がよくわかります。案外、世間話の中に本音が隠されることも。気落ちせず、もう一度アタックして見ては…。

戻り税ちょっぴりお洒落しましょうか

黒田くに子

確定申告の時期。今年から年金が雑所得となり、全員確定申告で、殆どの人は還付金があった由。あきらめていた税金が戻ったのですから、大いにお洒落に使っても誰も文句は言わないでしょう。楽しくなる句です。

口数が増えるとどこかに出る訛り

富坂志重

よく経験することです。初めのうちのザアます調も、話が弾むにつれて方言が飛び出すものです。方言にならないと本音が出ないものです。方言でいいから本音で話し合いたいものです。

定員のない献血の列に入る

西脇富美

輸血を必要とする患者が増えているのに、献血者が減少している昨今、あらゆる機会を利用して献血を呼びかけている。定員制の世の中で、上五の「定員のない」が効いている。献血の意志があっても、採血してもらえぬ悲しさ、列に入る羨ましさを思う。

世界地図さがすニュースが多過ぎる

青柳金吾

科学技術の進歩により、世界中のニュースがその日の中に茶の間に届く現在。内戦や難民のニュースでなく、楽しい話題に富んだニュースで、世界地図を広げたいものです。

医者に何聞いたか看護のまめまめし

宇野昭代

患者の気持がうまく表現されている。看護者の態度から、患者は、余計な憶測をするものです。病状がよくなったとの医者の言葉で看護の甲斐があったと喜んで、まめまめしくなったのでしょう。全快も近いでしょう。

女性コーナー

黄香の世

小出智子選

褒められてまたほめられる事をする　堺市　高橋千万子
差しかける傘に心も添うてゆき
やさしい医師に息子の顔をだぶらせる　和歌山市　山口三千子
くどくどと今日も息子へ片便り
春愁や独りはひとり箸の音　羽曳野市　吉川　寿美
ＩＣＵ祈りの中の息遣い
少し傷みをもつ人で手を繋ぐ
雨の日はあめの情けを身に受ける　寝屋川市　稲葉　冬葉
風船が割れて諦めつきました　岡山県　松本　元江
この種が芽を出す望みだけでよい　大阪市　神夏磯典子
新聞紙で卵を包む老母である　米子市　茂理　高代
もういっぺん夫婦ごっこをしてみよう　米子市　小村てい子
春一番スカート丈は短かめに　大阪市　鍛原　千里
向い風頭下げれば通り過ぎ　堺市　小西　小雪
和解まで時間のかかりそうな溝　宝塚市　丸山よし津
そんな時　男は一寸法師になる　和歌山市　堀畑　靖子
疑わぬペンを一本とっておく　名古屋市　藤井　高子
苛立ちを隠し切れないパンが焦げ　島根県　松本　文子
里の子がきっちりお辞儀して通る　鳥取県　川崎　秋女
物指しを女は急に変えられぬ　和歌山市　細川　稚代
歯医者への時間ぐらいはあるのだが　西宮市　奥田みつ子
仏様にも聞かせてあげる花便り　尼崎市　春城　年代
土買うて鉢買うて種子買うて　和歌山市　西山　幸
ゆっくりと青信号を待っている　大阪市　板東　倫子
一日一日疎かならぬ米を研ぐ　富田林市　藤田　泰子
出生の秘事をヴィーナス語らない　和歌山市　坂部紀久子
ウインドをのぞく女の夢心地　寝屋川市　岸野あやめ
医者らしくない先生を頼っている　堺市　船越　重子
国際線　見送ってからお洗濯　堺市　桜沢あか里
菜の花の彩あざやかな回顧録　大阪市　山本　半銭
雛の宵風は紫色で吹く　大阪市　津守　柳伸
すり鉢の底から春が匂い立つ　大阪市　町田　達子
柊を一株植える裏鬼門　守口市　結城　君子
髪を染め自分に暗示かける春　大阪市　鈴木　節子
影法師みんなの後に従いてゆく　高槻市　小松　良
風通し内緒話が吹き抜ける　有田市　生馬芙美子
今のことだけしか知らぬ川の面　吹田市　茂見よ志子
反省しきり部屋に鏡を吊りすぎて　大阪市　本間満津子
澄んだ瞳になろうと耳を洗っている　大阪市　西出　楓楽
横座りする仲でよしシクラメン　和歌山市　後藤　正子
お別れツアー話し足りない事ばかり　大阪市　上江洌勝子
猜疑心鍋の底まで光らせる　姫路市　都里　遊光
裏木戸の風のノックは師の杖か　富田林市　池　森子
とても哀しい弁解ばかり落ち椿　米子市　林　瑞枝
高槻市　河瀬　芳子

どこまでも付いて来るのは影ばかり　竹原市　信本　博子
目の保養だけにしておく和服展　和歌山市　桜井　千秀
焦点を合わせて誤解といてゆく　貝塚市　池田寿美子
独り言昨日とおなじことを言う　松原市　佐藤　藤子
いつも孤独でシクラメン枯らします　八尾市　高杉　千歩
留守番をしかと水仙咲きほこり　大阪市　古川美津枝
さわやかな笑顔戻した車椅子　岡山県　矢内寿恵子
六十路入りまだ未来図も描けぬまま　和歌山市　前田　美子
洗濯機その日のうさの捨てどころ　鳥取市　前田　一枝
捨て犬がしっぽ振りふりついてくる　姫路市　中塚　遊峰
相性の悪いカードを持たされる　寝屋川市　平松かすみ
母校なる勝山の名をなつかしむ　枚方市　森本　節子
遊説の握手に嘘はなかったか　岡山県　千原　理恵
寝そべって読めそうな本買って来る　米子市　石垣　花子
幸を落とさぬようにもっている　米子市　青戸　田鶴
冒険のつもりの服がよく似合い　和歌山市　内芝登志代
傷心の胸になさけが流れ着く　和歌山市　松原　寿子
追憶の家に水仙匂いたち　和歌山市　森　茜
子の居ない部屋でひとりの雛あそび　米子市　金山　夕子
これからは穂先　夫に向けるまい　堺　市　神原　文
フライパン春を知ってかよく弾む　大阪市　山田　妙子
姿見の私に春の来る予感　奈良県　横井都姫子
真っ直ぐに走るとささる後ろ指　和歌山県　寺田　裕美
同い年同じ話題を飽きもせず　倉吉市　青砥　菊枝
愛想ないポストになって便りなし　八尾市　宮西　弥生

一年草ひと年だけの愛に生き　和歌山市　湯浅　由梨
ニュースには遠くくらしの灯を守る　大阪市　堀　いくの
稚魚おどる母なる川に抱かれて　吹田市　園田　文子
形見の帯が長いドラマを語りだす　米子市　新　正子
気位の高さを守るバラの棘　高槻市　笠嶋恵美子
百薬の長か八十路の父の酒　大阪市　島村美津子
苦労した過去笑い合う友の皺　静岡市　増田　ふみ
したたかな様で間抜けなとこがよい　和歌山市　山川　克子
岐路に立つ友に助言を惜しまない　和歌山市　田中　みね
美しい顔をかくした鬼の面　大阪市　樋口シマ子
暖冬の付け雑草が伸びすぎる　和歌山市　福本　英子
隙見せぬ女にもある嫉妬心　静岡市　小木　久子
指切りをしたあの人も孫を抱き　和歌山市　北山　好美
ひとときの静寂お薄いただいて　有田市　松井かなめ
皺寄せがやっぱり嫁の肩にくる　兵庫県　倉垣　恵美
鬼手仏心両方持って生きている　鳥取県　西原　艶子

ゴシックの一句目。この句は単純に見えて単純でない。教訓めいているようでもあるがそうでもない。人間の善なる心理をうまく表現した句だと思いました。二句目。自分と同じ傷みをもっている人と知った時、親近感をもつものです。女性らしい句です。三句目。雨の日は雨の日なりの情けがあるという。そう言われてみれば雨が嫌いだなどと思うこともない。慈雨とも考えられ、または女性らしい美しい感傷とも受け取れる。

◇

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1－18－10
小出　智子（ハガキに3句）

句評リレー

二月号から

吐田公一　嘉数兆代賀　堀江正朗　板尾岳人

ビー玉の転げ続ける身の証し

林　荒介

公一　ウーン、こういう主観的な句は私の苦手です。「身の証し」というと「潔白」の証明というイメージが強いが、そういう観点からすれば裁判が連想され、ビー玉を自分と解釈すれば、無罪を主張し続ける人間像と、その証明のむずかしさが内在している句ではないでしょうか。ビー玉を浮世と解釈しても面白いかも知れません。

兆代賀　私はビー玉を善人と見たのです。まっすぐに生きているつもりなのに手違い間違いが次々起き、転びつづける善人のやるせない気持、そしてほんとうの自分の姿を知ってもらいたいと思ってみたのです。

正朗　十人十色。潔白の証し、必ず裁判と限らないし、善人だとも思えない。身の証しをたてるために転げるビー玉でなく、自分の正しいと信じる道を自信を持って真直ぐ進んだらよいではないか。巻頭句としては何となく物足りなさを感じさせる。

岳人　ビー玉の硬さ(意志)、丸さ(心)、光り(情け)と見て、斜面を転げる姿を荒介氏自身に転嫁させて見ているのではないか。説明句の多い現在の中で、作者と我々がいつでも対話できる川柳だと思うのだが…。

公一　まさに〝ビー玉〟の解釈一つにかかっている。句は出来上がってしまえば一人歩きする。解釈は勝手だが、作者の意思が那辺にあったのか知りたいもの。

兆代賀　皆さんのご意見を拝聴し、いい勉強になりました。そして十七音字の中に納める心のむずかしさを思いました。しかし私は前に述べました気持で見させていただきます。

正朗　岳人さんの解釈は否定。平面でも押せば転げ回るビー玉を荒介さんと解するのは反対です。整然としたあの荒介さん自身がビー玉ではない。何かのたとえを句にされたものであり、公一さんの意見のように作者の考えがはっきりしないだけと思うのですが。

岳人　ビー玉と作者との関連はどうあろうと、ビー玉を意志・心・情けと無理に分析したものの、現代に合った進歩的で奥のある川柳がとても似合う作者と見る。

衣食足りもう群衆は見当らず

谷垣史好

公一　衣食住は人間生存の基本であり、これが充足されない時は、人間は群衆となって筵旗を押し立てて強訴する。デモまたしかりです。しかし、これが足りると、人は人としての個性に目覚める。味わいのある句です。

兆代賀　私は群衆を庶民と見たのですが。衣食足りず、群衆の渦でもがいている庶民、それが何かの拍子で衣食足りた時、のど元過ぎればのたとえで群衆の心、嘆きなどは忘れてしまうのではないでしょうか。

正朗　筵旗を押し立てたり、デモをするのと異なっていると考える。〝群衆は見当らず〟ではなく、経済大国と言われるまでに成長した現在、群がる場所が違って快楽を求めて集まるだけと思うのです。時代に合わない感じの句。

岳人　世界の経済大国と言われている現在

〝群衆は見当らず〟では、時事吟とすれば時代感覚からずれているように思うのだが、群衆を餌を求めて集まる虫・鳥と見たらどうだろう。

公一　〝衣食足り〟の中に、戦後から経済大国へ発展した過程が含められているのであって、大きなストもない現在だからこその句と思う。私のようなサラリーマンにとっては、時代の流れを感じさせる句。

兆代賀　単純に見ていると時事吟で、説明句の感がなきにしもあらずですが、読み返している内に、余韻のある時代の流れを感じさせてくれる句だと思いました。

正朗　「飽食の日本」と言われ、その裏を返せば経済大国の言葉に乗せられ、将来を案じさせる。公一さんの〝サラリーマン云々〟どころか、好作家の史好さんにしてはケタ外れの句だとしか申し上げられない。

岳人　ただ一言、〝平和な句〟。

丸腰が不安で鞄提げている

田中正坊

公一　人間の習性とは情けないもの。腰に何を提げていた人か知らないが、ある日、突如として丸腰になった場合、何か不安で頼りない感じがする。ただ丸腰と鞄とが、やや不釣合いというべきではないでしょうか。

兆代賀　生存競争のはげしい世代、人間は何かの武器、心の支えがあって安堵感があるもの。それが丸腰になった時の不安は測り知れない。溺れる者は藁をつかむたとえで、せめて鞄を提げているみじめな男の姿でしょう。

正朗　〝丸腰〟という言葉の句をよく聞くが、時代感覚のズレ、いわゆる古さを感じる。鞄と丸腰の不釣合いも否定できない。深い意味は考えられぬ言葉を並べただけの句と思いますが…。

岳人　丸腰とは無防備のことか。そうではない。情報化時代に情報源を持たないほど、不安に陥りやすい。だから鞄（中身は空っぽ）を持つことによって街中を歩ける安心感、上五はやや不安定である。

公一　各人のご意見とも、どうも丸腰と鞄に多少無理があるので、解釈にこじつけが見られるように思うのですが。

兆代賀　やはり私は激動する流れの中で、取り残されまいとあえいでいる男の姿としか思われません。時事吟の一つですね。

正朗　公一さんが言われるように〝解釈にこじつけが見られる〟のではなく、句そのものが〝こじつけ〟であるとしか考えられない。戸締りがなくても安心して住める土地にいる私は、岳人さんの説の安心感など心外だ。男はそんなに弱いものではない。

岳人　弱い男が多いから、このような句が生まれる。

一コマの写真になった故郷よ

牛尾緑良

公一　写実句でしょう。ただ故郷のイメージを懐古的情緒としてうたったもので、内容的にはいま一つ。

兆代賀　出稼ぎや単身赴任の方たちが一人でテレビを見ている時、雪に埋れた古里が写る！途端に心は古里へ、妻や子に想いをはせる男の姿が見えるようです。

正朗　テレビに京都が映ると、故郷の想い出を嬉しそうに話してくれる妻に、故郷を持たぬ自分はうらやましくさえ感じる。それだけに生れ故郷は生涯、心を離れない重さ、懐しさを抱いている。公一さんは内容的にはいま一つと言われるが、一見、平凡な句のようで句の素直さに包んだ故郷が生きている。

岳人　生れ故郷がある日突然、テレビの画面に、あるいはカレンダーの絵になって目の前に映った時の感動、正朗氏と同じく平凡ながら大阪で生まれ、大阪で育った私には、何ともうらやましいほどの川柳らしい句だ。

公一　私の故郷は鳥取だが、私自身はあまり故郷という概念にとらわれない性質だから、故郷というだけでは感動を呼ばない。まだ若いせいかも知れないが。

兆代賀　人は皆、故郷をはなれ、生存競争のはげしい中で暮していると、ついつい故郷

は遠くなっていくと思う。人間砂漠の中で折りにふれ故郷を想い出して下さい。ご先祖が眠っている故郷、守って下さっている故郷です。

正朗　私は生れた土地で育ち、失明して五十年近いが、生れた土地に住みついていても、町の変りようを聞くだけで、昔の見えた頃がたまらなく懐しい。公一さんの「故郷というだけでは感動を呼ばない」それ自体、心の温もりさえ持たれぬ不可思議さを理解できない。いい句だ。故郷へ帰れば方言で話す良さが公一さんには分らない。気の毒だと思う。

岳人　元の川に戻る鮭の想いに似て、故郷を持つ者、持たぬ者人生いろいろ。きょう一日を止めるほどの句ではないが、川柳らしい川柳だ。

満員車停まり感電する乳房

江口　度

公一　満員電車が急停車するとよろめく。前に感じのよい男性がいると、思わず乳房が感電する。面白い見付け。

兆代賀　私はあまり乳房の句は好みません。満員電車で吊皮を持って立っている女性、急停車したとたん、女が揺れ、乳房も揺れて、それを目をかがやかせて見ているおとこ…。

正朗　私には何とも言いようのない句。公一さんの〝面白い見付け〟には、男性として恥ずかしく思う。兆代賀さんが言われるとおり、何か淫らなものに女性を思わせ、失礼きわまると申し上げたい。感電するのは作者自身か。課題吟なら一応、面白いかも知れないが…。

岳人　サラリーマン時代、両手で吊皮を持って通勤した私には、感電した記憶がない。課題吟では第一人者の度氏にしては、課題吟なりの出来だろうが、感電する乳房が面白いだけで終ってしまう淫らな川柳だ。

公一　この程度の句で〝淫ら〟云々はちょっと大げさ過ぎるのではあるまいか。〝感電する乳房〟だから、女性の立場に立った句であり、現在の若い女性の奔放な性が裏側に見え隠れする、と私は見る。

兆代賀　感電する乳房という表現は巧みで若い女性の姿が眼前に浮かんでくる。しかし、ほかに何の感動も与えてくれぬ句だと思う。

正朗　公一さんは、誠に大らかな人とお見受けする。しかし、その解釈はあまりにも女性を、いや公一さん自身を考えさせられてしまう。女性の立場に立った句であればなおさら、現代女性の奔放な性の裏側などと女性に対して言い過ぎだと思う。句品があってこその川柳ではあるまいか…。

岳人　乳房がどうあれ、一笑いして終りの句。

小鰯の骨エリートの喉を刺し

平田実男

公一　一見、骨のないように見える雑魚にも、雑魚なりの意地と反骨がある。この反骨が時としてエリートに突きささる。「穿ち」の句といえましょう。

兆代賀　私も公一さんと同じ思いで拝見させていただきました。一寸の虫にも五分の魂とか。エリートの殿方、ゆめゆめ油断なさいませんように。

正朗　公一、兆代賀さんに反対の意見です。小鰯は丸ごと噛んでも、骨は苦にならない美味しさ。鮮魚商に生まれ育った私は、この句に不可思議さを感じる。豆秋さんの〝骨立てたまま二次会へ従いて行き〟の句の如く、エリートとなれば雑魚や小鰯の骨ぐらい何でもない。公一さんの「穿ち」は否定。作者の気持が分からない。〝雑魚などは相手にはせぬ懐ろ手〟小松園先生の句のとおりだと考える。

岳人　エリート族のひよわさを小鰯の骨で強烈に批判した句。現在の急成長した企業、たとえばリクルート社。小さな傷口から政界をともに揺るがす現況を読んだ時事吟だ。

公一　岳人さんがこの句を時事吟＝リクルートと結びつけられたのは面白い

兆代賀　一つの句も見方考え方によって、こうも変るものかと感心しました。読者の受

け止め方によるものですが、私は岳人さんのご意見に賛成します。

正朗　岳人さん説を肯定もできるが、リクルート社に例えられたエリート族。そんな小鰯の骨ぐらいで、ズバリ刺されるなど本物のエリートではないと思う。兆代賀さんは見方考え方によってこうも変るものか…と感心されているが、言葉の使い方で十人十色の感動を呼ぶのが川柳だから。

岳人　本物のエリートはこうではないと詠んでいるのだから、この句はこの句で生きている。

記載例甲野乙郎氏は死なず

竹内紫錆

公一　役所関係の諸届の記載例に限らず、あらゆる場所で見かけるこの人名は、何年経っても死亡しない。なかなか鋭い着眼点に感服しました。

兆代賀　浅学非才の私に、こんなのが回ってきて実のところ戸惑っています。この句もおぼろにはわかるが、ペンを走らす勇気がありませんので、皆様の句評で勉強させていただき、次が回ってきた時、言わせていただきます。

正朗　「死なず」では無いと思う。年号も平成となり、教育方針まで変更されて世の移りは否めない。公一さんは「鋭い着眼点に感服」されているが、私は記載例を見て考えついただけの句で、字並べの余韻のない川柳だとしか言えない。

岳人　鋭い着眼。句評する勇気がない。余韻のない川柳。各自それぞれの批判は三人三様でよいのではないか。説明句であり、下五で川柳だとわかる程度の川柳だと思うのだが…。

公一　確かに岳人さんの言われるように、下五で川柳になった句であるが、その着眼点に感心。

兆代賀　この句の着想は珍しく面白いと思う。初心時代、一に着想、二に表現と先輩によく教えられました。下五あたりで表現を変えたらいい句になると思いますが。

正朗　岳人さん説はわからない。皆さんは着眼点に感心とも言われるが、どこの役所関係にもこの種の記載例は必ず出ている。下五へ「死なず」として記載例から考えついただけの句だと解釈しているのですが。句評リレーは、とかくはっきりと意志表示せず、いい加減に流れに乗るだけなら意味がない。作者は何と評されても、自分の意に添わぬ点が多いと思う。しかしマナイタに乗せられることは、見つめられる喜びだとも考えるのです。

岳人　富士山の姿は立派でも、山男にとっては、山らしくない石と岩と砂が横たわるただの山。着眼は鋭いが、ただの川柳だ。

市制百周年記念協賛

和歌山市民川柳大会

とき　平成元年**5月28日**(日)正午開場
（弁食はすませて来て下さい）

ところ　**和歌山市役所**　14F大会議室
（和歌山バス市役所前下車）

課題と選者

「和」　岩倉天彦選
「歌」　大矢十郎選
「山」　北川紀世選
「市」　菅井智水庵選
「制」　高松康勝選
「百」　野村太茂津選
「周」　淵田寛一選
「年」　南出陽一選

席題　なし（欠席投句拝辞）

出句　各題2句　締切午後1時半

会費　500円（記念品・発表誌呈）

賞品　和歌山市長賞・和歌山文化協会賞・シルバーユニオン和歌山賞

連絡先　和歌山市野崎三番地　島田正巳
Tel(〇七三四)五五—五一〇一㈹

主催　**和歌山川柳愛好会**

後援　和歌山市・和歌山文化協会
シルバーユニオン和歌山
ニュース和歌山

公　認

玉置重人選

四党公認そんな馬鹿げた事はない　枯　梢
公認は余程ききめがあると見え　圭　坊
あの人が公認ですかと思案する　哲　静
認知した子が来てもめる遺産分け　悠　泉
公認の二人がのぞく家具売場　多　織
公認の資格もなしに生きている　有一朗
才能はないが資格は取りたがり　白渓子
公認はしますかいなと眼が笑う　木　魚
公認のようにカラスが嫌われる　京　子
公認の二人に緑の風薫る　素身郎
内緒の方がおもしろかったデートの日　玉　恵
あの日から茶飲み友達らしくなり　喜与志
適マークあてにはしない非常口　正　敏
無所属に公認洩れと書いてない　保　州
公認へ振袖で来る祝い酒　古都路
人脈の底に沈んだ未公認　三五島
公認で伸ばせる羽根が欲しくなり　あやめ
ライセンス持って女も強くなる　達　子
公認の二字が大きい立看板　明　水
公認の名前たっぷり筆太に　静　歩
妻よりも母が公認するしぐさ　ちかし
旗色を見て公認は辞退する　新　造
公認して欲しい試験管ベビー　公　一
公認の止り木だから捨て切れぬ　章　久
公認の椅子を喜ぶ鬼の面　和　子
JIS規格とって企業生きのびる　勝　美
公認の裏で条件呑まされる　芳　仙
公認の恩赦に春の草萌ゆる　螢
通りゃんせ晴れて通れるいばら道　かなめ
公認の馬鹿になりきる泣きどころ　多賀子
公認はされなくていい小さい善　典　子
家中でみなが認める父の酒　暁　明
公認のコースに石が落ちていた　小　鹿
好きな道進めと祖母が助言する　高　明
未公認記録が邪魔をして困る　美代子
本当は公認でない女下駄　しげお
公認に甘え自分を見失う　諷云児
公認の片目ダルマで春を待つ　洛　酔
公認の資格が生きる二度の職　正　坊
公認の判コにかけてある呪文　可　住
御用達の看板がある城下町　寿　美
公認の老人となる無料パス　高　子
公認がときどき謀叛考える　笑　風
地
ロボットになる公認を嫌いぬく　雀踊子
天
公認の愛を白磁の皿に盛る　雄　々
軸
公認に安心ばかりしてられぬ

切　る

辻　白渓子選

2DK仕切って姑と住んでいる　はるお
千切りの美味いお店で飲んでいる　美代子
味噌汁の具を切る音は朝の歌　遊　美
煩悩をまだ断ち切れず紅を塗り　柳五郎
切り刻み遺書らしい物捨ててあり　博　友
四捨五入切られたほうにある温み　喜一郎
賽の目に切る大根の白い肌　倫　子
縁を切る話紫煙の輪に消える　洛　酔
悪縁を切る宗教へ惑わされ　サワ子
輪の中に溶け込む鬼が爪を切る　清　芳
年金へ贅沢品は切り捨てる　狸　村
バスタオル急げば電話切れている　静　子
胃を切られそれでも懲りない友の酒　悟　郎
首を切る権利は妻が持っている　次　男
切れ端を無駄なく使う母の針　公　一
札束で切られることもある絆　満津子
尼寺に煩悩を断つ花鋏　朴　竜
哀れにも不倫の恋が捨て切れず　敏　之
アメリカと縁を切りたい休耕田　正　敏
縁切りの後から慰謝料ついてくる　秋　人
切り札を胸ににこにこ聞いている　豊
身銭切る先輩がいて和む酒　秀　峰

詳細は後で解ると言葉切る　たつみ
胃を切ったあと見せ合うているベッド　どんたく
切り捨てた枝の蕾に開く意地　鉄治
指切りの小指に少し嘘がある(吉)　寿美
変なところで話切るから疑われ　高子
切り株がれんげ畠にしてくれる　しげお
人事課が包丁研いでる四月馬鹿　雀踊子
切れ味に妥協はしないのれん分け　可住
夕立は雲の切れ間を見て走る　虹汀
切り捨てた尻尾が謀反を企てる　博子
切り返す言葉探しているスプーン　宵明
幕切れにピエロ飛び出し沸かせてる　一乗
切り札を握り夫に無理を言う　文佳
葬列が切れて野良犬顔を出し　四郎
二きれを切って羊羹しまわれる　緑良
切れすぎる部下がときどき恐くなる　諷云児
世相切るペンが庶民に味方する　高夫
テープカット汗をかかない顔並ぶ　正坊
口火切るのが善人で責められぬ　雄々人
封を切ると鳩が翔び立つかも知れぬ　枯梢地
切れそうで切れぬ夫婦の謎がある　芳仙天
割り切ると野次が左程に苦にならず　軸

鳥

西岡洛酔選

春風が私の手から鳥になる　小鹿
渡り鳥失うものをもう持たず　あやめ
餌付けされ小鳥大空見失う　三五島
働きものにされてつばめの日が暮れる　不二
人間の弱さ小鳥を飼って見る　秀峰
年金の暮らし小鳥にのぞかれる　可住
春うらら籠の小鳥がよく喋る　高夫
国会の椅子でふくろう寝ています　笑風
青い鳥心の中に住んでいる　一花
春の音に合わせて丸い鳥の声　和子
都市砂漠ここにも鳥は住んでいる　浪速子
この鳥居文化五年と書いてある　敏之
夕焼けを絵にしてカラス点になり　大柏
鶴舞うて北の原野の愛交わす　どんたく
飽食になれて翔べない籠の鳥　清柳
羽根つけて逢いに行きたい人がいる　テル
九官鳥に口止めをして落ち着かず　美代子
白鳥が飛べなくなった死んだ海　次男
渡り鳥岬にロマン置いて去り　清芳
ほうほけきょ上手に鳴いて春がくる　山久
来年は母でこの地に帰る鳥　ちかし
ウオッチング鳥は静かにのぞかれる　保夫
揚げひばり空の青さに吸いこまれ　静子
大空の広さを知らぬ籠の鳥　公一
籠を出た鳥には空が広すぎる　諷云児
白鳥の構図が画布を冬にする　正敏
どの風に乗ろうか今日の迷い鳥　玉恵
籠の鳥恋しているのは広い空　元江
囀って住めば都の籠の鳥　信義
餌付けされやがて飛べなくなるカモメ　夢酔
陽炎の中で小鳥になるこころ　緑良
鸚鵡には聞かしてならぬ言葉です　露児
抱ききれぬ雛巣立つ日も近うなり　典子
北帰行鳥の羅針盤狂いなし　健歩
国境のない地図を翔ぶ渡り鳥　芳仙
誘惑に負けた鴉が憎めない　雄々
飽食の鳥で籠から出たがらぬ(吉)　寿美佳
鵜の真似の鳥で終る茶番劇　杏村
春爛漫と小鳥もカンツォーネを歌う　高子
望みまだ捨てぬ鴉が哭こうとも　寿恵子
お洒落した訳を言えない赤い鳥　慶子
大空を翔けたいときもあるアヒル　正坊人
ペンギンのフロックコート夢で翔ぶ　満津子地
パン屑をもらうかもめに詩がない　青銅天
青い鳥まだ追うている老うた筑　高子軸
幸せの鳥まだ追い続け夫婦みち

初歩教室

題 ― 坂

阿萬 萬的

今月の課題「坂」に対して作者の皆さんはお年を召しておられるせいでしょうか、人生の坂道の句が多かったようです。

誰にだって坂の一つはあるものだ　小鹿 圭坊
男盛り男に険しい坂もあり
生きている証しか坂の多いこと　信一
人生は登り下りの坂ばかり　志重
（人生の坂それぞれに花もあり）
見栄の果て転がり落ちる坂長く　良三
不覚にも後振り返った登り坂　和子
（女の性でしょうか坂を振り返る）
転んでも元に戻らぬ歳の坂　ひさ子
自惚れが肩すかし食う下り坂　ますみ
（落目という坂道白髪の目立つ日々）
でも夫婦の絆とは有難いもので
胸突八丁絆で越えた夫婦坂　遊光
下り坂悪路気遣う夫の手　美恵子
坂越える度に絆をたしかめる　時弘
二人三脚矢印のない坂登る　由梨
下り坂も労り合って生きる幸　静子
厄年が一緒に明けぬ夫婦坂　とく子
照る日曇る日ついて行きます夫婦坂　みね
山中の秘湯に香る夫婦坂　ミツエ
（夫婦坂を山の出湯のフルムーン）
その坂道も振り返ってみると、また
走馬灯越えたあの坂懐かしく　昭治
古疵が疼く天気は下り坂　金吾
生きていまあの坂道のありがたき　円女
苦労した坂も暢気に語り合え　明吉
（苦労坂暢気に話せる齢となり）
人生は坂の連続どっこいしょ　真一
だが老いの坂とはきびしいもので
年毎にけわしくなって老いの坂　一枝
終着へ転がる様に老いの坂　三千子
事なきを喜び老いの坂越える　美恵子
捨てるもの捨ててのんびり老いの坂　多織
（老いの坂のんびり御詠歌など習い）
定退の日々の速さの下り坂　金吾
退職の坂越えてなお次の坂　芳水
（年金暮しへなだらかながら坂つづく）
坂道も一歩一歩と万歩計　好笑
いろいろの坂登りて静か老い二人　美代子
ここで年齢順に坂道をたどってみたら
四十坂鏡を覗く夜叉の顔　方子
（四十坂鏡は小皺をかくさない）
大正生れ苦労のうちに老いの坂　登代
振り返るうねりばかりの男坂　敬
負けられぬ奴と競り合う五十坂　良三
（五十坂男の意地が捨て切れず）
負けん気も一寸しんどい六十路坂　志華子
（負けん気が空回りする六十路坂）
亡父母の情やっと気のつく六十路坂　遊峰
（亡き母の情に気付く六十路坂）
人生の坂道登り古稀となる　喜代子
古希せまる私は坂のまだ途中　円女
（古希近い私にまだまだ坂の道）
ゲートボール日々楽しみの古希の坂　一耕
傘寿まで登った坂道四世代　秀香
（四世代傘寿へつづいた坂の道）
来てみれば裾野はひろし八十路坂　喜与志
浄土までまだまだ続く老いの坂　松次郎
息ついて又登り行く浄土坂　しづ子
（鈴振って浄土へつづく遍路坂）
母の皺一つ一つに幾多の坂道が刻まれて
石ころの坂道母の生きた道　照子
幾つもの坂越えて来た母の皺　ますみ
坂もあり曲った道も母が逝く　ダン吉
（曲りくねった坂道だった母が逝く）
人生の坂を登って耐えた皺　ひさ子
上り坂愛の後押し父母の手で　秀香

（父母の手の温味感ずる上り坂）　サワ子
緩やかな坂道姑の歩に合わす
ここらで本当の坂といきましょうか。
坂道でこよなく温き風に逢う　み　ね
（ふる里の坂道温き風に逢う）
山坂も舗装されてるみかん山　美　子
坂一つ十年たてば違う道　芙美子
（十年目峠の道もアスファルト）
住めば都で坂道が馴れにされ　光　子
山肌に張りつき坂道だけの故郷　和　子
（坂道だけのわがふる里は過疎進む）
坂越えて行くも楽しい里帰り　幟
坂道ではよくお遍路さんの鈴の音が
お遍路で辿れば坂もロマンあり　方　子
遍路坂懺悔の小石積んであり　遊　峰
信心がまだまだ足りぬ坂の寺　保　夫
この坂をのぼる功徳に励まされ　しんじ
御詠歌の流れる日暮れの坂登る　芙美子
坂道を真面目な汗でのぼりゆく　静　子
坂道には、よくお地蔵さんがいて励まして
くださいます。
雪の坂あそこここにと地蔵仏　サワ子
（雪の坂道励ますように道祖神）
陽の当る坂道地蔵様が待つ　艶　子
坂道で里を見守る石地蔵　美　子
銅像が坂から見下す新世界　勝　美
野仏のやさしさすがる坂となる　美代子
菩提寺の坂の途中にある地蔵　三津江
お地蔵の温みに会える峠みち　敬
だが、こんな悪い人もいるのですね。
まさかでも坂の地蔵は盗まれた　隆　雄
坂の名所もいろいろありまして
オランダ坂蝶々さんも越えた坂　義
長崎の坂から響く平和の音　太一郎
（オランダ坂平和の鐘が響きます）
オランダ坂で父を慕うて泣くお春　遊　光
長崎も神戸も異人は坂が好き　章　久
恋語る哲学もよし京の坂　太一郎
朱の蛇の目清水坂の脇に咲く　章　久
下五は何とかしたいですね。清水坂の京時
雨ぐらいではどうですかね。
美しい坂だ涙が敷いてある　正　子
（平家村への坂道涙が敷いてある）
九段坂桜は知らぬままに咲き　勝　美
昭和逝く風化始めた九段坂　道　胤
曲りくねった坂絶景もたまにある　照　子
（峠越えれば向うに百万ドル夜景）
坂道から覗かせて貰う広い庭　保　夫
山坂を越えて名水飲みに行く　喜与志
頂上があるから登って見たくなる　一　枝
では最後は私の好きな句で纏めましょう。
坂道で転がる夢がこわれ行く　小　鹿
三代目時代の坂が越えられず　義
梅干を提げてシスコの坂に佇つ　多　織
上り坂女が強いわけを知る　治
すぐ辞表叩きつけたい男坂　綾　子
梅の香に息整えた老いの坂　ダン吉
坂の下どんぐり達の愚痴を聞く　清　柳
家康の家訓を思う上り坂　時　弘
坂の道うしろは見ない車椅子　つえ子
マイペース涙は見せぬ寡婦の坂　菊　枝
オクターブ下げて歌った老いの坂　信　義
物忘れブレーキ効かぬ老いの坂　一　乗
平成の同じ坂道見上げつつ　光　子
幾坂を越えて昭和の幕が降り　一　耕
この坂を登れば亡母に逢えそうな　正　子
少年が挑みはじめた父の坂　清　柳

◇

題「草」　**5月10日締切**（7月号発表）
ハガキに5句以内
「汗」　6月10日締切（8月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一―九九
阿　萬　萬　的

高鷲　亜鈍氏（本社相談役）四月十五日、寝屋川市三井ヶ丘三―五―七―一〇二の自宅で死去、80歳。告別式は同十六日、三井団地集会所で行われ、柳人多数が参列した。

お稲荷さんと縁結び

布施幸子

『偕老同穴』を見たのは、七、八年前のことである。夫婦で伏見の稲荷大社へ詣って、境内に建つ結婚式場をのぞくと、受付の横のガラスケースに妙なものが入っていた。スポンジ状の筒っぽのそれが偕老同穴だった。

夫婦が長く共に暮らしていっしょに老い、同じ墓に入る、という意味の〝言葉〟だとは思っていたが、同名の生きものがいるとは、それまでついぞ知らなかった。

りっぱな名のわりに、つくりの簡単な、動物らしからぬ原始動物で、体のおおかたが胃袋。足のかわりに下部は根のように延びて、海底につっ立っているらしい。

その胃袋をマイホームにしているのが、小さなドウケツエビの夫婦で、胃の中のエビ大海を知らず、偕老同穴のおこぼれを食べて一生暮らし、死ねばその場が墓となるわけ。

他人さまの胃を拝借しながら、家賃も払わず、食費も払わず、墓代も払わずして、二人仲よく永遠にいっしょだなんて、せちがらい人間社会では想像もつかない。私も次にはドウケツエビに生まれ変わりたいとねがっている。

稲荷大社は古いお社で、もともとは農業神だったのが、商売の神として有名になり、そのほか家内安全、病気平癒、運気上昇、良縁成就などなど、人間のかぎりない欲望と結びついて栄えてきた。先日、久しぶりに又お詣りに行って、結婚式場をのぞくと、偕老同穴は姿を消していたが、内部は一段ときれいに模様替えされていた。神さまは、若いカップルだけの偕老同穴なんぞにこだわらず、中高老年の再婚、再々婚、茶飲み婚の縁結びにも精だしておられると聞いている。

私の知っている人で、早くに未亡人になり、子供さんらを育てあげ、それぞれの結婚を見とどけてから「私にもよいご縁を頂きたい」と稲荷詣でをしたところ、六十半ばにして好伴侶を得た方がある。ちょっとないほどよくできたご主人で「前のとはウンデンバンデン、お礼にお山めぐりを欠かさしまへん」と幸せそうである。（この〝ウンデンバンデン〟について、京生まれの私は聞きなれ、言いなれてきたが、さる関東の川柳家への手紙の中に書いたところ「なんのことやらわからず、広辞苑をひもといて、『雲泥万里、たいへんな違い』を表す語であると知りました」と返事を下さった。雲泥万里、なんてたいそうな字を充てるのか、と私はこともなげに使っていたウンデンバンデンを見直したのであった。）

さて、伏見稲荷は、京阪電車の伏見稲荷駅から歩いて五分の場所に、豪華な本殿がある。その前で拝礼して即まわれ右しても、いっこうかまわないのだが、社殿背後の稲荷山を頂きまで登って戻ってくればいっそう念が入る。それがお山めぐりである。

稲荷山には、信者の寄進した朱い鳥居がトンネルを作り、そこかしこに社とか祠とか、ミニ祠ともいうべき小さなお塚が散在し、あんまりかわいげのない顔のキツネの石像がいっぱい置かれている。不信心者の私たち夫婦のかけ足めぐりで約二時間かかる。

稲荷山には三つの峰があり、上社、中社、下社と神の御座所になっている。稲荷の神は最初、「餅に羽のはえた」白い鳥の姿で、頂上の上社辺に降り立たれたというから、本来の神さまのご本宅は山頂のはずで、昔は誰もがてっぺんへと登る『お山めぐり』がふつうであった。

今昔物語の『稲荷詣でで美人に逢う話』もお山めぐりがふつうだったころの話である。

――今は昔、近衛府の舎人、現代風にいえば御所のガードマンたちだろうか、何人かがお稲荷さんへ詣った。弁当、酒持参で行楽も兼ねている。舎人の一人、茨田重方はたいへんな女好きで、妻のヤキモチに閉口しながらも、美女を見ると目の色が変わる男だった。

その日も、たくさんの参詣者の中の美女を物色しながら、仲間の後から登ってゆくと、中社の辺でハッとするほど好い女を見かけた。萌黄と紅梅の色の着物に、濃紫のきぬかずき。あでやかに紅をさした口元しか見えないが、「大輪の花のごとき美女」と重方にはピンときた。

重方は、磁石にすいよせられるように女に近づき、

「なんと、目のさめるように美しいお方。お近づきになりたいもんですなあ」

女はうつむいたまま、

「きれいな賢夫人がおいやすやろに、叱られますえ」

とやさしく笑う。

「何おっしゃるやら。たしかに女房、いや女房もどきが一人はいます。すてきなあなたさまとはウンデンバンデン、サルより下品でキャッ、キャッとやかましい。あんなあほう、前から追いだしたいと思いながら、召使い代わりにタダで使ってるんですわ」

「まあー、本気でお言いやすのどすか」

「本気も本気、この社の神も聞こしめせ。ああ、長年ここへお詣りしてきたのも、サル女房を叩きだし、私にふさわしい連れあいを見つけたいとの一心から。やっと祈りが通じました。して、あなた独身？　お住まいは？」

すり寄ってたずねるのへ、

「わたしは宮仕えをしてまして、やめてからお嫁にも行きました。けど夫にすぐ死にわかれ、もう三年になるんどっせ。あ、ご冗談をまにうけて、わたしとしたことがご免あそばせ。どうぞ先にお行きやしとくれやす」

こう言って離れようとしたから、重方は両手を合わせ、

「このとおり。ぜひ一緒になってください。サル女房メは必ず……」

言い終らぬうちに、女は男の髪をひっつかみ、いきなり頬っぺたをバシーン！お山もどよめくほどの勢いでひっぱたいた。

「ア痛ッ。なにするのや」

と、女の顔をよくみれば、なんとわが女房ではないか。

「おまえ、気でも狂うたか」

「あんたこそ恥をお知りなさい。フン、わたしはどうせ女房もどき。タダ働きのあほですよ。キャッキャッ、みなさんお笑い下さいねえ、わたしサル女房よ」

大声をはりあげると、何事ならんと参詣客が垣をつくり、山のカラスはカアカア鳴き立てる。

重方は、顔から火が出る思いで、

「わるかった。気をしずめてくれ。アハハハ」

と笑いにまぎらそうとしたが、妻はいきり立って、とっくみあいの大げんか。

一方、重方の同僚たちは、とうに上社まで登り、「重方おそいやないか、なにしとるんやろ」と戻ってみればこのありさまで、「まあまあ奥さん、そらこいつが悪い。きつう言い聞かせまっさかいに」とかなんとか、どうにか二人を引き離した。

「わたしは許さんからね。そのすてきなお方とどこへなと行きな。家へ帰ってきたぐらいなら、痩せた足の二本や三本、へし折ったる」

どなりながら下へおりてゆく妻に、重方は追いすがってアイソタンガン。

「どんなにでもあやまるから、家に置いとくれよ。すまん。おまえが美人すぎてこんなことになったんや」

とひたあやまりにあやまって、どうにか妻のごきげんをおさめることができた。

後で、

「おまえのすごいヒステリーにはあきれたで。それでも許したんやから、重方の心は広い」

とじまんするのへ、妻は鼻で笑い、

「あほらし。わたしにすり寄って顔を見、声を聞いても気がつかんほどののぼせよう。ほんまにあんたはあほかいな」

遠い昔に、こんな奥さんがいたんかしらん、と羨ましくなるほど強い。

みんなの話の種になり、重方は肩身のせまい思いをしながら、それからはおとなしく一生を過ごしたとか。

妻の方はわがままに暮らし、重方が死んだのちはさっさと再婚したというが、次の夫が「重方とはウンデンバンデン……」だったかどうか、今昔物語には書かれていない。

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★ふれあいの祭典――

ひょうご89　川柳大会

昨年の国民文化祭ひょうご88の成果を受け継ぐ形で本年から県民文化祭として開催。今年は10月29日（日）西宮市立なるお文化ホールで開くことが決定、詳細は追って発表される。

★川柳ささやま社は、昭和63年度の年間賞を決定、各賞1席は次のとおり。

〈丹波柳壇賞〉

きれいごとばかり悟っている疲れ　西井つや子

〈ささやま賞〉

幸せの塔は苦労の上に建つ　円増　貞子

★高知川柳社は、昭和63年度の〈黒潮賞〉を発表。

プライドの殻にこもっている孤独　椋本　俊子

サングラスほんとの色を見失い　清原　悦子

▽同人消息△

■水粉千翁氏（倉敷市・参事）は3月14日、玉島テレビの「この道ひとすじ」に登場、「人間讃歌を川柳に托して」として放映された。

■小西雄々氏（鳥取県・参事）五月から日本海新聞（本社鳥取市）の柳壇の選者を担当することになった。

■渥美弧秀氏（静岡市・同人）3月4日静岡県退職校長会フェスティバルで「私のなかの川柳と音楽」を発表、川柳をメロディにのせて歌い、好評であった。

▽お便り△

■東野大八氏（美濃加茂市・相談役）日本傷夷軍人会で哀妻と3泊4日の台湾の旅とシャレています。台湾の人たちは、みんな日本人なれがしていて、とても外国と思えません。

■井上白峰氏（大阪市・同人）長らく入院治療中でしたが、3月17日、10か月ぶりで退院、自宅で療養を続けております。

▼訃　報▲

■竹中綾珠氏（芦屋市・同人、元同人故竹中肖二氏未亡人）3月24日、脳梗塞で逝去、行年83歳。

■中田白李氏（兵庫県・同人）3月30日逝去。

新同人紹介

田中輝子

―太茂津・鬼遊推薦

第十三回　全日本川柳大会

日時　平成元年**6月11日**(日)午前10時開場

場所　日昇館ホテル（長崎市西坂町二二〇―一）

宿題　第一部（事前投句、5月10日締切）

「男」　小林一声　選

「つなぐ」　森本清子　選

「旅」　池田可宵　選

投句　5月10日必着で、35×18cmの句箋一枚に一句記入し、投句料一、〇〇〇円（定額小為替、現金書留）同封、〒五四二　大阪市中央区谷町七丁目一―三九　新谷町第二ビル二〇六　日本川柳協会大会係へ。

宿題　第二部（当日出句、締切正午）

「再会」　高橋春造　選

「天気」　亀山恭太　選

「高い」　蔵多李渓　選

「祈り」　高谷梵鐘　選

会費　二、五〇〇円（昼食・記念品共）

主催　日本川柳協会

西尾　栞氏
受章祝賀会

3月16日　都ホテル大阪

昨年秋の叙勲で、関西における川柳関係者として初めて木杯一組台付を受章した川柳塔社主幹・日本川柳協会常任理事の西尾栞氏の受章祝賀会が三月十六日、大阪市天王寺区の都ホテル大阪で盛大に開かれた。

橘高薫風川柳塔社副主幹の開会あいさつに始まり、世話人代表の北畑金治氏があいさつの中で「川柳の日々を遊んで今日の栄」の祝吟を贈った後、黒川紫香本社副主幹はじめ八尾ライオンズクラブ、友人代表が祝詞を述べ、記念品・花束が贈呈された。

壇上で金屏風を背に夫人とともに今日の喜びをかみしめていた栞主幹がつづいて謝辞に立ち、「川柳をつくりはじめて五十八年、私ごとき者が今回の光栄に浴したのは、ひとえに川柳が浮上し、社会的に認められるようになったからであり、恩師路郎も雲の峯から見守ってくださっていることと思う」としみじみと語った。

第二部の祝宴では、乾杯につづいて祝電披露、テーブル・スピーチが行われた。

祝　吟

めでたさは二重重ねの寿と叙勲　美房
川柳に春秋重ね朱盃哉　正坊
玉杯や水鶏庵の旨い酒　吐来
よろこびの杯高く高くあげ　敏
瑞雲瑞祥厳にたなびく水鶏庵　諷云児
木杯のもてなし正座の要る家宝　白渓子
よろこびの酒木杯に惜しみなく　楓楽
めでたさやいよいよまろき髭の顔　幸
綺羅星のひとつは水鶏庵栞　射月芳
祝盃を手にぴったりの白い髭　小路
川柳一筋心に残る御紋章　萬的
木杯の栄誉に浮ぶ御紋章　笛生
ダイヤにも優れり賜杯のもつぬくみ　幸生
喜びの受章へ妻の影法師　雀踊子
木杯へうれしい酒を注ぎましょう　文秋
天杯に人うるわしく酒うまし　薫風
なみなみと平成の春満たし乾す　太茂津
平成につなぐ柳史に賞の映え　武庫坊
木杯へまだこれからの顔の艶　杜的
平凡のなかに非凡の師の歩み　柳太
うれしいね賜杯に栄える銀の髭　紫香
ひとすじに生きて木杯輝けり　政広
十七の文字を木目に杯を受け　邦吉
川柳の日々を重ねて今日の栄　金治
昭和終章菊の御杯をたまわりぬ　鬼遊
金よりも木杯がよいと陛下言い　守
塔の上傘をかざして杯を受く　喬
菊のご紋の浮く盃を乾されませ　智子
手を繋ぎ今日をことほぐ靴が鳴る　一二三

高橋操子追悼

本社　四月句会

四月六日（金）　午後六時
メンズファッションセンター

はじめに高橋操子さんとともに、竹中綾珠さん、土居耕花さんのご冥福を祈って黙禱を捧げ、句会参加者に高橋家から粗供養の菓子が配られた。

つづいて昭和63年度各地柳壇賞の表彰式が行われ、栞主幹から赤川菊野さんに賞状と盾が授与された。

おはなしは西田柳宏子氏。大らかで暖かかった操子さんの人柄を多くの句をまじえながら紹介し、ありし日の故人を偲んだ。

月間賞は稲葉冬葉氏（寝屋川市）。（正）
（進行—天笑・岳人）（受付—年代・藤子）
（記録—射月芳・月子）（清記—みつ子）

出席者　笛生・藤子・菊野・佳秋・武庫坊・年代・萬的・柳影・白渓子・諷云児・太茂津・福本英子・幸・寿美・千秀・みね・登志代・天笑・芳子・杜的・小林英子・すすむ・鬼遊・左久良・公一・勝美・凡九郎・狸村・白光子・武助・ひで・〆女・東雲・章久・紫香・淳一・栞・薫風・白洋・柳宏子・史好・寿子・美房・正坊・悟郎・いわゑ・みつ子・隆二・美智子・悦郎・喜風・利武・ダン吉・柿木英一・重人・三男・憲太郎・冬葉・あいき・満津子・典子・頂留子・美幸・勝晴・英壬子・甘平・美代子・文秋・元紀・章・昭子・恭昌・仙吉・射月芳・吸江・片上英一・岳人・小路・柳伸・八斗酿・智子・雀踊子・千万子・たつお・月子・金太

席題「おばちゃん」　植山武助選

おばちゃんが美しくなるジンフィーズ　元紀
おばちゃんの掌の中にいる仏様　幸
おばちゃん星にとどけとだんじりばやし打つ　頂留子
おばちゃんのつぶやきわたいにまかしとき　栞
いまごろはおばちゃん冥土で句をひねる　勝晴
OL三年もうおばちゃんにされている　射月芳
オバチャンのあの世とさほど遠くない　鬼遊
おばちゃんに浮いた話が出来かかり　利武
おばちゃんがまた釣書を持ってくる　天笑
おばちゃんになったら赤を着るつもり　芳子
おばちゃんが笑った皆ついていこ　柳影
おばちゃんと呼ばれ返事にとまどうて　武庫坊
おばちゃんがおばちゃん呼ばわりして揉める　千秀
おばちゃんの握手はいつも両の手で　みつ子
煮凝りが上手でおばちゃん話好き　萬的
出生の秘密おばちゃんが鍵握る　公一
おばちゃんがいつも噂になる気骨　小路
おばちゃんは笑って苦労話します　ダン吉
うるさいが一番頼りになるおばちゃん　諷云児
おばちゃんは弱い方へつきたがり　栞
おっちゃんが呼ぶとおばちゃんいい返事　千秀
おばちゃんの気概に惚れてからの縁　白光子
おばちゃんがときどき叱る電和口　冬葉
おばちゃんのような課長で世話やきで　寿美
おばちゃんの指のぬくみを抱いている　雀踊子
おばちゃんの影もやっぱり笑ってた　柳影
オバチャンがいつもいてはる久米田寺　鬼遊
おばちゃんが一人味方の恋でした　佳秋
華やかな過去おばちゃんの写真帳　月子
おばちゃんと呼ばれみんなに頼られる　柳宏子
LLサイズだなおばちゃんの肝っ玉　幸
おばちゃんと呼んで横町があたたかい　武庫坊
おばちゃんが案じてくれる酒の量　諷云児
おばちゃんが替えた地蔵のよだれかけ　柿木英一
おばちゃんが背負う女系の床柱　射月芳
おばちゃんの尻の軽さを好かれてる　勝美
かぞえきれない情けおばちゃんからもらう　雀踊子
おばちゃんがいると女の座がなごむ　美智子
おばちゃんに打ち明けられぬ暮しの灯　悦郎
面倒見のいいおばちゃんの泣きぼくろ　小路
おばちゃんは何時でも返事をしてくれる　武助

席題「着物」　中田たつお選

米一升だった私の訪問着　千秀
着こなしはなるほど元は旅役者　柿木英一
着物ショー春を先取りして見せる　紫香
一ぺんも袖を通してない着物　美智子
虫干しのつもり着物でお花見に　泰子

紫の着物あやめの精になる　みつ子
お見合いは着物と祖母は譲らない　甘平
薫風へセルの着物と総絞り　勝美
中肉中背着物すんなりなじむ肩　英壬子
けったいな着物がはやる世紀末　美代子
ジーパンが良いと着物を脱ぎながら　柳影
着物をきると気持がしゃんとする明治　射月芳
おふとんになった見合に着た着物　泰子
お着物でおいでやすとはきつい語尾　冬葉
着なくても持ってるだけでいい着物　文秋
ペントハウスの着物にジャスミンが匂う　元紀
床柱背に丹前が酔うている　章
花道はなかった一枚の着物　悦郎
衣紋掛明日を信じ切る女　雀踊子
商談へ匹田絞りを着てゆこう　幸
亡母さんのお召がうつる齢となり　天笑
ときめきがそっと揺れてる身八ツ口　芳子
タカラジェンヌの袴と朝を乗り合わせ　小路
色気をこぼすおんなをこぼす身八つ口　幸
五時からは着物女将の貌になる　美代子

各地柳壇賞を受けた赤川菊野さん

仏頂面で帯を締めてる春のウツ　太茂津
初孫の四ッ身合わせる針を持つ　小路
訪問着の値踏みされてる座り皺　千秀
鮫小紋一期一会の茶を立てる　いわる
耳焼いて本大島と騙される　白光子
襟足へ別に女と書かんでも　凡九郎
青年の袴姿にある主張　みつ子
舞うている裾のさばきも芸の巾　美幸
さくら小紋を着てさびしさをまぎらわす　幸
不断桜は十二単衣を恋しがる　元紀
矢絣で聞き分けのよい京訛り　萬的
白紬こころの襞は覗かせず　芳子
裏方の苦労着物の裾がきれ　萬的
花びらのごと脱ぎ捨てて花づかれ　藤子
友禅の線一本に命がけ　福本英子
楽屋放談浴衣の襟をくつろげる　たつお

兼題「出費」　高須賀金太選

六・三・三節目節目にある出費　泰子
出費高恋の始末は書いてなし　千万子
鯛を釣る海老に出費は惜しまない　満津子
宝石を買う高い浮気になりました　太茂津
何時かまた戻ってくるという出費　昭子
愛はずむ出費もはずむ春なれば　白洋
嫁にやる出費に母は細くなる　螢
よろこびの後に出費がのしかかる　いわる
戦闘機買う税金が気にかかる　みつ子
野心家の男に出費が嵩む日々　萬的
親馬鹿に出費が続く痩せた脛　射月芳
母の日へすこし無理した子の貯金　たつお
手応えのあった出費へ輪がなごむ　寿子
一ランク落して加減する出費　小林英子
砂の城少し補修をする出費　泰子
そつのない妻を信じている出費　小路
貧しいが花を買うのは気にならぬ　みつ子
いい旅に土産を少し買いすぎた　藤子
家計簿に重い四月ののし袋　満津子
週休二日出費の額がふえてくる　妻子

社告

ご愛読ありがとうございます。本社では『川柳塔』誌代を昭和五十六年四月以来、八年間にわたってすえおいてまいりましたが、その後の頁数増加などにともなう諸経費高騰のため、六月号から定価を改定させていただきます。

新定価は、**六百円**（送料51円）とし、半年分は三千八百円（送料共）、一年分は七千五百円（送料共）となります。

なお、誌友の方で本年四月末までに払い込まれた分については現行のままとし次回請求分から新定価といたします。事情ご賢察のうえ、よろしくお願い申し上げます。

川柳塔社

少し弾んだ春の出費の後遺症　柿木英一
倍になり戻る出費はいとわない　甘平
まだまだ続くローンに出費切り詰める　文秋
つくしたんぽぽ出費の嵩む陽気なり　天笑
病院の待合室で待つ出費　笛生
入学入社年金の財布また攻める　甘平
慶弔金にブレーキがかからない　螢
お目出度い出費どんといこどんといこ　智子
荷飾りに田畑売ったという出費　昭子
消費税出費の春に輪をかける　白洋
三浪にやっとうれしい出費です　月子
ああ平和戦は果てしなき浪費　章
バイトする訳を知ってるパスポート　重人
眷属が手ぶらで覗く勝手口　荒介
父ちゃんに言えぬ出費を溜めている　月子
一円を貼り足している花便り　正坊
旅かばん妻には話せない出費　芳子
こんなにもかけていたのか電話代　千秀
黒い帳簿にパーティ券という出費　たつお
花咲いて妻の財布が軽くなる　月子
好きな人できて出費が増えました　金太

兼題「出会い」　藤田泰子選

どの出合いよりも妻とのよい出合い　八斗酿
神様に君との出会い感謝する　武助
出会いも別れもグラスに酒が満ち　英壬子
現実のわたしに出会う試着室　幸
姫鏡台毎日出会いの顔に飽く　章久
大学をすべって新たなる出会い　天笑
情けある出会いがあった裏通り　佳秋
親切の出合い荷物を持ってあげ　笛生
ローカル線軽い出会いと乗り合わす　元紀
ローカル線で出会った行商よく喋り　萬的
両端から縄をたぐって来た出会い　千代
もう少し早かったらという出合い　昭子
始めての出合いコーヒーおごられる　笛生
こんなにも出合いあるのにまだ一人　昭子
幸福な出会いばかりと限らない　柳影
出会いより別れが多い老いの坂　正坊
少し崩れた女神と出会う春切符　柿木英一
も一つの別れも知っているサクラ　片上英一
春は足早一つの別れ一つの出会い　柿木英一
この前と違う男を連れている　鬼遊
さっき出会って夜の電話をかけている　智子
俄雨の出合い未完のままに過ぎ　小林英子
ほころびをそっとみつけた出会いです　英壬子
鳩尾につぎつぎ貯まる住所録　荒介
サヨナラの潮時がある夜の出会い　佳秋
春の宵出会い大事に持ち帰り　月子
片袖を共に濡らした日の出会い　章久
誘惑をされたい出会い待っている　瑞枝
源聖寺坂あの織田作に出会えそう　萬的
その出会い一生私を縛りつけ　柳宏子
あの日から私の日記に彼が居る　千万子
そして三日落したボタンとの出会い　冬葉
マリリンと出会って泳ぎうまくなり　東雲
貴女との出会い百冊本を読む　典子
どん底に落ちると神様に出会う　射月芳
神の森抜けると出会う風の詩　岳人
水鳥の帰る日君と会ったのは　薫風
竹とんぼ忘れられない人が居る　荒介
この出会いだけを信じる風の中　千代
それからは長いパズルとなる出合い　美幸
青空に出会うとみんな遠くなる　吸江
裏切りに出会ってからのちぎれ雲　泰子

兼題「流れる」　宮園　射月芳選

兎追うタイムスリップする小川　柳伸
コンベアの流れに乗っている自嘲　重人
右向きの流れを誰か止めないと　金太
今の絆と流れるほかはないらしい　千代
里に住み人の流れの中を出ず　荒介
水面の下の流れをみつめよう　千代
花筏流れてははの岸に着く　荒介
青年の樹は激流に試される　柳伸
流木は海のなみだに晒された　千代
流れ星お前もきっと落ちこぼれ　早苗
片意地を張って時流に背を向ける　諷云児
憶病でいつも流れの外にいる　諷云児
情に流された女と昼の酒　たつお
最後まで流れに乗れぬ父の靴　隆二
ボクの死後も流れつづける川がある　白洋
流れ矢が飛んで来たのは味方から　雀踊子
振り向きもせずに流れて行った毬　芳子
雲は流れる昨日のことは忘れよう　甘平
流されてから人の世の面白さ　天笑
時の流れに乗れるやる気と才覚と　文秋

流れ着いたとこが都で嫁もらう　天笑
ライバルの胸に流れた矢が残る　元紀
川下の街へ流れて行ったきり　福本英子
雲の流れを見つめる位置に島の墓地　萬的
流されて石も男も丸くなり　天笑
春の小川の流れは少年期を奪う　元紀
ひとことで流れが変わるくらし向き　月子
春うらら帽子が川を流れるよ　史好
蛇口から女の愚痴が流れ出す　岳人
星は流れて人は出会いを繰返す　智子
安全訓流れ作業の位置につく　笛生
一本の藁と一緒に流される　美代子
流れたい舟を絆が引き戻す　泰子
青春を流れる雲に呼びかける　勝晴
蛇となって女を流す川がある　美代子
メダカにはメダカの流れ春の川　美幸
月日の流れに忘却の愛がある　元紀
流れるままに生きて女の不幸せ　福本英子
傷を持つ女の流れ着くところ　笛生
雲流れ男と女それっきり　月子
愛憎を水に流して野辺送り　射月芳

兼題「猫」　西尾　栞選

我輩は猫かと思う犬も居り　ちかし
目覚まし時計に死んだふりするうちの猫　千代
猫嫌い隣と決して口利かぬ　繁男
愛の歌だろうが猫のよもすがら　どんたく
ペット食ネズミの匂い知らぬ猫　重人
法善寺横丁の猫はお人好し　岳人
連休のゴロ寝猫にも邪魔がられ　天笑
戯れ唄が少しはわかるうちの猫　柿木英一
花便り猫も拗ねてる膝の上　太茂津
何よりもお金が好きな招き猫　隆二
舗装路を猫が横切る夜の底　勝晴
オス猫で口説き文句を知っている　寿子
飼主も猫もオバタリアンらしい　幸
飼猫が隣の暮しと比較する　白光子
飼猫に妻の柔肌とられたり　恭昌
週休二日猫まで嫌な目つきする　千秀
奥座敷の猫はうっかり叩けない　白光子
鍋島の猫はロマンを語りつぐ　甘平
招き猫は古いが女将愛想よく　萬的
妾宅の猫は化け術心得る　射月芳
一ぴきの猫に不倫をマークされ　勝晴
老猫と老妻どことなく似てて　章
生意気な猫で時々家出する　颯云児
転勤の話へ猫も耳を立て　天笑
消費税猫も悩んでいるらしい　寿子
猫抱いた美人と並ぶ指定席　吸江
猫舌へ見切り発車のベルが鳴る　寿美
離婚して貰うた猫も遊び好き　満津子
猫も鳴く孫も泣いてる春の宵　恭昌
わんぱくの日記の中で猫育つ　千万子
愛猫がすり寄ってくる冷戦中　典子
厄除けに飼う黒猫と春を病む　たつお
春雷のとどろく膝に猫ねむる　美智子
猫とおんなは春の呪文を持っている　柿木英一
恋人の名前を猫につけている　芳子
深酒が猫と出くわす勝手口　小林英子
猫目石別れたひとをふと思う　正坊
ボーイフレンドが仰山いてるうちの猫　公一
捨てに来た仔猫と帰る俄雨　美代子
猫抱いて競馬新聞離せない　冬葉

坂本仙吉郎氏米寿祝宴

句集『ふたり旅』を刊行した坂本仙吉郎氏（大阪市・同人）の米寿祝宴が三月二十九日午後六時からカニ料理「網元」本店で開かれた。

今日からは老という字を忘れよう　仙吉郎
ワープロを習うと言うて笑われた　〃
黄泉から迎えに来たら追い返す　〃

祝　吟

百歳の柳旅童子となり給え　薫風
十人の孫と寿ぐカニ料理　鬼遊
子も孫も友も寿ぐ米寿の賀　登志実

土居耕花さんを悼む

平成元年4月2日　歿
天祥院青柳耕花信士

弔辞

小林妻子

謹んで平成元年四月、桜花咲き初める今日川柳塔社参事、故土居耕花さんのご霊前に悲しいお別れの言葉を申し上げます。

あなたは旧制小学校卒業後、大阪・神戸を転々とされ、人間陶冶の心を培われ、その折々の体験が今日のユーモリスト耕花さんを作りあげ、全国柳人の憧れの的となったことと思います。半世紀にわたる長い川柳の道でした。いつも柳社の重鎮として、内に外に柳友の敬慕の的となられました。

先に昭和四十五年に『笹の花』、昭和六十二年春、傘寿のお祝に第二句集『やっこ凧』を発刊されました。全国の空に高くたかく舞い上っているものと思います。また、昭和五十八年秋に句碑建立、

次の世があったら妻よまた逢おう

は余りにも有名でございます。そしてお目の不自由なおばあさんをとても大事にされ、それは仲の良いご夫婦でした。句会の帰りにはいつもおばあさんへの土産を忘れたことはありませんでした。

酌ぎこぼす妻の近視をいとおしむ

も仲の良いおばあさんとの情愛の句でございます。次から次へと泉の如く湧き出てくるあなたの句には、いつも驚嘆したものでございます。

長いながい川柳の思い出は尽きることはありませんが、今日まで育てて下さいました大原川柳社は、全員命の限り守り抜く所存でございます。前会長真さん、文衛さんと仲良く極楽浄土の川柳をお続け下さい。

耕花さん、さようなら。川柳社一同、もう一度さようなら。

お浄土も笑いの種をまく旅路　妻子

辞世

安らかな地下三尺の巣に帰る　耕花

柳翁二百年忌墓石改修募金 趣意書

本年は柳祖、柄井八右衛門川柳翁の二百年忌に当たり、柳界にとってまことに記念すべき年であります。柳翁の墓は、東京都台東区蔵前の龍宝寺境内にありますが、墓石は二度にわたる災害にあって損傷が著しく、早急に改修する必要に迫られております。

このたび、柳翁の二百年忌に際して墓石の改修保存を行い、翁の功績をたたえ、永く後世に顕彰することとなり、ここに日本川柳協会を勧進元とし、傘下の常任理事ならびに理事全員が発起人となって改修募金を広く全国川柳結社ならびに柳人に対して公募いたします。各位のご協力ご支援をお願い致します。

募金額　一口二〇〇〇円（幾口でも可）

送金先　〒542－39　大阪市中央区谷町7－1　新谷町第2ビル206号　日本川柳協会内　柳翁二百年忌募金係

締　切　平成元年8月末日

事業内容（予算総額二八〇万円）

・墓石の改修と墓石保護の屋根新設

・柳翁二百年忌記念標塔の建立

・川柳会館内に新しく「無名庵」の扁額を掲示する。

日本川柳協会

耕花君を偲びて

本田恵二朗

平成元年四月二日、私の最も親しい柳友である土居耕花君が八十二歳の天寿を全うして浄土への旅路に発たれたが、彼の八十二本の年輪の中の五十本ほどを知りつくしている友の一人として、その越し方を振り返って見る時、あざやかにクローズアップされることは耕花君の人生は即ち川柳人生そのものであったと今さらの如く痛感したことである。

川柳なくして耕花君の人生は成立しなかったと言っても過言ではないと私は思っている。思い返すと昭和二十六年頃、私が大原颯柳会を創設した時、いの一番に馳せ参じてくれたのが耕花君であった。その当時の創設メンバーは殆ど故人となっているので、創設メンバーは耕花君が一人残存していたのである。佳き片腕であり、よきライバルでもあった耕花君の長逝は、私の心の壁に一本の矢が刺さったような衝撃をおぼえさせられたことである。

路郎門下の好作家であり、私の敬愛していた故豆秋氏の跡を継ぐユーモア作家は耕花君であると私はひそかに決めていたが、後続作家が現れるか、全く未知の感を深くする私である。ともあれ耕花君は川柳塔社と川柳岡山社に拾い上げてもらって、そこでのびのびと且つ楽しく作句街道を漫歩することができた倖せ者だと思うと同時に、ユーモア作家が少なくなった現時点において、それを継ぐ作家の出現を待望してやまぬ私である。

故路郎師をはじめ、川柳塔主幹西尾栞氏や橘高薫風氏やその他たくさんの柳友の皆様に対して、耕花君に代って、謹んで厚礼申し上げ、拙いペンを置かせて頂く。

冥土への旅路へ晴れた日よ続け　恵二朗

――**遺句抄**――（恵二朗抜粋）

サヨナラをしているように腰曲る
天井よさよなら僕は退院す
風鈴が止って猫が起き上り
夕立が夫婦げんかを持って逃げ
百円も買うて葉書が値切られず
散髪屋禿のまわりに手間を入れ
バランスを折がとってる千鳥足
孫だからおむつの前で飯が食え
飛び蹴りの型で自転車から転び
扇風機が止って空気がホッとする
髭を剃るたびに川柳かと聞かれ
カマキリはすぐボクサーの真似をする
お祝いのように長命葬られ
抄本に僕の製造年月日
老妻の名を呼んでみて用はなし
骨壺に消える手品を知っている
川柳を見せて閻魔を笑わせる

竹中綾珠さんのご逝去を悼んで

桑原喜風

昭和四十六年八月から東大阪川柳会の創立者、竹中肖二氏とともに長年活躍され、肖二氏亡き後も、東大阪川柳会のため、尽力されました綾珠さんは、去る三月二十四日、八十三歳で逝去されました。法名は

綾雲院草室麗月大姉

ここに、昭和六十三年一月から九月までの近作を掲げて追悼の言葉に代えさせていただきます。

四五年も痛んだ脚が嘘のよう
リハビリの痛み他人にわからない
杖だけで歩ける幸を芦屋川
教え子の見舞いに心春のよう
級友と来た温泉につかる幸
据膳で好きなえんどう木の芽あえ
阪神が勝つと御機嫌よい息子
エビネラン五種類育て嫁得意
朝夕の息子の挨拶元気呉れ

花地柳壇

毎月25日締切厳守。一人一句、雅号を含めて20字まで。

担当・玉置重人

川柳ねやがわ　高田　博泉報

ひとりでは出来ぬがデモで気勢あげ　楽天
先生に母はぺこぺこ礼を言う　紀代
愚痴一つ言わず男はふり出しへ　三峰
てこずった子ばかり集まるクラス会　菜月
二三人集まりだした好奇心　君子
ふり出しにやっと戻って来た迷路　一進
集まれば戦地の話で酒まわり　抜智
ふり出した一枚身売りする老舗　克子
従姉妹会言い出しっぺが未だ来ない　玲子
こわそうな人がペコペコ礼してる　時子
集まりを避けたカラスが病んでいる　はつこ
目的を一つに集まる蟻の群　絹子
ふり出してまついているブーメラン　(浅)房子
振り出しの一歩が語る固い意志　えいめい
集まってそれから行くとこ考える　増造
臆病な犬は主流に群れたがる　雅文
ふり出しに戻り妥協の途さぐる　時弘
束の間の三世代なりお正月　なつめ
集まればグルメと旅とカラオケと　権太
婚礼に手持ちの歌を先取られ　亮光
追伸の言葉に匂うてくる礼儀　美智子
肝心のお礼言うのを又忘れ　春子
肩書を持たぬ集まりなら行ける　良三
ふり出しで一気に雲に乗った女　一芳
思い出に集めるこけし妻に似る　波留吉
お見舞いのお礼だまって手を握り　かすみ
平成の春ふり出しの駒を振る　おさむ
再建へ三顧の礼で迎えられ　庸佑
漬物がおいしかったと来た礼状　シマ子
がらくたを集める子らの好奇心　勝一
ふり出しで見通していた妻の勘　章
落し穴たかが儀礼と見た甘さ　一途
一枚の礼状が波紋呼んでいる　てまり
欠けた顔ない集まりのうまい酒　光子
集まった人の顔みな票に見え　一笑
遠くから目礼をする未亡人　まさお
振り出しに戻る夫婦に策がない　冬葉
黙礼にしとこあちらも二人連れ　頂留子
ふり出しに心開いた寒椿　静江
嫁ぐ子の三つ指父の慌てよう　速水
顔ぶれをみてから帰り仕度する　博泉
ゴールみなふり出しという転生論　度
振袖も三ヶ日だけの礼儀よさ　三郎
ワープロで無味乾燥な謝礼文　三千子
ふり出しに戻れと気楽なことを言う　礫
礼装を仕事着という葬式屋　敬山
温もりに触れたく恩師囲む会　柳宏子
礼節を忘れぬ父の冬帽子　雀踊子
アカデミーに集まる女翔びたくて　〆女
何となく覗いて見たい人だかり　小路
ふり出しでゴールのポーズ考える　紫香

川柳化粧櫓　植村客遊子報

聞き流す術を覚えて同居する　岳詩
耳よりな話へ閑人寄って来る　秋月
動物園で一番鶏が朝を告げ　紅月
真直ぐに行くから出世に見放され　葉香
補聴器をはずせば春の音がする　白李
寝ころんで親の威厳を聞いてやり　礎石
老い二人静かな音で米かしぐ　大鷹
条件を飲んで素直な顔向ける　三青
計りごとあってシャネルの五番です　悲子
野の果てに逝った息子は学徒兵　鈴代
いいじゃない左様ならだけの人生よ　遊光
病いよし人の情の見えかくれ　遊峰
本音だけで生きて古稀が傷だらけ　サワ子
日向ぼこ脳裏を駆ける孤独感　瑞穂
何事も運命と老爺丸く生き　永楽
ランドセル背負って降して中眺め　悟虹
掛け算を風呂で覚えた孫二十　好花
むらさきの余韻を残すいい女　文
友達は良いものと知るクラス会　春華
赤い坊とキャベツと帰るキャデラック　客遊子

川柳藤井寺（前月分）　赤木　和子報

激動の昭和支えた背の丸み　志洋
春一番心の扉開けに来る　きよし
花嫁を遠い他国に募集する　三郎
ハードルを少し下げようかと思う　美代子
余る程あって数字を追いかける　昭子
奴凧自由は糸の長さだけ　治子
糸切れた凧でふわふわ頼りない　スミ
条件のいい募集にある落し穴　繁男
一つとせ後の文句が気にくわぬ　作秀

店じまいパート募集を貼ったまま　比呂志
幸せな挨拶出来る朝を起き　与呂志
申告の数字指から嘘を書き　末一
後援会募集の頃は参議院　祐二
親のする通りしていてどやされる　みのる
昭和終焉粛々として寒の雨　和美
宣伝も兼ねて出してる募集ビラ　てつお
消費税一円玉の出番です　ふゆ
親類を回り年玉募集する　雅美
一年の食のピリオド蕎麦すする　彩
亡夫恋の数珠を繰ります百八つ　政代
縁起良い数字で受験楽しみに　伴子
ボランティア募集の本音は財政難　紀子
寒椿昭和の土へ落ちました　初枝
雑学が少し役立つ募集欄　敦子
ダイヤルへ指が数字を記憶する　信子
暮の風邪昭和平成またにかけ　昌子
ウインドーの桁じっくりとエメラルド　寿美子
政治家の身替りという秘書求む　美房
老母にまだ女が匂う初春の帯　正枝
電柱にしがみついてるパート募集　婦美枝
ぼんやりと雲を見ている幸もある　よう女
凧糸がぷっつり切れて他人です　秀伸
土壇場で福呼び込んだホームラン　松亭
女房の化粧する顔百面相　ときお
幸せの止まり木欲しい女文字　美佐
嫌われるけれどなくてはならぬ四　和子

川柳藤井寺　赤木和子報

平凡な暮らし日記のネタがない　志洋
腹立てぬ暮らしに三度白い飯　きよし
人間の卵も冷凍する時代　スミ

子沢山あんなこんなの暮らしです　三郎
年金の枠ですませる寸志です　治子
春の日の一日卵立て独り　美房
祖母からの暮らしの知恵が消えてゆき　比呂志
生玉子生むだけ生ませ首をしめ　作秀
中身より瓶が買う気にさせている　昭子
木仏一体彫ってくらそうかと思い　美代子
話題なき夫婦に犬が迷いくる　敦子
クラス会胸はずませて薄化粧　ふゆ
誘われたハガキと歩く奈良の道　正枝
二部屋が丁度似合いの落花生　てつお
三世代暮らすルールをわきまえる　信子
胸の内語り語らい老いに入る　ときお
豆まきに鬼が内でもよい孤独　政代
言い負けて寸志にちょっと名を並べ　与呂志
ポケットの中の寸志は母の文字　末一
悪知恵の散蒔き株に躓いて　祐二
病室の冬一刷きの雲走る　和美
ひとり住み沈む砂糖をみつめてる　雅美
春来る土の香知らぬ水中花　彩
文旦の皮ちょっと過保護だと思う　伴子
如月の月光冷たく土を射る　初枝
掌を返したように寸志生き　寿美子
休日が増えて働き蜂弱り　昌子
年度末道路工事に行き当たる　紀子
病む吾に寸志にと咲く寒あやめ　つや子
中流の意識で暮らす蘭を買う　婦美枝
顔の皺に正比例する物忘れ　吸江
セールスは胸に一物誘い水　好太郎
入れ歯では年の数までかめません　秀伸
菓子袋胸に押さえて駆けて来る　よう女

炒られると意地ある豆がとび跳ねる　松亭
ときめきを合わせ鏡に覗かれる　美佐
しわ寄せはいつも弱者にくる暮らし　和子

城北川柳会　神夏磯典子報

三世代達者で円く和やかに　午郎
霜柱踏んでかかさぬランニング　八重子
粉雪の根雪となって春の水　よし子
茜雲もえているのは白雪か　輝子
理想持ち前へ前へと進まんか　仙吉郎
もうひとりの自分を選ぶ化粧箱　ただし
喜びを伝える役は買うて出る　ふみ
平凡な女になるという別れ　静子
喜びはこれだけ位と手で囲み　温子
七色の海が心に映えた旅　トキワ

佳句地10選（前月号から）

里　小路選

すばらしい空想くちびるかみしめる　度
雑踏で儲け話を聞きわける　射月芳
欲捨てた顔で仁王と会っている　曲ん手
愛すれば答えてくれる土が好き　節子
終点で父が大きな欠伸する　雀踊子
問をおいて温い返事を用意する　求芽
ありのまま話しゆっくり風呂に入る　静子
それ以上言わぬ夫婦で仲がよい　杜的
二人きりになっても何もしてくれぬ　桂香
二の舞いはさせたくないが見ててやる　克子

消費税一円玉が見直され　敏子
自画像を少し理想に近づける　満津子
三代を生きた八十二の丸い腰　寿美礼
長かった短かったとふたり旅　静歩
夫婦喧嘩余生の旅の道草か　新一郎
言葉までがらりと変えている身なり　白峰
日本の豊かさ思う粗大ゴミ　文子
飽きもせず二人でつづる愛と憎　史風
七草粥哀しい朝の虚脱感　登美子
やりどころ無い憂さを句にこめて書き　きくゑ
ユーモラスな鬼も見参京の古寺　達子
年賀状みんなに逢いたし話したし　テルミ
花畑理想の色にめぐり会い　典子
中国の豆で節分厄払い　閑石
年越しの豆端数だけ食べとこう　純子
冷戦がはじまる兆し妻無口　公一
人生相談未婚の母はお下げ髪　倫子
負け犬の影と二人で帰る道　右近
お米には敬語をつかうおばあちゃん　薫風
戦争の記憶ヤミ米繁盛記　春蘭
政界はひっくり返ったおもちゃ箱　秀夫
四月馬鹿笑っておれぬ消費税　市郎
山坂を越えてふたりの去年今年　千恵子
現実と理想はいつもゆきちがい　きみ子
手をかけてミルクの空箱よみがえり　とみ子

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

歩きましょう貴方と優しい風となら　江山
水仙で新春迎えた屠蘇の味　秀香
やんわりと急所をついた矢のうずき　さわゑ
新築に釘一本を迷いぬき　ふさえ
元号が変って一度にとしをとり　静香

こそこそと六法全書の裏をゆく　つゆ草
年ごとに賀状の数も影ひそめ　知代子
暖冬にゆりおこされた梅の花　明子
青い鳥まだ追っている六十路坂　伊久栄
反骨を蹴った波紋が生きている　山人
神様の笑顔が見えるお賽銭　志重
褒め言葉番茶も出花と答えとき　千代女
黒光りする板の間にある躾　藤江
正月が来たかと餅もみ板が問う　邦人
押してやる顔へ軽四砂を蹴る　吟平
玉砂利を踏んで明治の森を行く　種子
独り言喋って孫の砂遊び　美恵子
ままごとの砂のごはんにかしこまり　保恒
おもわくが外れて苦い砂をかみ　禅心
砂埃かぶって地蔵雨を待つ　つた子
砂浜のデートの跡を波が消す　楽山
お揃いの服も可愛い姉いもと　ひろ子
孫も子も揃うて祝い春明ける　虞人
どれとでも揃いになれる宿の下駄　半仙
足なみも揃うて伸びる棒グラフ　甫正
三ッ揃い夢を包んで二十歳の日　光水
元号がかわり昭和も遠くなり　賛平

佐川川柳　赤川　菊野報

悪友に詫びて屋台を後にする　十面子
おしのびで屋台の味を盗まれる　節子
屋台酒飲んでネオンの街に更け　憲一
傷口を互いになめて屋台酒　稔夫
鉢巻が似合う屋台の顔になり　天花
ラーメンの屋台の裏で咲くロマン　幸泉
屋台では社長も平もないお猪口　一郎
こんな夜は屋台恋しい赴任先　和興

尼崎　春の川柳大会

とき　5月7日(日)午後1時半締切
ところ　サンシビック尼崎(阪神尼崎駅)
お話　古下　俊作氏
題と選者(各題2句)投句拝辞
「帯」　小出　智子選
「縁」　田頭　良子選
「銀」　鳥本　泰選
「旗」　田渕　定人選
「杭」　森田　栄一選
「峠」　黒川　紫香選
「跡」　伊東　静夢選
会費　六〇〇円(作品集郵送)
主催　尼崎川柳同好会

冬将軍下戸も立ち寄る屋台の灯　千恵子
ハチキンの屋台に並ぶ四季のもの　須磨子
残業の帰り屋台の美味い酒　禎子
内閣の屋台をゆするリクルート　功
屋台でも引くかと定年後を語る　佳風
グルメより屋台の味が性に合い　菊野
熱カンを屋台の主と分けて飲み　トヨ子
グチというオデンのネタもある屋台　美奈子

川柳塔からつ佐志教室　浜本　義美報

秀作画一層映ゆる白い壁　ちよ
絵を一つ掲げてゴマかす白い壁　紀一
白壁の妻の笑顔が招んでいる　順子
白壁の亡母が護っているわが家　房子

白い壁歌が出来そな絵を飾り　治幸
自画像が一枚欲しい白い壁　喜久夫
いつの世も予算と予算喰い違い　茂坊
棟上げに渋い自慢の喉きかせ　万亀子
子と孫を繋ぐレールを敷いておく　冬子
嫁がきて安心する間なく別居　紫泉
魔女百態浮気心が騒ぎ出す　百万両
愚作でも秀作となる白い壁　義美

いずも川柳会　吉岡きみえ報

やさしさに溺れてならぬ他人船　きよし
成金にソロバンはじく村雀　律子
平和なり他人同士で露天風呂　多輝子
串焼に他人の噂が突きささる　重昭
他人でも友には何もかも話す　巡歩
他人の血こんなに温い握手する　芳子
素直さが人に好かれる宝物　桜水
素直さを相手の笑顔に思い出す　寿
素直すぎいつも貧乏くじを引く　鐘堂
傷つけば素直になれぬ影法師　文子
素直には出来ぬ返事へ過去がある　義弘
振り上げた拳がゆるむ素直な子　美磯
妻の我を素直にきいてくれる夫　嘉寿恵
歯痒さに素直な孫を焚きつける　六之介
酒の出る気配素直に腰を据え　久代
そして春猫も素直にひざで寝る　早苗
これだけは素直に言えぬ深い訳　勝水
日記には素直にゴメンと書いておく　寿美
鍵っ子も素直な大樹となりました　一葉
座布団の端の素直な膝小僧　草丘
恰好だけつけて気力のないモヤシ　桂子
農一人母の気力に負けました　リチエ

掛け声で気力のなさを補足する　マス子
体力も気力もないが銭もない　紋次郎
祈りたい気力になってから落目　軒太楼
気力では負けぬと父の総入歯　芳枝
細腕の気力でたぐる命綱　為一郎
受けて立つ気力笑顔の下で燃え　弁次郎
気力では生きていけない運がある　雪子
血の滲む気力があれば乗り切れる　勝子
折角の気力に邪魔な歯の疼き　幸一
無気力を神に叱られ靴を履く　竹夫
子をかばう母の気力に負けた鬼　愚童
もう一度凧は気力で風に乗り　功
けもの道気力が尽きた跡がある　圭詩朗
再起への気力補聴器外さない　裕
空想に夢も同居の春炬燵　慎枝
空想をすると楽しいヒミコ伝　萬吉
空想の余白に思うひとり言　久道
七彩のクレヨンで描く空想画　知恵子
空想の世界を狭くする文化　ちかし
空想が好きな女のうるんだ目　馨子
人妻の空想時に火の粉抱く　芙佐子
空想と夢を与えてアトム逝く　茂美
空想に生きる私は獏でしょか　ノブ
空想の中でガラスの靴探す　(迫)秀子
空想に遊ぶ私は雪女　久栄
井の蛙空を仰いで雲にのる　多賀子
空想の椅子で昼寝をしてしまい　智子
空想にふけると若さ疼きだす　正朗
アパートの空想誰も覗かせぬ　まこと
空想で老母は赤い花をつむ　篤子
空想の世界へ女翔びたがり　良子

空想は海で鯨になるメダカ　青湖
空想で抱いた殺意が怖くなり　昭二
古浴衣孫のおしめに針運ぶ　房子
思い出す古着が米に化けた頃　流石
古着でもよし底辺に清く生き　水煙
古着着た過去は伏せてる姫ダルマ　きみえ
子育てに古着嫂から貰う　代仕男

岸和田川柳会　植山武助報

懐が寒く地球儀まわしてる　ダン吉
いたわりの酒は寒夜をかけてくる　佳生
懐がまた寒くなる消費税　通彦
リハビリに励み寒さも苦にならぬ　狸村
四面楚歌さぞや総理は寒かろう　白光子
暖冬で儲ける人と泣く人と　みのる
肩の荷を下ろすとすぐにまた荷物　希久志
平々凡々と過せば明日が逃げてゆく　ゆづる
友の死の哀しみ疼く春嵐　ひで
天国へ逝く母さんは杖が要り　こう
一日の違いで昭和の生れです　冨志子
淋しさも気楽に馴れて来た一人　春栄
白い息ふれ山茶花の花ひらく　喜久子
何事もなく夕映え夫と居る　すみえ
暖冬に寒さがかえるお水とり　さよ子
一クッション置いて笑いの席になる　武助
妻の掌の上で上手に舞う男　浪速子
水たまり三ツ越えたら母の胸　一弥
明日の日を信じて生きる束ね髪　甘平
雪おんないちばん寒い晩を選り　天笑
やがて春古い手紙は焼いておこ　月子

堺川柳会　河内月子報

正直なあなたの顔は読みやすい　小雪

物分りよくなってきた気の弱り　半　銭
弱気捨ててから目の前が広くなり　かりん
人間の弱さを父に教えられ　彗　梢
負け犬の気持がわかる負けた犬　凡　子
弱いから放うり出すのも親ごころ　東　雲
消費税の解説読むと眠くなる　千万子
この人の裏読めてきた縄のれん　泰　子
遠くから見ていただけの男でした　美　緒
明日を読むことに不馴れな手弁当　森　子
白線までさがって暮らす弱い虫　頂留子
初恋は誰やパパかと子に聞かれ　覚然坊
米寿のよろこび部屋一杯の孫曽孫　月　子
先読んだつもりの株にいじめられ　天　笑
はなむけに温い言葉は用意せぬ　金　太
初恋は花の散るころ散りました　楓
初恋の彩は今なお桜貝　一二三
今日生きる喜びコーヒかきまぜる　与呂志
身のほどを知る用意だけ残しとく　小　鹿
三回の食事三回のよろこびに　外　吉
もう腹を読まれたらしいぬるいお茶　素　灯
無駄話しながら先を読んでいる　巡　歩
大喪の用意は水も漏らさない　真　柳
神仏に頼る弱さにある生活　芳　水
うす味をよろこぶ母の店を選る　曲ん手
時代ずれせぬよう漫画読む社長　庸　佑
行間に母の心を読み尽くす　信　博
不足なく生きて喜ぶ母子家庭　金三郎
旗印の先読む鴉一羽いる

静岡市川柳塔同好会　永倉　僕川報

濡れ衣をかぶった秘書に冷たい目　弧　秀
まだ叶う夢を見たくて絵馬を買う　晃　授
贅沢に慣れて節約忘れ去り　猛　士
倦怠期髪を変えても気付かれず　金　吾
寄せ鍋の絡んだ箸が縁となり　紀代志
憚らず親子抱き合う合格日　正　雄
酒呑みは愚痴をこぼしてよい気焔　た　ま
魂胆があるから父に世辞を言う　た　き
せっかちのとこだけ親に似て育ち　つ　ね
腰紐で女を見せる着付け技　き　ん
買おうかな眼鏡教える桁違い　まつゑ
半世紀嫁と呼ばれて母達者　静　代
早起きの散歩デートと気付くまい　三津子
真夜中のベルに予感が的中す　千　代
成人になって煙草と酒をやめ　久　子
死に度いと言う口裏に医者を変え　房　江
神様と死角の位置で渡す金　僕　川

三幸川柳教室　桜井　千秀報

うまそうな陳列へ鳴る腹時計　結　実
無愛想な食堂味で勝負する　由　梨
メニュー見て思案の末がソバになる　忠　昭
社員食堂社長と同じ椅子で食べ　育　子
やれやれと買物袋席につき　桂　香
雑炊に並んだ遠い日の記憶　廉　明
割り箸の筒が知ってる客の入り　宏
隠し味盗んで帰る主婦の舌　純　子
食堂で小銭出し合う女連れ　(中)幸　子
立ち止まることも覚えた長い道　当　代
炬燵から出た頃止まる電話ベル　計四郎
止まるまで回り続ける夫婦独楽　三千子
上げかけた手が止まってる参観日　(上)幸　子
止まってる時計と知らず乗り遅れ　隆　行
激情の流れ止まらぬノラの家　孝　子
運命の出会い貴女の目に止まる　み　ね
止まること知らずに走る父の貨車　鉄　治
一旦停止せねばこの恋致命傷　朱　夏
静けさに孤独な時が又止まる　芙美子
当人がきたので止まる扱き下ろし　定
つむじ風ふと立ち止まる白い杖　高　夫
連勝もいつか誰かに阻まれる　辰　治
このくらい苦労のうちでないときめ　利　子
苦労してやっと桜が咲きました　定　子
高いびき何の苦労もなさそうに　美智子
気苦労も寝顔がすべて忘れさす　嘉寿子
残り毛でどうしてはげをかくそうか　重　次
捨て切れぬ鍬に苦労の滲む跡　千枝子
折り折りの苦労が生きるペンの先　千　秀
風呂敷が過去の苦労を喋り出す　靖　子
苦労ばなししない母の手枯れている　和　子
苦労などどこ吹く風と梅が咲く　玉　枝
苦労人だから仲裁まかされる　美代子
肥えるたち苦労ばなしも嘘にされ　正　一
繁栄と苦闘残して昭和逝く　智水庵

サークル檸檬（昆陽池吟行）　**藤田泰子報**

何気なくつけた灯にうろたえる　今日子
水鳥がお堀に浮ぶ春うらら　千代女
毛皮着てたっぷり場とりすましてる　三四子
胸の灯を消して女の旅つづく　智恵子
たっぷりとお小言くれた親遠く　美　子
たっぷりの後姿はオバタリアン　雅　子
モンローウォーク　マガモ　カルガモ昆陽の池　美　緒
統制がないようである渡り鳥　登志実
浮寝鳥六十の爺三十の嫁　薫　風
荒れる日もあっただろうに渡り鳥　泰　子

打吹川柳会　江原とみお報

昭和史の残火くすぶる大喪礼　原　兆
大胆な息抜きをして妊りぬ　颯　人
アメリカに竹下さんの抜け参り　宗　光
小器が大器の前で威張りおり　邦　俊
頬かむり空には白い雲がある　蛍
雪女の後姿に春の風　節　子
流し雛の郷野のうた風のうた　紫　映
はかないものよぽとりと落ちた寒椿　巡　歩
峰の雪春の足音聞いて解け　白　峰
折り返し点から闇が深くなる　紫　泉
如月の森には風もまだ無慈悲　雄　々
招かざる客がピストル持っている　雀踊子
京都さえ書けば売れます旅の本　杜　的
喜びの日もむずかしい父の顔　典　子
大口が賄賂小出しが交際費　善　政
心待ちのベルが鳴らない胸さわぎ　温　子
春の風赤い鼻緒に取りかえる　早　苗
ぜいたくな不足聞いてる菩薩さま　たつみ
消費税巳年の蛇よよくこなせ　梅　朗
欲望の淵から上がれない迷い　妻　子
嘘いくつ詰めて空しい旅鞄　寿美子
無口でも何んでもこなす器用人　弘　朗
貧富みな雪で包んであたたかい　康　子
楽しくて今日も白旗振っている　喜与志
肩パットはずして珈琲ふたつかな　美ッ千
思いまで私に似たか藪柑子　日出子
呆けたこと忘れ他人のせいにする　節　枝
やっと来た頂点神と居る孤独　仙　岳
刑終えたらしい雪達磨がとける　とみお

八尾市民川柳会　飯田　悦郎報

立往生救いの神となったメモ　憲太郎
メモを取る権利外人取ってくれ　美津留
ただならぬメモが行き来の会議室　頂留子
一筆のメモが織りなす血の絆　柳　伸
メモ持って少女が弾む手話の指　悦　郎
大臣の秘密がメモにのぞかれる　とみを
いっちゃもんつけられる種蒔いていた　恒　明
一坪の春を楽しむ種を蒔く　覚然坊
花の種蒔く善人の顔をして　曲ん手
蒔かぬ種生えぬ二人のスキャンダル　山　久
淋しさが嫌いで笑いの種を蒔く　美　幸
咲いたならあなたに上げる種を蒔く　春　堂
春蒔きがほしくて参る天王寺　律　子
一坪の庭にぱらぱら春を蒔く　欣　之
口止めをされた秘密が胃にたまる　度
宝石箱に一つ秘密を混ぜてある　美代子
記憶にはございませんと言う秘密　甘　平
空白のページに秘密かくれてる　夕　花
煮え切らぬ男でぬるい風呂が好き　眉　水
両極の温度が上る日がこわい　和　子
母になる尊い温度を記録する　紀美子
和解にはほどよい燗の酒ができ　泰
騙された温度できれいな花をつけ　三　男
暖冬の街へ親父の車椅子　章
仇情ゆるした肌に罪がある　勝　美
好調を問わず語りの肌の艶　柳宏子
たそがれのもやいに浮かぶ月の肌　しづ子
山肌の色変えてゆく四季の風　宏　子
肌よせて愚かな愛を確かめる　比沙胡
山肌がとても嫌いな排気ガス　重　人
石膏の女神の肌にひそむ影　雅　士
新酒の香肌に包んで杜氏帰る　シマ子
産声の肌に厳しき娑婆の風　喜　風
住所録消した所が気にかかり　一　志

川柳塔わかやま　牛尾　緑良報

文明の誤算地球が病んでいる　桂　香
作戦を探る握手が長すぎる　裕　美
落ちて破れて糸を支えと知った凧　武　雄
慈悲と知る涙の味は辛かった　雀踊子
わたくしを妻にしたのが誤算です　輝　子
あの日から誤算渦巻く吹き溜まり　照　子
近道で迷いつづけていた誤算　紫　香
古墳から嬉しい誤算の出土品　萬　的
向う岸だんだん霞んで行く誤算　紀美女
角砂糖誤算が少しずつ溶ける　美智子
目に見えぬ支えいくつも受けている　三　男
若い樹を支える杭は父が打つ　高　夫
支え合って三途の川を遠くする　公　子
闘病の支えは一つ彼の愛　信　子
川柳が支えわたしを生きている　克　子
結束の支援無実の陽が昇る　白光子
年金の支え細々老いの幸　瑞　穂
ヘルパーが支えた腕に寝たっきり　忠　雄
亡夫の遺志心の支えと生きてゆく　静　代
一本の薬を支えにする祈り　信　秋
ケーキ切る新郎新婦の支え合い　守
作戦にのった振りして酌をする　紀久子
作戦のレールが錆びる子の謀叛　恭　子
作戦は要らぬハートでぶつかろう　光　代
作戦もない母さんの温い膝　千寿子
作戦も意地もないからよく眠る　稚　代
作戦をかえてみろよと陽が昇る　隆　積

味のあるにくめぬ敵がひとりいる　寿子
男老いて女心の味を知る　忠
姑の味継ごう厨の奮戦記
顔よりもおんなの味はそのなさけ　愛子
天衣無縫めぐり逢いたいソンナ味　重延
達筆でないが年期の枯れた味　凡九郎
湯どうふの味に浮いてる京なまり　正博
点滴の味は命が知っている　英子
パチンコの味しめ父ちゃん若くなる　保州
苦労人さすがひと味違う肌　登志代
味しめた日から汗など流さない　凡太
味なことやるなと負けて敵を賞め　結実
空き腹に茶漬けの味で息をつく　柳宏子
甘辛の夫婦で合わぬ迷い箸　豊太
傷口に触れぬ情に支えられ　太茂津
　　川柳大阪　　**中尾比呂志報**　　緑良
落とし蓋大豆の香り母の顔　司
送られた駅が節目の出発点　亮太
くしの歯がボキボキ閣僚辞任する　美津留
くそ真面目だけをほめてる表彰状　しげお
裏切りを乗せると落ちる神の棚　希久志
おやどうかしたのか妻の変化球　重人
じいちゃんのボケは演技もちと混じり　雅巣
平凡な欲飲み込んで今を生き　我勝
あいつには負けぬ二の矢をつがえとく　金太
言い訳をする時別の顔で居る　与呂志
整形の別な顔して恋を射る　宙宙
春からは動き出そうかコタツ抱く　酔舟
失せて行く伝統こころもどかしく　正之
失う物何もないけど生きている　柳弘
大型を倒す小兵に湧く拍手　天平
大型のゴミに神様あきれてる　笑風
ただ者でない大型の目は光り　喜酔
トップ記事リクルートの日が続く　洛酔
祝電で義理だけすます遠い仲　三吉
誘惑が赤いポルシェに乗って待つ　鉄心
政治屋の真っ赤な嘘のお通りだ　喜楽
失って得たものがあり立ち上がる　比呂志
　　大原川柳社　　**小林妻子報**
身化粧を忘れぬ女に歳がない　朝霧
一寸だけ背伸ばしている惚け防止　みづえ
ねむれない種を夫が持ち帰る　玉恵
幾山河乗り越えて来た今日の幸　辰子
言い勝った無理が祟った自己不信　宮子
後進へゆずる机を拭いておく　はじ芽
団参を上手に束ねてゆくガイド　智泉
月影もあわわと明ける春の朝　元江
峠からなかなか下りて来ない春　理恵
傷心も笑うてすます母達者　悦子
うぐいすが鳴いたと告げる孫の春　たけよ
長雨が少し老父の気にさわる　喜美子
呆ける手も使うて老いの坂試す　巴子
スタンドの灯りで綴る思慕の詩　正己
迷調子まわり気にせぬ花の下　美代子
束の間の祖国に孤児の声悲し　幸子
春やよい窓辺に佇てば思慕つのる　敏子
重い尻孫にせかされやっこらしょ　こふゆ
ティータイムお喋り弾むいい仲間　睦子
万象の命へ春の譜が届く　寿恵子
昭和史のまだまだ続く孤児の列　ひでの
あと幾つ無事に越せるか夫婦坂　はるみ
気の強い女がそっと星仰ぐ　正子
ひまわりにちゃんと答が書いてある　あすなろ
望郷の涙を月は笑わない　妻子
　　川柳塔まつえ（3月例会）**恒松叮紅報**　　多賀子
さりげなく順番決めて飯を盛る　雄々
すべて無に還る順番ならいらぬ　翠星
順番を待たず飛び込むカラオケ狂　みつこ
順番待ちで一日暮れる医者通い　きみえ
春一番吹いて順番狂わせる　馨子
つまらない順番ばかり気にかける　貢範
痛い顔して予防注射の列に居る　雪子
順番がなかなか来ない青い鳥　秀子
年順にゆかないうちの子の背丈　律子
飯を盛る順は父から狂わない　芳子
順番がないから生きる欲を抱く　弘円
順番へ子離れ出来ぬ親が居る　昭二
順番を狂わす風が横に吹く　恵知子
虫けらの声もどけとリクルート　登志子
虫けらと言われ続けて強くなる　友子
虫けらがスポット浴びる街の角　小生
虫けらのような人生昭和逝く　一進
虫けらと言われた彼が今社長　美治
虫けらの遠くへ飛べぬ石をける　文子
金バッジつけ虫けらを踏みつぶす　弘円
とまり木の虫けら過去を語らない　愚童
初年兵虫けら同然扱われ　煩悩児
虫けらの顔に意地あり生存権　静江
虫けらに変身させる好きな酒　満江
虫けらにほうり出されて強くなる　竹雪
虫けらと言われて明日へ火種抱く　正朗
虫けらを忘れるためのコップ酒　遊美
子供にも劣る大人が多過ぎる

真ん中の子供で泣き癖ついている　操子
げんまんの時は輝く子供の瞳　蒼流
太陽と土が大好き子供たち　小鹿
母ちゃんに子供は何時も味方する　静翁
不可能がない子供の白い地図　淞南
正直に詫びた子供のいい寝顔　房子
にぎやかに子供の靴が並ぶ家　博子
苦労した親を知ってる子供達　ノブ
ちっぽけな幸せで良し子が二人　山久
子供等の声に兄あり弟あり　清志
子供らしい遊びなくしたアスファルト　雪美
子供の目の高さになって話聞く　みえ
身勝手な親が子供を駄目にする　君江
子供には本当の私が見えている　米子
恐ろしい家族計画のつけが来る　鶴丸
計画も立てず一人で旅に出る　久枝
計画は良知良能運ばされ　日出子
計画はまた遠くなるマイホーム　まさし
金借りる話そろそろ始めるか　寿美子
ひと儲けする計画に罠をかけ　巡歩
計画は引出しのまま地価騰貴　代仕男
寝つく日を夫にそろそろ話さねば　ミツコ
本題へそろそろ入る咳ばらい　静恵
試験日が終ればそろそろ出る小言　長三
老い達者そろそろ手すりなどつける　叮紅

川柳たけはら　森井　菁居報

おさかなのほっぺのとこにみがあるね　保ゆうすけ
ふあいとふあいとじょぎんぐがんばるぞ　幼典之
くもの上におうちができたらいいのにな　小一千枝
ゆらゆらおさらでおどってるプリン　小一歩美
平成とお手本書いたおじいちゃん　小二孝永
くやしいな次のしあいは勝ってやる　小三昌之
春がくるもうすぐわたしも春気分　小三史子
昭和とはさようならよと先生が　小四孝弘
つぼみさんもうすぐ春だとまってるよ　小四裕次郎
オニは外晴美のオニへまきました　小五晶美
豆まきははるみの口へまきました　小五晴美
ナイターのスキーは駄目よとお父さん　小五視幸
起きるのがほんとにつらい冬の朝　小六由博
もう姉もちょっと変った社会人　中三亜貴子
時代だな娘二人のパスポート　菁居
チョコレートパパ大好きと書いてない　蘭幸
血圧が高く金魚の死を想う　蓬春
義理チョコでよしこの歳を生かされて　静水
ワープロにひたむきな妻さびしきか　静風
一口がピリリときます老いの肝　浪子
正月の余韻こたつで冷めぬよう　麻代
年金が忙しくなる趣味にこり　ヤスエ
たおやかな裸婦の命よルノアール　一枝
夜のミラー淋しい蝶のプロフィール　ふさ枝
肩車あなたは何を見たのかな　愛子
厄年を母が一番気を使い　光子
一先ずは妥協はしたが腹の虫　千年枝
平成だ怒るな叱るな喧嘩すな　俊夫
寒温し尼僧の足の軽やかに　八重美
暖冬に厳寒の候と来た便り　勲
今少し若さが欲しい知恵袋　喜美子
子沢山みなそれぞれのドラマ持つ　喜久恵
相愛の日を待ち芽吹くチューリップ　こうじ
ラストダンスぐらいは妻と踊ろうよ　節夫
金封の近頃黒が忙しい　清水
一人居て自問自答の日も暮れる　千恵
娘のメモがなくて寂しいゆうパック　栄恵
てのひらに夫という字が温かい　令子
大儀な日さりとて生で食べられず　房子
言うことがないのでテレビ見ています　笑子
惚れているオモトに時々そむかれる　太虚
豆剣士くやし涙は流すべし　比呂子
釣り舟の夫婦の糸が戯れる　博子
うしろ姿亡父にそっくり兄が行く　政巳
雲一つないから冬の絵にならぬ　一路
不器用な男に生きる海がある　美佐雄
かあさんと呼ばれやさしい耳になる　千代美
狭い部屋小さな灯りあればよい　貞子
タイムカード押して急がぬことにする　山久
自句自解けっきょく都合よくまとめ　静火
吹上の半旗昭和が今終わる　新造
桃一輪へ女心を託しとく　シゲヨ
あなどった風が切り札持って行く　雄幸
懐が涼しくなって税が来る　康宏
僕は僕個性が大事だと思う　白狐

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

童心が踊り出てくるいい出逢い　千春
十二単衣小町娘の自負で着け　八重子
太陽の下で小町は目立たない　田鶴
コンテスト小町は脚に思い入れ　ふみ
恋をする小町娘の米子弁　朗子
たばこ屋の小町も白髪ふえて来た　とも子
ぱけがきた祖母で小町の過去を持ち　智加恵
小町とは同行しない俺の影　てい子
浮世絵になった小町をはる手紙　時子
花咲いて別れた小町ふと思う　富枝
自慢じゃないがバーゲン似合う小町です　恵子

行くところ小町ほのかな花となる　あい子
好きな糸通して結ぶ小町針　文世
妖艶な小町が二人いる我が家　夕子
小町はいつも花の樟脳しのばせる　瑞枝
小町糸きしませ亡母の紬解く　花子
ライバルの小町と同じ紅にする　正子
モナリザの笑顔が小町気にいらず　御前
小町産むつもり美人の絵に見とれ　亜弥
小町もきっと同じ舟に乗ってくる　日枝子
背の君のたった一人の小町です　より子
小町生き残って藁の草履はく　千代
夢の中わたし小町になっていた　玲子
風船が小町さらっていきました　やえ
うちの犬小町の血筋ひいている　由美子
その奥に小町が棲んでいた鏡　荒介

京都塔の会　松川　杜的報

ごむタイヤパンダ可愛く遊ばせる　花代子
捨て犬と仲良く土管の住み心地　栄
とり乱すまい喪服の帯を締め直す　杜的
ドーナツをおやつに置いて母の留守　芳子
男の子こそこそするなと師の教え　圭坊
まゆ墨をひけば強気よみがえる　年代
墨痕淋漓マル書いただけの禅の軸　求芽
木簡の歴史を語る墨の色　武庫坊
墨染めの衣に煩悩まといつく　颯云児
政界を乱しつづけるリクルート　紫香
墨を磨り挑戦状の筆を噛む　佳秋
月食でロマンチックな影になる　美智子
野次飛んだぐらいで審議乱れない　白渓子
結納の奉書へ静かに墨をする　〆女
墨をする妻の眼元は唯無心　京童

幼い想い出七色のリング菓子　英子
年明けて独りで祝う雑煮箸　笑子
病葉の煩悩冬が地に戻す　白李
一日は長いが一年早くたち　ただし
吉兆の名は知っている握り飯　正坊
朝夕の鏡素顔を確かめる　幸
足もとによろこびがある春の色　はつ絵
露天風呂小雨の笠をたのしんで　水客
心の平静呼びかける如墨をする　美穂
こそこそとするから二人あやしまれ　達子

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

少しずつ通帳に積む母の夢　智重子
どうしても余白埋まらぬボールペン　かつ子
夢を追い夢に追われて今日がありこの余白一輪ざしの置きどころ　聖子
夢抱いてでんでん虫は旅に出る　はるみ
予定など横紙やぶりがいてたず　恵美子
ペン置いて余白は神の意に任かす　歳栄
温室の花を雑草ふり向かず　鈴江
初夢に平成元年夢かさね　民子
無いような有るようなふりふところ手　秀穂
共通一次予定通りにはいかず　悦良
書初めの余白に明日を埋めておく　世似
すっぽかす予定で賛成しておいた　清泉
　　白汀

川柳塔鹿野みか月川柳会　土橋　螢報

そのうちに瞳の中に降る七色の雪　菩句
雪降って梅のめしべと恋になる　保子
雪しぐれ亡夫もさぞかし寒かろう　菊乃
昭和史にわたしの恋は一つだけ　きみ子
雪解けの愛を待ってる息づかい　早苗
昭和史を悲喜こもごもの詩でぬる　八重子

四世代生きて字引となっている　喜与志
天狗鼻自慢息子にへし折られ　幸枝
半歩だけおくれて老母の雪払う　かつ乃
みぞおちに残る昭和の灰かぐら　隆風
銃痕の昭和史だから語り継ぐ　みさ子
幾度か力をくれた藤のつる　千春
この一滴生きる力を呼び戻す　百合子
沈黙は力　静かな母の背な　(新)正子
まっ先に鼻は嚊をつかまえる　小鹿
若さだけ力まかせに夢を追う　幸代
哀しみの髪にうなずく水鏡　瑞枝
知恵袋ほつれ修理に出している　房子
ああ言えばこう言う人の知恵を借り　健
染めたって髪は死んでるようなもの　武子
鼻の利く犬もきれいな女が好き　芙美
酒ぐせを知っているから誘わない　由多香
ばあちゃんの知恵はノーベル賞ものだ　かずお
この町を知れば知るほど温くなる　石花菜
お天気やの父が自転車拭いている　とみお
産道を開く力は持っている　和子
楽天家茶漬けでかい夢を見る　智恵子
花ごころ知ってわたしは溶けている　汲香
生きていることが嬉しいあかね雲　三千代
力には力と思うから若い　弘朗
逆転の一打は天のはかりごと　雅女
全力を出した敗者へ湧く拍手　としお
貧しさに開き直って生きている　八重
犬の鼻　血眼の刑事従える　けんじ
顔春に向けてまっすぐ生きている　盛桜
やみくもに生きるレールに油さす　くに子
髪かざり和服の似合うひとがいる　呑水

礼知信　俺には酒があればよい　洋々
知っている歌を数えて冬を越す　完司
父の知恵まいにち少しずつもらう　はるお
北風と鼻の差ひとつ抜きんでる　諷人
肩がきがなくてまあるい父の鼻　美っ千
水滴のすべては天へ向けて発つ　千代
地域から上る狼煙を待っている　富恵
おくれ毛が無性に匂うから困る　荒介
約束のように親父に似てる鼻　日枝子
いのち惜し生命うつくし雪が舞う　螢

川柳塔唐津支部　久保正敏報

丁寧に蜂がお別れしてる花　虹汀
中毒にしておき禁煙だと騒ぎ　高明
春風に吹き残された納税書　四郎
四方の雲機上はるかに円描く　旭恒
明日知れぬ老妻笑みて退院し　幸夫
ナツメロに口を合せて若がえり　タミ
手造りの巣箱野鳥の危機救い　朴竜
弔砲のくぐもる空に半旗垂れ　正敏

翠洋会　中西兼治郎報

砂金出る川に群がる人の欲　兼治郎
群れの中もまれもまれて抜け出せず　みよ子
群れが好き華麗に咲いてかすみ草　絹子
連休も空を見上げて思案する　仙吉郎
動物の目からは恐い人の群れ　美津枝
群衆のなかに二人が梅田地下　英一
柔肌の膝を枕に白昼夢　恭昌
やわらかな蒲団にすやすや孫の顔　すすむ
空が好き白いマフラーなびかせる　東雲
新税は核の手助けせんやろか　さと美
親友がおって私の宝です　為子

柔かい頭のままで老いたいな　宏子
矢印へ群れて歩いている安堵　良江
アイドルの車に黄色い声が群れ　照子
猛獣の群れくぐり行く人の檻　綾子
野次馬にきく証言が喰いちがい　光子
文句言う口にも税がかかりそう　みつ子
大阪の夜景空から見る情緒　登志実
夕焼けておなかがすいた三輪車　いつを
弱いもの同士が群れる鴨の池　鬼遊

西宮北口川柳会　松本一郎報

森の奥はるか聖者の声がする　朋義
駅弁を買うのに団体苦労要る　白渓子
決断の前に逃げ道考える　諷云児
ゼニの音春の乞食の前に落ち　しげお
夢多い女が惑う愛の森　京童
桜咲く頃血圧が又ピンチ　伊三郎
夕鳥に森は優しい枝をかす　紫春
深い森ガラスの靴が置いてある　美智子
亡姑に似た人の隣へ腰かける　静子
二代目はピンチの度に土地を売り　宣子
とろとろと春眠俺に職がない　佳秋
昆陽池の鳥ゆうゆうと水ぬるむ　柳伸
雑音を聞く補聴器なら要りません　杜的
宿帳に小さな嘘を書くピンチ　喜代治
連続のピンチに水車回らない　国公
ポケットに鉛筆木馬回り出す　はつ絵
順風に乗れば他人の目が冷える　園歩
母だけの鉛筆がある台所　柳影
合格の祝いとなりし桃の花　春蘭
名人も指十本に変りなし　眉水
物価高年金ピンチのきのう今日　保蔵

神殿の森にこだます鈴の音　トミエ
南の森勝ってくるぞと風の声　香子
人並に夢は抱いてるかたつむり　いわゑ
おもむろに目を閉じ森の精となる　阿字
渡り鳥語り部となる森は泣く　〆女
二十一世紀豊かな森の絵を画こう　(松)芳子
水仙の香りに弾む春の毬　英子
転居して一から花の種をまく　笑女
思い違いしてたと知らぬ片思い　江美
静寂を守って森は動かない　よし津
神の声確かに聴いた森の闇　光代
風葬の森に転がる欠け茶碗　(河)芳子
政治家を斬る鉛筆を尖らせる　正坊
電動の削り減るのが早いこと　圭坊
可も不可もなくエンピツを持つゆとり　一郎
迷い込んだら女の森は抜けられぬ　正一
鹿せんべいの割れる音から春になる　作二郎
断崖のピンチ野望を捨てている　天樹
小公園の桜も見せます高架線　萬的
離着陸の耳へ妥協をしない耳　定人
アドリブで夫婦のピンチ切り抜ける　実
蓮ひらく音に古城が明けかかる　三笑子
下駄の音ああ青春の詩がある　武庫坊
一年は鉛筆けずりの新聞社　茶の子
立話春の陽ざしと軽い嘘　みつ子
春を呼んだのはヴァイオレットのベレー帽　高子
単身の部屋点検に妻が来る　俊子
言い訳は通用しない森の中　保州
法螺の音ますます冴えて出世する　信義
諸行無常読経がつづく古都の森　文夫
小鳥抱いて未だ醒めやらぬ春の森　枯梢

若者の音は離れて聞くがよい　森生
山彦がまだ覚えてた童歌　千秀
元号があって日本は温い国　蛮拙
新婚気分に浸り記念日流し合う　みね
酒の力借りねばいえぬ恋でした　御前
病んで見て思いがけない見舞客　山久
消費税ごきげんななめで聞いている　房子
おでん種とろりと炊けて夫婦鍋　敬
ハガキ一枚郵便局はすぐトナリ　善太郎
暗唱番号押しても金がないらしい　蛍
一円貨暮らしの足しになってくる　曲人手
よくはやる元歌手だったたこ焼き屋　勝
雪しんしん空より白い森となり　ただし
列島が南へずれた温い冬　勝美
菜種梅雨寒暖合流しとしとと　六郎太
石垣が斜めななめに坂の家　一進
鉛筆の芯を折るほど怒ってる　紫香

聴障川柳　稲田豊作報

目が醒めて今日は楽しいスケジュール　豊作
同障会今日は心が浮いている　みつる
今日も亦一歩近づく蓮華の座　美乃留
天皇制ありて日本の今日がある　文古
今日も雨夫に甘栗むいであげ　三香
茶柱に今日の幸せ浮いて見え　和江
今日もまたり社が紙面のトップに出　たみ
日雇夫舌打ちをする今日も雨　承平
今日よりは人のもの也吾が娘　一晄
今日のニュースNHK電波かけ巡る　真女
孫集い今日はケンカの裁き役　行江
平成の天地に立った今日の民　八恵子
老人はなにをするにも今日の内　健太郎

高槻川柳サークル卯の花　河瀬芳子報

深酒はお毒どすえと酌をする　圭坊
紅椿父は深酒悔いている　作二郎
健気にも口だけたたく孫になり　泰弘
一寸の虫健気にも立ち向かう　庸佑
健気さを芯にドラマがよく稼ぐ　景治
健気さの故に艶めく話なく　ふみ
健気だと言われてからのやせ我慢　よ志子
母は息災健気にゆがく春野菜　洋子
猿回し健気な猿へ金を見せ　萬的
疑えばローソクの灯の残り分　森生
言訳を少し疑う顔の色　一進
疑わず大きな花の種を蒔く　尚山
出張が続き疑い深くなる　花代子
警察に届け直ぐには帰れない　陽露子
あの頃は気がひけましたキツネ目で　佐代子
疑いの心は見せず握手する　百合子
疑っているとは知らずよく喋り　白渓子
疑いが互いにあって背を向ける　京童
いつもより出張帰り雄弁で　のり子
町はずれ疑いポンと捨ててくる　房子
疑いもなく捨て犬はついて来る　真笑
チャンスにも気付かぬ二人つつましく　漠沓
偶然にチャンスをくれた春の風　俊子
ライバルと競うチャンスは逃すまい　曲ん手
さあチャンス千秋楽の体当り　稲子
明日逢えるチャンス信じて髪洗う　栄
あかんたれ逃げたチャンスを追いかける　静江
秘仏拝観五十年目というチャンス　とおる
チャンスには弱い男の独り言　正恣
絶好のチャンスに打てぬ四番打者　豊子
転勤をチャンスに別居考える　(松)芳子
眉きりりひいてチャンスにかけてみる　正坊
列抜けるチャンスを狙う蟻も居る　佳秋
チャンス到来ライバルは今二日酔い　俊作
負けだすと味方の愚痴おおくなる　勝一
潔癖が過ぎてポキンと折れる葦　(河)芳子
令夫人御座候に並んでる　多賀子
愛憎や並べて傘が干してある　礫
ポケットにピエロは漫画詰めている　如洲
腹が立ち黄門さんを観ています　スミ子
米洗うたった二合にある平和　〆女
触れる手にほんのり温い冬の鳩　英子
川魚がほしくて錦通り抜け　年代
年金で老婆の趣味が又増える　春風
所在なく靴を磨いて日向ぼこ　行平
早や二月頭の痛い話聞く　美智子
離婚など思ったこともない夫婦　諷云児
そして冬逢いたい人が一人いる　杜的
沢庵のしっぽにぬくい冬がある　和友
春の雪絵になりたくてなりたくて　しげお
車座の笑いを猫が聞いている　紫香

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

財テクにうっかり乗った荷が重い　〆女
お荷物でしょうがと女従いてくる　伊三郎
重い荷がまだ降ろせない父の貨車　諷云児
風呂敷へ包む黄泉への旅支度　定人
ふくらみを持たせ寿の文字を書く　杜的
ふくらんだ蕾に詫びる花鋏　散歩
辛抱せよと言うばっかりでは無責任　保蔵
辛抱をのけたら一日何残る　凡九郎
栄転を見送る辛抱ばかりする　白渓子

親も子も辛抱してる塾通い　(松)芳子
辛抱が続いて母の絵馬を書く　作二郎
ガラクタをどちらも捨てず老夫婦　佳秋
春一番日銀へ行く用が出来　春子
環状線グルッと汚ない屋根も見せ　萬的
さすらいの果てに行きつく母の膝　正一
デジタル時計女の過去を消して春　文夫
嫁の名で是非にと梅へ招かれる　かね子
黒幕の顔をタワシでこすりたい　しげお
あとがないそんな二浪のするタスキ　歌子
街角で別れたくない春の風　曲ん手
税務署を出れば明るい空の色　みち子
妥協ぐせついてしまった夫婦仲　美智子
花時計ぽっかり浮いて春が来る　静夢
ひと言が過ぎてわが身に裁かれる　園歩
夢ばかり見て早起きの春になる　紫香

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

春一番吹いて都に春が来る　たか
旅立ちへ春の余寒も心地良く　澄子
薄揚げの袋に詰めた稲荷寿司　六浦
お水取りすまぬと寒い朝が来る　貞吉
力まずに時の流れに添う夫婦　昌子
水に浮く一円玉も役にたつ　向西
つくし摘み暫く孫と雲に乗る　すみ
甲子園あの日を詰めた砂袋　弘治
人の世をまことで継ぐ紙袋　十四郎
和ませてくれた異郷の道祖神　歌子
背の高い孫で叱れば見下ろされ　江美
出稼ぎの夫を見送る雪の朝　義嗣
弁当がたらず寿司屋で待たされる　敏之
叱られて又叱られる二等兵　保蔵
叱っても凍った道は溶けません　夢之助
温い雨待ってる母の種袋　定人
嘘ばかり言う政治家の贅肉よ　佳秋
呼べばすぐ返事が返ってくる夫婦　美智子
春ですねお金がたんといりますね　〆女
めったには書かぬ母から来た手紙　紫香

川柳泉尾(前月分)　**吉川寿美報**

百鬼夜行紙芝居だよふり向かぬ　美子
父さんの好物だから鰯買う　美南子
大喪で黄砂もしめっておとずれる　三世
赴任地に恙なく来た定年日　満洲子
川柳は喜怒哀楽の吹き溜り　途子
雑草は雑草なりの夢を持ち　文子
鬼は外福は今年も通り抜け　まち子
振袖が優しくさせる二十の娘　きよ子
選抜に春の足音聞く二月　悦子
飾られた人形春の蝶を恋う　トミ子
もの言わぬ人形涙を溜めている　美代子
急ぎすぎリクルート人形丸裸　和子
霊験な竜宮城に月詣り　敏
ホカホカの母の香りの紙袋　恵美
今日も紙面が政治不信をかきたてる　はつ子
紙すきの冷たさを呼ぶ水しぶき　義一
原稿紙作家の嘘を知っている　淑子
便利さが環境汚染の紙オムツ　(宮)美津子
一応練って例年通りの年賀状　伴子
構想を練って世界と輪を結ぶ　シマ子
同窓会練り鍛えてる顔のしわ　敦子
世の風に練られお世辞うまくなり　昭子
十人十色錦の旗へ案を練る　弘子
入浴中都合知らずのベルが鳴る　あさ子
お土産はこちらの都合で軽くなり　靖子
サラリーマン会社の都合で西東　みつ子
かあさんの都合で変る献立表　洋子
都合良く来たタクシーの無愛想　三千代
一徹なご都合主義へ寄り付かず　白水
都合ついた話に風が温かい　シメ子
神さまの死角で欠伸かみころす　寿美

南海川柳会　飯田悦郎報

名も知らぬ小さな花が風にゆれ　庸佑
千年をゆれても耐える五重の塔　勝美
電灯の笠を眺めて庭へ飛び　しんじ
春一番ゆれるがままの蜘蛛の糸　志げ子
揺れるだけ揺れて落着く社の人事　柳宏子
家計簿に必要経費けずられる　とみを
旅鞄母必要を知る用意　喜風
生きてゆく七つ道具に免許証　重人
枯野に立つ小さな春の音を聞く　ダン吉
振り出しに戻す枯野の温い風　甘平
枯野ざわめき諸行無情の雪になる　柳伸
郷里で枯野の父母を探す孤児　東雲
母の墓枯野ヶ原の中に見る　覚然坊
サーカスの危険は別な目で見られ　花仔
実印の危険信号妻が出し　曲ん手
赤信号出てからへらす酒の量　真砂
危険だと知らぬ少女へ赤い紐　悦郎
危険ですおさがり下さい寒い駅　眉水
接続のタッチで泣いたリレー棒　しづ子
昭和から平成接続まだ慣れぬ　山久
乗り換えがうまくゆかずに待つ長さ　信博
接続のバトンを受けとる嫁がくる　凡子
接続の因子バイオに欺される　憲太郎

南大阪川柳会　中川　滋雀報

マンネリを防ぐ仮面をかえてみる　楓　楽
搦手へ石部金吉まわしとく　度
防ぐより攻めて保身を考える　妙　子
ガードマンの数で安心買いました　恒　明
倖せは防衛だけですむ祖国　喜　風
真実を歩む母子の防波堤　覚然坊
雨風を防いだ娘にも虫がつき　公　一
与野党の攻防迫る夏の陣　岩　信
無駄のない釘一本を父が打つ　雀踊子
欲張った分だけ無駄な汗をかく　藤　子
友達とおしゃべりこれも無駄でない　智　子
週休二日時計が無駄を刻んでる　慶　三
無駄骨をいとわぬ蟻の長い列　柳宏子
無駄のない一日だった肩が凝り　凡　子
粗大ゴミ豊かな無駄が捨ててある　曲ん手
無駄口の中へ本音が顔を出す　シメ子
足袋はだし無駄と知ってる百度石　トミ子
無駄に年とってなかった母の知恵　新　造
みの虫も風にまかして生きている　滋　雀
風紋が揺らぐ砂丘の雪時雨　章　久
枯れてても揺らぐ若さは持っている　久　子
ハンサムに揺らぐ若さが少しある　柳　伸
妻と女の分水嶺で風揺らぐ　寿　美
仲人の話に心揺れている　和　子
昭和から平成時代どう揺らぐ　シマ子
誘われて行こうか止めよか曲り角　三恵子
綿密な設計震度6には勝てず　千　梢
揺られての夢は何追うハンモック　しんじ
同類と見られたくない距離をとる　庸　佑
類およぶまでは賛成派にまわり　頂留子
人類を葬るだろうフロンガス　元　紀
めくら判押した書類で身の破滅　ハル子
バッカスへ類を集めて酔い痴れる　章
受け受りへ自社のラベルを派手に貼る　信　治
受け売りの中にひらめくニューモード　憲太郎
受け売りのらしい話で聞き流し　勝　美
受け売りを買い被ってる黙っとこ　文　秋

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

手ほどきはとっくに過ぎて師匠格　寿満湖
一億円並べふるさと創生案　秋　草
ライバルが並ぶ未来の挑戦状　小　生
国会の五目並べはいつ果てる　康　志
パンジーに衣替えした花時計　千代子
祝入学南極からのテレックス　喜美子
抜けているようでしっかり金勘定　さつき
庶民とは時計の違う永田町　柳　風
腹時計ねじを巻いたら寝てしまい　寿　朗
銀行が閉まり三時だなと思う　洋
古時計ネジ巻く指にコツがいる　康　子
日だまりに白菜の尻並べ干す　和　枝
入学も親の脛には気付かない　秋　人
入学に衣裳くらべの花開く　よしえ
手ほどきを受ける俳画にのめりこむ　満　春
ボンボォーン父の時計がずれて鳴る　観　洋
私といると彼の時計が狂い出す　京　子
新婚旅行までに手ほどきしてやろう　完　司
左手で字を書く孫のご入学　ゆり子
肩書の順に並べと書いてない　かつみ
開店の花輪並べるにも序別　雄　々
入学式日の丸あげることでもめ　や　え
間の抜けた猫が一匹うちに居る　秋　女
メシを食うための手ほどき受けてない　次　男
大正の時計うるさいことを言う　とみお
悪女だが恋の手ほどきしてくれる　御　前
鼻毛抜く議員には株は持たされぬ　独　歩
むかしの美女から手ほどきの裏千家　菩　句

駒つなぎ川柳会　里　小路報

青リンゴ熟れてリズムにのる日記　憲太郎
繁昌がうら目倅がぐれてきた　潔
美人から盃くれば断わらぬ　東　雲
返盃の受け方学ぶ一年目　律　子
一番電車車掌も赤い目をしてる　壮之助
日記帳昭和の文字のある表紙　正　弘
福耳の嫁が来てからよく売れる　曲ん手
金粉の浮く盃に祝い歌　千代三
盃が乱れはじめて肩を組み　しんじ
始発まで飲むと決まって腰すえる　庸　佑
絵日記にパパとママとの痴話喧嘩　章　久
脱サラを助けた妻の繁昌記　正　一
盃を伏せて切り出す重大事　頂留子
盃を満たし呑気なことをいう　太茂津
終点で方向音痴が待つ始発　喜代治
平穏な日記余白が多くなる　重　人
ゆっくりと少女が脱皮する日記　雀踊子
繁昌してるお店夫婦も仲がよい　文　秋
盃を返し針路を北へとる　度
野心家の盃たえずよく動き　凡　子
再会の始発駅から喋り出し　冬　葉
産声は人生始発の汽笛かも　善　信
生きているうちは見せたくない日記　射月芳
のれんの重さだけの繁昌でした　白　兎
盃の底から生れてくるコント　幸

暖房がようやく効いてきた始発　素灯
平成元年人それぞれの発車ベル　章
花好きの花の記録も書く日記　勝美
夜の思いがいっぱい書いてある日記　作二郎
御繁昌ですねと寄付を言うて来る　萬的
欲いえば後継ぎがない繁昌記　比沙胡
盃をまわして票を読んでいる　金太
始発駅あついうどんが待っている　美津枝
地下鉄の始発に朝の欲がある　元紀
祝盃はここにも有った刑事の部屋　覚然坊
日記には書けない秘密持っている　月子
繁昌にケチつけそうな消費税　恒明
血より濃い絆を盃に受ける　浩二郎
ガラガラで空気運んでいる始発　柳宏子
三猿を守りとおして来たお猪口　柳伸
魂胆のある盃は軽く干す　小路

川柳泉尾　吉川　寿美報

春浅く青春沈む淀の川　淑子
消費税主婦の買い溜めたかが知れ　満洲子
横に居るステキな夫を忘れがち　伴子
A面もB面もない人の良さ　あさこ
隠された人形次々逮捕され　和子
コートぬぎすて心も軽く春ですよ　途子
酔い心地美女の流し目謎めいて　みつ子
消費税春の嵐とやってくる　敏
謎多き藤の木古墳にみるロマン　文子
親も子も笑顔いっぱい入学式　美南子
謎秘めた微笑みきっと刺がある　昭子
謎めいた言葉もくめる年の功　シマ子
モナリザの謎解けぬまま春の風　弘子
春の野の謎の石仏道しるべ　義一
ハンカチを落した謎について行く　トミ子
若狭の水長旅終えて二月堂　三世
瓶の中もの言いたげに水中花　まち子
背水の陣これで駄目なら諦める　三千代
お水取りゆったり動く春の雲　恵美
火と水の夫婦で結構仲が良い　はつ子
井戸水は古里の味母の味　白水
ころがった土地でゆったり根をおろす　洋子
気短かがゆったり糸を垂らしてる　靖子
ゆったりと母へ流れる舟がある　美子
ふところの寛さへ雑魚を飼っている　美代子
フロンガス地球の水位押しあげる　美津子
土曜日の夜がうれしい共稼ぎ　敦子
水鏡ゆれて本音を問い質す　寿美

むらくも川柳会（前月分）**藤井　明朗報**

盃の数好感の深さ増す　正朗
別室の相談妻も遠慮させ　鶏生
合格の安心　次にくる苦労　秀子
好感のよさ受けとめたタイミング　芳子
はた目にはいつも安心した顔で　はる代
まかせときその一言の安心感　一葉
安心の気持が隙をついてくる　百代
気の乗らぬ相談義理につまされて　福子
安心の夢路をたどる今日の幸　林蔵
何事も姑に相談つつがなし　竹乃
お見合いに好感もてる佳い話　吉野
添え寝してこたつへ母もいい気持　武衛
あなたには好感もって接します　千里
人妻と知ってはいるがいい感じ　義良
外は雪こたつ満員日曜日　島子
好感度わたしの心ゆさぶられ　常子
補乳瓶抱いて安心した寝顔　ヤス子
好感がもてて心の友となる　カツ子
争えぬ齢に積み荷を軽くする　保子
展示会　夢追う女の目が光る　八重子
願い事空にひときわ光る星　さくら
宍道湖の波のきらきらしじみ舟　寿
白星を積んで土俵の鬼となる　節江
淡雪が積もる絵になる障子越し　昭子
好感のもてる家庭に人集う　幸夫
いろいろの花温室は春の彩　筆子
いろいろの思い出残し友は逝く　静子
晩酌のきげんこたつで妻の酌　藤子
家出れば安心ならぬ右左　久仁
寒暖はげし老いはこたつで丸くいる　明朗

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

思うように育ってくれぬ芽が一つ　寿美子
泰山木　大言壮語しそうな芽　薫風
芽の出ない女がくれたチョコレート　博史
若い芽のエリートまじる卒業日　福一
伝統の気品漂う京人形　正坊
聖観音の品位が匂う春の影　萬的
買い物はともかく粗品貰ろてから　杜的
上品な言葉にとげがかくれてる　武庫坊
品のいいおばあさんがいる古い店　紫香
特価品いらない物も買わされる　美智子
品物に添える笑顔に春の客　楠曠
申告をしないヘソクリ持ってます　とく子
申告をしてから後はケセラセラ　慶子
働くの損かと思う申告税　典子
申告を済ませ手酌のにごり酒　洋子
草引きに踏んだ土からクロッカス　登代子

次々と枯葉踏み越え車椅子　つえ子
兵馬俑踏み越えて来た道がある　蕗児
橋脚に踏みつけられた島暮らし　隆
初めての舞台を踏んだトウシューズ　きく子
地団太を踏んだ時から人嫌い　よし子
ジャンボくじ　さて平成へ運だめし　明吉
夫は大器ひとり相撲をとる私　房子
二日とは続かぬ妻の黙秘権　登志実
禅寺に黙していても腹が減り　花村
肩パット少し丸めにしませんか　しげお
変化球　身につけるには遅すぎる　圭坊
鶏呑みした言葉が喉にひっかかる　諷云児

富柳会　池　森子報

一つずつ願いを込めて積み木する　花子
あれこれとたのし一年暮れ近し　静枝
本文は形式追伸に本音　(田)勇
追伸が二伸となって重くなり　(伊)勇
世間知らず積み木の上であぐらかき　智久
苦の種が積み木の彩を塗りかえる　荘次
追伸でちょっと匂わす恋ごころ　文次
妻有情リンゴの皮を長く剝く　曲ん手
ある日ふと妻を忘れていることも　藤子
当方の都合も聞かず寄付の額　冨久一
都合つけ戦友会へまいります　昭水
積み上げた積み木に修羅の過去がある　維久子
保険金受取人にまわる妻　美房
追伸に父もくどくど風邪ひくな　花梢
たこやきを買って帰ると妻の留守　岳人
欲望が強くて積み木高くする　森子

にた川柳会　西村　早苗報

神様も化学の力に及ばない　重一
横文字のジャパン位は読めますが　ちづ
ワープロの一字なん分かけたろう　弘幸
氷水仙供えて昭和史ふり返る　静子
北風がたたくピアノに雪が舞う　哲三
日の丸の鉢巻すぐに締めたがる　雪代
サルと犬利口になってケンカせず　三和
バブ入れて凍てた体を暖める　忠子
向う行きの強い女房がかじを取る　巡歩
痴話喧嘩死角で鬼が煽り立て　紫泉
ハンコ屋が平成の朝間に合わせ　宗光
コロコロと笑えば軽い嫁と言う　裕
拡大鏡短所ばかりを写し出す　夢酔
悪い夢見たとて案じくる電話　秀子
米洗うたった二合にある平和　〆女
何時からか満歳主張の父である　多賀子
熱弁へ水差すようにメモ渡す　花子
酔う程に君がお前になって来る　千草
花道を亡母が迎えにくると言う　雪子
鼻上げてポーズを決める象といる　寿美子
斬る斬る新伍細川リクルート　晴月
代筆がかしこで結ぶ女文字　愚童
楢山へ来てから解けたわだかまり　雄々
ときめきの的を注目してる顔　弘朗
悲しみに負けぬ女のしたたかさ　雀踊子
蛙出る二月の雨が温かい　早苗

川柳高知　川竹　松風報

幸せは明日も続くと終い風呂　春枝
妻だけが祝ってくれた定退日　佳風
燗一つふやして妻の喜寿祝い　竹萌
反省会と言う名目で飲むお酒　かず子
責任を消して反省だけ残り　幸泉
叱ったが孫の寝顔に後悔し　一求
先生が叱るのにいる親の許可　和広
寒椿蝶の居ぬ季をなぜ選ぶ　つるき
寒稽古母が迎えの暖房車　功
あの怪我は治ったろうか寒近し　酒仙
花の種知らぬ他国へ根をおろし　恒子
種籾の逸話を今に千枚田　節子
風船が運ぶ平和の花の種　菊野
ポルノ館女一人に男の目　一郎
スピードにスリルを賭ける青春譜　千恵子
焼き芋の匂い作業の手を止める　朱坊
本当に叱る構えの正座する　松風

川柳後楽　井上柳五郎報

姉さんの義理チョコちょっぴりはずかしい　青銅
久し振りの握手しびれるほど握り　哲郎
待つことにしびれも切れる愛も切れ　美智子
八起き目へしびれに耐えて妻子待ち　柳五郎
幸せにしびれて立てぬ日が恐い　たけ志
民事裁判すっかり家の恥を出し　美代子
更生を誓う後から二度の恥　博友
無恥という味方があった主導権　草風
恥知らぬ祖父は仏の顔に似る　照路
世界中の眼集めて悪魔の詩　吟平
自治体を迷わす一億円の使途　秋月
同日戦ないないというかくれみの　佐加恵
控え目な女が無心に鬼面彫る　玉水
警策が無心に戻す座禅場　金吾
無心という二文字が好きでまた走る　健一
青空に無心という字を書いてみる　拓治
母の笛無心に動く縄電車　義親
しびれ薬飲んで男の掌に眠る　桃風

むらくも川柳　**藤井明朗報**

しあわせは朝の茶筅にあるゆとり　正朗
お早うさん軒の雀もいい機嫌　芳子
お早うを交えて家の輪のぬくみ　秀子
ああ今日も生きてる実感朝の床　一葉
ふんふんと聞いて約束忘れてる　鶏生
約束の時間気になるお茶を注ぐ　はる代
約束を破りあとからつけが来る　百代
うぬぼれは危い橋の渡りぞめ　林蔵
朝参り高い石段登りつめ　武衛
へそくりをあの手この手で貯めている　島子
うぬぼれを言い聞かすのも身内です　千里
テーブルに皆な生き生き朝の顔　常子
約束も天気予報に左右され　仲子
飛行機で受験に発つ子祈る朝　寿
悲喜こもごも発表された掲示板　昭子
早春の日射しいっぱい発芽そこ　節江
出発を見送る駅にあるドラマ　ふさえ
発案のアイデア生かす主婦の知恵　さくら
立喰いのそばあわてさす発車ベル　八重子
新発売チラシの中に跳る文字　保子
約束を破るいらだち石を蹴る　巡歩
発車まで親子別れの駅ホーム　幸夫
うぬぼれの一つ位はもつ男　義良
おたがいのへそくり夫婦つつがなし　明朗

川柳東大阪（前月分）　**森下愛論報**

順調なスタートあとは運次第　孤舟
才媛と秀才で発つハネムーン　雅士
スタートの頃は優しい妻でした　勝美
スタートに敵も味方もない決意　喜風
悲しい日鏡の奥に亡母探す　柳宏子
世辞一つ言わぬ鏡がにくらしい　頂留子
水槽の炎が鏡からもれる　元紀
陶工が炎を読んでる無の時間　雀踊子
希望通り行くと過保護は思い込み　文秋
希望する額には不足お年玉　白屯
少年の希望が親にでかすぎる　湖風
ご希望にそえぬと座長素気ない　慶三
町娘誰を待つやら花時計　百合枝
まだ少し国訛りある町娘　晋吾
町娘センスの違い感じさせ　庸佑
人様に見せぬ涙で鶴を折る　悦郎
鶴を見るテレビで見てる雪の里　美津留
越年の鶴は少うし肥え気味で　度
暖冬へふと戸惑った鶴の群れ　白兎

川柳東大阪　森下愛論報

ひっそりと喜びくれる雪の夜　度
古い絵の中で妖もる雪おんな　湖風
雪登山母のお守り背に弾む　喜風
雪吊りの雪が風情をもりあげる　庸佑
真心も虚栄も包むのし袋　孤舟
残り火も包んだ寡婦の黒い服　雅士
感動が部屋を包んだいい話　信治
紫に疑惑も包んであるふくさ　勝美
母の手を包む娘の里帰り　覚然坊
十二単衣寒さを包む流し雛　章久
骨組みはマンションらしい地鎮祭　頂留子
地上げ屋に狙われそうなボロ屋敷　美子
母の鞭ゆるく狙いを外さない　晋吾
狙ってた彼女丹波にいにました　慶三
素顔のない忍者の命すきとおり　雀踊子
忍者になれんよ高所恐怖症　恒明

川柳サークル卯の花
5周年記念川柳大会

とき　5月17日（水）正午開場
ところ　高槻市民会館4F402号
（阪急高槻市駅下車南へ徒歩7分）
会費　1000円（粗品・発表誌呈）
柳話　「辞世・名吟あれこれ」　古下俊作氏
題と選者（三才呈賞）
「五」　黒川紫香選
「丸い」　奥山晴生選
「華やか」　墨作二郎選
「集う」　岩井三窓選
「貫録」　西尾栞選
＊席題なし　投句拝辞
締切　午後2時（各題2句以内）
照会先　辻白渓子
○七二六—96—四〇二三
川島諷云児
○七二六—96—二七六五
主催　川柳サークル卯の花
後援　高槻市教育委員会
高槻市文化団体協議会
日本川柳協会
川柳塔社

新家完司川柳集

平成元年

A5判　94頁
頒価　1000円（送料 200円）
〒689-24　鳥取県東伯郡東伯町徳万597 新家完司
郵便振替　松江0-9685（赤碕川柳会句集刊行係）

故操子さん供養のため
高橋家から
金一封拝受いたしました

川柳塔社

津山市芸術祭

第11回津山川柳大会

とき　6月4日（日）午前10時開場
ところ　美作教育会館大ホール
（津山駅から徒歩で5分）
会費　一、〇〇〇円（作品発表誌呈）
お話　定金冬二
兼題と選者
「情」　池田南岳
「温もり」　西田柳宏子
「水」　大西泰世
「朝」　梶川雄次郎
「黒」　吉田右門
「酒」　山本翠公
「隅」　小菅裕子
「問う」　荒井慶子
「教師」　北村泰章
「壁」　森田栄一
各題2句宛（欠席投句拝辞）
出句締切　午前11時半
各題特選3句に呈賞
主催　津山市教育委員会

川柳塔まつえ
復刊20周年記念川柳大会

日時　6月11日（日）午前10時開場
会場　松江市中原町　婦人会館
当日会費　三〇〇〇円（小宴を含む）
第一部　事前投句（出・欠席を問わず）
宿題　「相手」　古割舞吉選
「ふくらむ」　小西雄々選
「席」　津川紫吻選
事前投句は出席・欠席にかかわらず、便箋一枚に各題ごと2句連記、投句料五〇〇円（小為替）を添え、**5月末日（必着）**で送付のこと。
第二部（出席者のみ）
宿題　「横顔」　恒松叮紅選
「才能」　本庄快哉選
「味」　久家代仕男選
「スタート」　小林由多香選
「未来」　田中好啓選
「旗」　大森風来子選
「旅」　西尾栞選
柳話　川柳塔社副主幹　橘高薫風氏
各題2句、席題なし、出句締切正午
昼食は各自でおすませください。
事前投句の投句先
〒690松江市雑賀町一六八六　恒松叮紅方
川柳塔まつえ

5月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	5日(金)午後1時から 歩く・難色・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
堺川柳会	7日(日)午後1時から 利用・リモコン・陸・立派	堺総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堺上緑町2－9－2　河内天笑
川柳塔 まつえ	7日(日)　正午開会 大臣・遊ぶ・糸口・手作り・デマ	くにびき会館　松江市東朝日町 駅から5分　くにびき大橋南詰喫茶「山茶花」2階 屋上コカコーラの看板が目印 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 都会・顔・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
八尾市民 川柳会	10日(水)午後6時から ブローチ・絵具・灯・答え	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2－141　飯田悦郎
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 捨てる・姿・隙	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市鷲町15　野村太茂津 句会費 300円　投句料 72円切手3枚
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から 外・ホテル・開く・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
富柳会	18日(木)午後1時から 寝入り端・値引き・年輪	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353　池 森子
南大阪 川柳会	19日(金)午後6時から 脅える・好寄・外面・吐息	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
南海 川柳会	19日(金)午後6時から 蕾・補修・場面・会話	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
川柳 ねやがわ	21日(日)午後1時から 譲る・お茶・無口・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6－9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	22日(月)午後6時から 誓う・ゆっくり・困る・付き合い	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11　津守柳伸
川柳 東大阪	27日(土)午後6時から カメラ・すてき・殿様・ずるい	東大阪市社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
※高槻川柳サークル卯の花は17日(水)5周年記念川柳大会のため別掲参照		

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（郵券可）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

本社5月句会

日時　五月八日（月）午後六時
会場　メンズファッションセンター3階
東区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角
おはなし　河内天笑
兼題「ランプ」　奥田みつ子選
「礼儀」　堀端三男選
「動く」　野村太茂津選
「面」　西尾栞選
席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　五百円

★投句は柳箋（4cm×19cm）に一葉一句。
各葉ごとに裏面に必ず**氏名明記**。
投句料 **310円**（62円切手5枚）同封のこと。

川柳塔社

6月の兼題　「惜しい」「歩く」「地図」「円」

西日本文字放送作品募集

題「返事」　橘高薫風選
3句　締切 **5月15日**
ハガキに明記の上、下記へご投句下さい
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2－20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

『夜市川柳』募集

第12回　「乳房」　橘高薫風選
締切　5月末日
投句先　〒593 堺市堀上緑町2－9－2
河内天笑方　堺川柳会

●募集●

七月号発表（5月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）小出智子選
「砂」　山口高明選
課題吟（5句）
「風鈴」　丸山よし津選
「蹴る」　吉岡美房選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）小出智子選
「強い」　川島諷云児選
課題吟（5句）
「山」　遠山可住選
「雑巾」　羽津川公乃選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

6月の本社句会は7日（水）

定価　五百円（送料51円）
半年分　三千八百円（送料共）
一年分　七千五百円（送料共）
一九八九年四月二十五日印刷
一九八九年五月一日発行
編集兼発行人　西尾巖
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六二九―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆四月四日の土居耕花さんのお葬式に行く。

☆三日のお通夜には、来合わせた田中好啓さん、寺尾俊平さん、大原川柳会の人たち、川柳人ばかりで般若心経を唱和した。

☆私は子供の頃、田舎の野辺送りをたびたび経験したが、現在街で営まれる告別式でも葬儀でもないお葬式を久しぶりに目前にして、感慨深いものがあった。

☆素朴な輦を親族の若者が担ぎ、輦の前後の善と呼ぶ白布の帯紐を、これも親族の女性が手にして家の前で「三回まわし」を行う。野位牌、四本旗、花籠、死花などを持った列が死者の骸と霊を送る。

☆道端には、土筆、たんぽぽ、犬ふぐりが、また折りから満開の桜が咲き、うぐいすの声がのどかさを一層強調する。春光天地に溢れまことに耕花さんのお人柄そのものの浄土世界だった

☆昭和天皇大葬の日をはじめ、来し方の数多くの死者との別れを想起して、自然はおおむね故人にふさわしい演出をするように感じた

☆「安らかな地下三尺の巣に帰る」二月下旬の岡山の西大寺会陽川柳大会秀句が辞世となり、賞品の大きなメダルが遺影を飾っていた

☆耕花さんは、あれ程個性的なユーモアの佳句を得ながら、死を前にして、数多く得た友情に比べると自分の句などはたかが知れたものだと述懐されたという。

☆素朴な輦を親族の若者が担ぎ、輦の前後の善と呼ぶ白布の帯紐を、これも親族の女性が手にして家の前で「三回まわし」を行う。野位牌、四本旗、花籠、死花などを持った列が死者の骸と霊を送る。

☆道端には、土筆、たんぽぽ、犬ふぐりが、また折りから満開の桜が咲き、うぐいすの声がのどかさを一層強調する。春光天地に溢れまことに耕花さんのお人柄そのものの浄土世界だった

☆昭和天皇大葬の日をはじ

言葉に、和やかで熱い大会になるよう、大方のご支援をお願いします。（薫）

▼「土地を国民に平等に分配せよ」と、主張した者がいて、発言禁止を命じられたと時事新聞に載った。これは明治二十二年の話で、今から丁度百年前である。

▼「消費者は黙って支払えばよい」これは平成元年二月十七日、大蔵省首脳の発言である。また「免税業者だから、消費税を払わないという客がいたら、業者は売らなければよい」と、三月二十四日、西垣大蔵省事務次官が発言している。

▼土地に対する国民の発言と、消費税に対する政府筋の発言の間に百年の歴史と歳月があり、どちらに主権在民の姿を見ることができるだろうか。

▼四月一日エープリル・フールでなく、消費税なるものが現実になった。「消費税をとってもいい、とらなくてもいい。そんなばかなことがどうして通用するのだろうか。お客から預かった公金を政府に納付しないで懐にしても良いとは、犯罪を奨励する事にほかならない」と〝天声人語〟の三月のことば抄録にあった。

▼「高齢化社会に向ってやむを得ない税法」と言われても、その時代まで生きて責任を持って下さる保証もない。お金に弱いだるま芸者の起請など信じられますか。

▼あまりお上を批判すると、電話に盗聴器を仕掛けられ荒縄で縛られた上、裸馬に乗せられ市中引き廻しの刑にされかねない。（き）

★「東郷のつぎは東条教える気」―あたらしい学習指導要領で、日本史で教えなければならない偉人の中に東郷平八郎元帥が登場するというのでおどろいていたら、こんどは自衛隊の階級呼称として旧日本軍のそれを復活させることを検討中だという。また、「少尉」や「大将」がノコノコと生きかえってくると、戦争中の悪夢がよみがえる。

★五月二十七日はむかしの海軍記念日。一九〇五（明治三十八）年の日本海海戦で東郷ひきいる連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を壊滅させた日である。そこでこの日は、旧日本海軍の「栄光」の日となり、東郷は「聖将」として海軍に君臨することとなった。

★しかし、これは表向きの話で、阿川弘之著『井上成美』によると、海軍部内ではその肖像を商標としていた「東郷ハガネ」をもじって「東郷バカネ」とささやかれ、頑迷固陋な老提督としてうとんじられていたという。実像と虚像は、往々にしてことなるようだ。

★この月でまたわすれられないのは五・一五事件。一九三二（昭和七）年五月十五日、三上卓海軍中尉ら九名が首相官邸をおそい、拳銃で犬養毅首相を射殺している。この事件以後、十四年間つづいた政党内閣は断絶、日本の政治はファシズムへ旋回していったのである―「問答は無用にあらず」（正）

木堂忌　正坊

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成元年四月二十五日　印刷
平成元年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七四四号　川柳塔　五月号
定価　五百円（送料　五十一円）

KIRIN
21世紀へ乾杯
本格派。
旨さの辛口。
アルコール度数高め
キリッとしまるドライ。
キリンビール株式会社
キリンドライ
標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

5つの個性・5つの色味!!
アイスキャンデー
ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時

なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店
サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店
なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店

551 HORAI
大阪・なんば
蓬莱
TEL 641—0551

雑誌　05703—5